仙台市文化財調査報告書第498集

穴田東窯跡 ほか

発掘調査報告書

穴田東窯跡第１次、富沢遺跡第151・152次、
富沢館跡第20・21次、京ノ中遺跡第３次

2022年４月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第498集

穴田東窯跡（あなだひがしかまあと）ほか

発掘調査報告書

穴田東窯跡第１次、富沢遺跡第151・152次、
富沢館跡第20・21次、京ノ中遺跡第３次

2022年４月

仙台市教育委員会

序　　文

仙台市の文化財保護行政に対しまして、日頃からご理解、ご協力を賜り、感謝申し上げます。

仙台市内には旧石器時代から近世にいたるまで数多くの埋蔵文化財が残っております。これらの一つ一つは、先人たちが残した貴重な文化遺産です。

平成23年３月11日の東日本大震災より11年が経ち、復興・創生期間６年目を迎えておりますが、個人住宅等の建築に伴う発掘届や発掘調査の件数は、平成23年度以降、震災前を上回る状況が続いております。仙台市教育委員会といたしましては、復旧・復興事業との調整を図りながら、埋蔵文化財の保護と啓発に日々努めているところです。

本報告書には、各種事業に伴って令和２年度から令和３年度にかけて発掘調査を実施した、穴田東窯跡第１次、富沢遺跡第151・152次、富沢館跡第20・21次、京ノ中遺跡第３次調査の調査結果を収録しています。

文化財は、地域の歴史を伝えるために将来へ守るべき大切な財産です。先人たちの残した貴重な文化遺産を保護し、保存活用を図りつつ、次の世代へと継承していくことは、現代に生きる私たちの使命であると思います。地域が育んだ文化を語る上で歴史や文化資源がその根底をなしているからです。つきましては、本報告書が学術研究のみならず学校教育や生涯学習などの文化活動に寄与し、皆様の埋蔵文化財へのより深い関心とご理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、今回の調査や報告書の作成に際して、ご協力いただいた多くの方々に心より深く感謝申し上げ、お礼の言葉とさせていただきます。

令和４年４月

仙台市教育委員会
教育長　福田　洋之

例　　言

１．本書は、令和２年度から令和３年度にかけて実施された各種開発事業に伴う発掘調査報告書であり、穴田東窯跡第１次、富沢遺跡第 151・152 次、富沢館跡第 20・21 次、京ノ中遺跡第３次の各発掘調査報告を合本にしたものである。

２．本書の本文執筆・挿図・表・写真図版の作成等については以下のように分担し、編集は及川謙作が行った。

第１・２・６章－及川謙作　　第３章－早川太陽　　第４章－木村　恒　　第５章－澤目雄大

遺物の基礎整理～実測図作成－斎野裕彦、澤目雄大、木村　恒、柳澤　楓、向田文化財整理収蔵室作業員

遺物図・遺構図デジタルトレース－向田文化財整理収蔵室作業員

遺物観察表作成－斎野裕彦、澤目雄大、木村　恒、柳澤　楓　　遺構註記表作成－各担当職員

遺物写真撮影・図版作成－向田文化財整理収蔵室作業員　　遺構写真図版作成－各担当職員

３．本書の内容は、すでに公開されている遺跡見学会資料や、各種の発表会資料に優先する。

４．発掘調査および報告書作成にあたり、下記の方々および事業者から多くのご協力を賜った。記して感謝の意を表す次第である。（敬称略）

株式会社徳田工務店　　副都心開発株式会社　高橋佐代子　大和ハウス工業株式会社　　本多　茂

株式会社　同事

５．本書に係る出土遺物、実測図、写真などの資料は仙台市教育委員会が保管している。

凡　　例

１．本文中の「遺跡と周辺の遺跡図」は、国土地理院発行の２万５千分の１地形図を、また、「調査区位置図」などは仙台市発行の２千５百分の１都市基本図等を、それぞれ修正して使用した。

２．図中の座標値は世界測地系を使用している。

３．遺構の略称は以下の通りで、遺構番号は各調査別の通し番号である。

SB：掘立柱建物跡　SD：堀跡・溝跡　SE：井戸跡　SK：土坑　SO：窯跡　SR：自然流路跡

SX：性格不明遺構　P：ピット

４．遺物の略称は以下の通りである。

A：縄文土器　B：弥生土器　C：土師器（非ロクロ調整）　D：土師器（ロクロ調整）・赤焼土器

E：須恵器　F：丸瓦　G：平瓦　H：その他の瓦　Ia：土師質土器　Ib：瓦質土器　Ic：陶器

J：磁器　K：石器・石製品　L：木製品　N：金属製品　O：自然遺物　P：土製品

５．土色については、「新版標準土色帳」（小山・竹原 1999）を使用した。

６．遺構図に使用したスクリーントーンは以下の通りである。また、各図に必要に応じて凡例を付した。

：柱痕跡

７．遺物実測図に使用したスクリーントーンは以下の通りである。

：黒色処理　：敲打痕

８．遺物観察表の（　）がついた数値は図上復元した推定値である。

９．遺物写真の縮尺は、遺物図版に掲載した同一個体のそれに準ずる。また、異なる場合は各写真図版の右下に表記している。写真掲載のみの遺物は、特別な記載がない限り３分の１で掲載している。

10．本文中の「灰白色火山灰」（庄子・山田 1980）はこれまでの仙台市域の調査報告や東北地方中北部の研究から、「十和田ａ火山灰（To - a)」と考えられている。その降下年代は西暦 915 年と推定されている。

庄子貞夫・山田一郎　1980　「宮城県北部に分布する灰白色火山灰について」『多賀城跡 - 昭和 54 年度発掘調査概報』宮城県多賀城跡調査研究所

仙台市教育委員会　2000　『沼向遺跡　第１～３次発掘調査』 仙台市文化財調査報告書第 241 集

小口雅史　2003　「古代北東北の広域テフラをめぐる諸問題―十和田ａと白頭山（長白山）を中心に」『日本律令制の展開』吉川弘文館

11．穴田東窯跡における自然科学分析（炭化材の樹種同定と花粉分析）に関しては古代の森研究舎に業務を委託した。

目　　次

第１章　調査計画と実績 …… 1
　第１節　調査体制 …… 1
　第２節　調査計画 …… 1
　第３節　調査実績 …… 1
第２章　穴田東窯跡の調査 …… 3
　第１節　遺跡の概要 …… 3
　第２節　第１次調査 …… 4
　　１．調査要項　２．調査に至る経過と調査方法　３．基本層序
　　４．発見遺構と出土遺物　５．まとめ　６．穴田東窯跡から出土した炭化材の樹種同定と花粉分析
第３章　富沢遺跡の調査 …… 35
　第１節　遺跡の概要 …… 35
　第２節　第 151 次調査 …… 37
　　１．調査要項　２．調査に至る経過と調査方法
　　３．基本層序　４．発見遺構と出土遺物　５．まとめ
　第３節　第 152 次調査 …… 56
　　１．調査要項　２．調査に至る経過と調査方法
　　３．基本層序　４．発見遺構と出土遺物　５．まとめ
第４章　富沢館跡の調査 …… 61
　第１節　遺跡の概要 …… 61
　第２節　第 20 次調査 …… 62
　　１．調査要項　２．調査に至る経過と調査方法
　　３．基本層序　４．発見遺構と出土遺物　５．まとめ
　第３節　第 21 次調査 …… 70
　　１．調査要項　２．調査に至る経過と調査方法
　　３．基本層序　４．発見遺構と出土遺物　５．まとめ
第５章　京ノ中遺跡の調査 …… 75
　第１節　遺跡の概要 …… 75
　第２節　第３次調査 …… 75
　　１．調査要項　２．調査に至る経過と調査方法
　　３．基本層序　４．発見遺構と出土遺物　５．まとめ
第６章　総括 …… 89

挿図目次

第１図　令和２～３年度調査地点位置図
(国土地理院地図を一部改変)･････････ 2
第２図　台原・小田原窯跡郡周辺遺跡地図
(国土地理院地図・色別標高図使用)･･･ 3
第３図　第 1 次調査区位置図･････････････････ 4
第４図　第 1 次調査区配置図･････････････････ 5
第５図　第 1 次調査区現況測量図･････････････ 6
第６図　第 1 次調査区遺構配置図･････････････ 7
第７図　調査区北・東壁、S01・2 窯跡、SD1・2 溝跡、
1・2 号灰原土層断面図 ･････････････････ 8
第８図　S01 窯跡出土遺物（1）･････････････････ 9
第９図　S01 窯跡出土遺物（2）･････････････････ 10
第 10 図　S01 窯跡出土遺物（3）･････････････････ 11
第 11 図　S01 窯跡出土遺物（4）･････････････････ 12
第 12 図　S01 窯跡出土遺物（5）･････････････････ 13
第 13 図　S01 窯跡出土遺物（6）
・1 号灰原出土遺物（1）･････････････････ 14
第 14 図　1 号灰原出土遺物（2）･････････････････ 15
第 15 図　S02 窯跡・2 号灰原土層断面図･････････ 16
第 16 図　S02 窯跡出土遺物（1）･････････････････ 17
第 17 図　S02 窯跡出土遺物（2）･････････････････ 18
第 18 図　S02 窯跡出土遺物（3）
・2 号灰原出土遺物 ･････････････････････ 19
第 19 図　遺構外出土遺物（1)･････････････････ 20
第 20 図　遺構外出土遺物（2)･････････････････ 21
第 21 図　灰原から検出されたシダ植物胞子･･････ 25
第 22 図　富沢遺跡と周辺の遺跡･････････････････ 35
第 23 図　富沢遺跡 151・152 次調査区位置図･････ 36
第 24 図　第 151 次調査区配置図･････････････････ 37
第 25 図　第 151 次調査区全体平面図･････････････ 40
第 26 図　調査区北壁断面図･････････････････････ 41
第 27 図　調査区西壁断面図･････････････････････ 42
第 28 図　調査区南壁断面図･････････････････････ 43
第 29 図　Ⅲ層およびⅣ層平面図･････････････････ 44
第 30 図　Ⅶ層平面図･･････････････････････････ 45
第 31 図　第 152 次調査区配置図･････････････････ 56
第 32 図　調査区平・断面図･････････････････････ 58
第 33 図　富沢遺跡における
条里制土地割推定図･････････････････････ 59
第 34 図　富沢館跡と周辺の遺跡･････････････････ 61
第 35 図　第 20・21 次調査区位置図･････････････ 62
第 36 図　第 20 次調査区配置図･････････････････ 62
第 37 図　1 トレンチ平・断面図 ･････････････････ 64
第 38 図　2 トレンチ平・断面図 ･････････････････ 65
第 39 図　3 トレンチ平・断面図 ･････････････････ 66
第 40 図　4 トレンチ平・断面図 ･････････････････ 67
第 41 図　第 21 次調査区配置図･････････････････ 70
第 42 図　第 21 次調査区平・断面図･････････････ 71
第 43 図　富沢館跡　検出溝跡位置図･････････････ 73
第 44 図　京ノ中遺跡と周辺の遺跡･･･････････････ 75
第 45 図　第３次調査区位置図･･･････････････････ 76
第 46 図　第３次調査区配置図･･･････････････････ 76
第 47 図　調査区平・断面図（１）･････････････ 77・78
第 48 図　調査区断面図（２）･････････････････ 79・80
第 49 図　第３次調査区出土遺物（１）････････････ 82
第 50 図　第３次調査区出土遺物（２）････････････ 83

挿表目次

表１　令和２年度　公共・民間各種事業に伴う発掘調査一覧 …… 2
表２　令和３年度　公共・民間各種事業に伴う発掘調査一覧 …… 2
表３　穴田東窯跡第１次調査区から出土した遺物の破片数および重量一覧表 …… 23
表４　穴田東窯跡出土炭化材の樹種 …… 24
表５　2 号灰原 1・2 層 No. 3 資料から検出された花粉胞子石の一覧表 …… 25
表６　土層対応表 …… 38
表７　遺物観察表 …… 46

写真図版目次

写真図版１　穴田東窯跡第 1 次調査（1）…… 26
写真図版２　穴田東窯跡第 1 次調査（2）…… 27
写真図版３　穴田東窯跡第 1 次調査
出土遺物（1）…… 28
写真図版４　穴田東窯跡第 1 次調査
出土遺物（2）…… 29
写真図版５　穴田東窯跡第 1 次調査
出土遺物（3）…… 30
写真図版６　穴田東窯跡第 1 次調査
出土遺物（4）…… 31
写真図版７　穴田東窯跡第 1 次調査
出土遺物（5）…… 32
写真図版８　穴田東窯跡第 1 次調査
出土遺物（6）…… 33
写真図版９　穴田東窯跡第 1 次調査
出土遺物（7）…… 34
写真図版 10　富沢遺跡第 151 次調査（1）…… 48
写真図版 11　富沢遺跡第 151 次調査（2）…… 49
写真図版 12　富沢遺跡第 151 次調査（3）…… 50
写真図版 13　富沢遺跡第 151 次調査（4）…… 51
写真図版 14　富沢遺跡第 151 次調査（5）…… 52
写真図版 15　富沢遺跡第 151 次調査（6）…… 53
写真図版 16　富沢遺跡第 151 次調査（7）…… 54
写真図版 17　富沢遺跡第 151 次調査出土遺物 …… 55
写真図版 18　富沢遺跡第 152 次調査 …… 60
写真図版 19　富沢館跡第 20 次調査（1）…… 68
写真図版 20　富沢館跡第 20 次調査（2）…… 69
写真図版 21　富沢館跡第 21 次調査 …… 74
写真図版 22　京ノ中遺跡第３次調査（1）…… 85
写真図版 23　京ノ中遺跡第３次調査（2）…… 86
写真図版 24　京ノ中遺跡第３次調査（3）…… 87
写真図版 25　京ノ中遺跡第３次調査出土遺物 …… 88

第１章　調査計画と実績

第１節　調査体制

調査主体　　仙台市教育委員会

調査担当　　仙台市教育局生涯学習部文化財課

令和２年度

【文化財課】　課　長　　長島栄一

【調査調整係】　係　長　　平間亮輔　　主　査　　栗和田祥郎　　近藤勇亮

主　任　　及川謙作　　小浦真彦　　尾形隆寛

主　事　　澤目雄大　　妹尾一樹　　相川ひとみ　　柳澤　楓　　木村　恒

専門員　　斎野裕彦　　会計年度任用職員　　篠原信彦

【整備活用係】　係　長　　工藤慶次郎　　主　査　　元山祐一　　総括主任　　高橋勝枝

主　任　　堀越　研　　佐藤文征　　主　事　　庄子裕美　　五十嵐　愛

令和３年度

【文化財課】　課　長　　都丸晃彦　　主　査（調整担当）　長島栄一

【調査調整係】　係　長　　平間亮輔

主　査　　及川謙作　　近藤勇亮　　菅原翔太　　主　任　　堀江洋介

主　事　　庄子裕美　　澤目雄大　　相川ひとみ　　柳澤　楓　　木村　恒　　早川太陽

専門員　　斎野裕彦　　会計年度任用職員　篠原信彦

【整備活用係】　係　長　　工藤慶次郎　　主　査　　元山祐一　　小浦真彦

主　任　　堀越　研　　勝又　康　　主　事　　五十嵐　愛　　妹尾一樹

専門員　　荒井　格

第２節　調査計画

国、宮城県、仙台市が実施する各種の整備事業（公共事業）および民間の開発に伴う発掘調査を想定し、計画した。

第３節　調査実績

令和２年度～令和３年度（令和３年２月～令和３年 12 月）にかけて実施された調査は表１、２の通りで、公共事業が４件、民間開発が 25 件、合計 29 件である。本書に収録したのはこのうちの４件と、それ以前に実施した２件の合計６件である。

表１　令和２年度　公共・民間各種事業に伴う発掘調査一覧

図No.	調査No.	公共・民間	遺跡名	所在地	調査原因	対象面積（㎡）	調査面積（㎡）	調査期間	遺構・遺物	届出等No.	報告書
2-1	R2-47	民間	堤町瓦窯跡	青葉区堤町三丁目	共同住宅	246	42.0	2月8日～10日	遺構なし・陶器多（盛土内.）	R2 102-80	—
2-2	R2-48	民間	京ノ中遺跡隣接地	太白区京ノ北	共同住宅	646	75.0	2月8日～10日	溝跡2、土坑	R2 102-86	—
2-3	R2-52	公共	鴻ノ巣遺跡隣接地	宮城野区岩切	道路拡幅	300	25.0	3月1日～4日	溝跡2・遺物なし	—	—
2-4	R2-53	民間	京ノ中遺跡	太白区京ノ北	共同住宅	646	267.0	3月4日～25日	調査中	R2 102-86	第３次
2-5	R2-57	民間	南小泉遺跡	若林区古城三丁目	事務所兼工場	640	54.0	3月17日～18日	遺構・遺物なし	R2 102-70	—
2-6	R2-58	民間	中田畑中遺跡	太白区袋原六丁目	建売住宅	63		3月22日～26日		R2 101-436	—

（令和３年２月１日～３月31日）

表２　令和３年度　公共・民間各種事業に伴う発掘調査一覧

図No.	調査No.	公共・民間	遺跡名	所在地	調査原因	対象面積（㎡）	調査面積（㎡）	調査期間	遺構・遺物	届出等No.	報告書
3-1	R3-1	民間	上杉六丁目遺跡	青葉区上杉６丁目	建売住宅４棟	212	48.0	4月5～8日	溝跡1、遺物なし	R2 102-113	—
3-2	R3-4	民間	下ノ内浦遺跡	太白区長町南４丁目	共同住宅	133	18.0	5月10～12日	溝跡1、土坑1、遺物少量	R2 102-129	—
3-3	R3-5	民間	高江遺跡ほか	宮城野区岩切字今市東外	区画整理	486,000	770.0	5月10日～8月11日	弥生土器	H31 102-60	—
3-4	R3-6	公共	日向遺跡	青葉区作並	国道拡幅	440	121.1	5月10日～7月1日	倒木痕、遺物僅少	R2 103-113	第496集
3-5	R3-8	公共	荒浜浄土寺板碑	若林区荒浜字西	地区整備	—	15.0	5月25日	遺構・遺物なし	R2 103-126	—
3-6	R3-13	民間	穴田東窯跡	青葉区堤町２丁目	共同住宅	158	70.8	7月8日～30日	窯体2・灰原、瓦多量	R3 109－36	第１次
3-7	R3-14	民間	鴻ノ巣遺跡	宮城野区岩切字鴻ノ巣	建売住宅	61	10.5	7月19日	土坑1、遺物なし	R3 108－134	—
3-8	R3-17	民間	戸ノ内遺跡	太白区四郎丸神明	建売３棟	172	24.0	8月2日～4日	溝跡1、ピット3、遺物僅少	R3 109－42	—
3-9	R3-18	公共	郡山遺跡	太白区郡山６丁目	小学校校舎	730	60.0	8月2日～6日	遺構・遺物なし	R3 102－22	—
3-10	R3-19	公共	梨野Ｃ遺跡	太白区茂庭立石	浄化槽	8	8.0	8月10日	盛土内	R3 103－17	—
3-11	R3-20	民間	富沢遺跡	太白区長町南３丁目	共同住宅	354	80.0	8月23日～10月20日	水田跡	R3 109－21	第151次
3-12	R3-24	民間	入生沢遺跡	宮城野区岩切入生沢	建売住宅	65	15.0	9月14日～15日	ピット1、遺物なし	R3 109－70	—
3-13	R3-25	民間	鍛冶屋敷Ａ遺跡	太白区富沢西２丁目	保育所	1364	36.0	9月21日～22日	土坑2・ピット5、遺物僅少	R3 109－76	—
3-14	R3-26	民間	六本松遺跡隣接	太白区富沢西３丁目	老人ホーム	1175	60.0	9月27日～28日	遺構・遺物なし	R3 109－59	—
3-15	R3-29	民間	羽黒堂遺跡	太白区山田本町	建売３棟	184	27.0	10月18日～21日	盛土内1、遺構・遺物なし2	R3 109－82	—
3-16	R3-30	民間	羽黒堂遺跡	太白区山田本町	建売２棟	130	18.0	10月22日～25日	盛土内1、遺構・遺物なし1	R3 109－71	—
3-17	R3-31	民間	大野田遺跡	太白区大野田５丁目	事務所	317	120.0	10月25日～12月24日	溝跡・遺物包含層	R3 108－55	次年度以降
3-18	R3-36	民間	鍛冶屋敷前遺跡	太白区富沢西４丁目	共同住宅	1523	74.4	12月13日～14	遺構なし、遺物僅少	R3 109－87	—
3-19	R3-40	民間	富沢遺跡	太白区鹿野３丁目	共同住宅	117	24.0	12月6日～10日	遺構なし、遺物僅少	R3 109－85	第152次
3-20	R3-42	民間	南館跡ほか	青葉区上愛子	区画整理	76000	調査中	12月6日～	調査中	R2 102－120	—
3-21	R3-43	民間	新道遺跡	泉区七北田字白水沢	共同住宅	236	27.0	12月6日	遺構・遺物なし	R3 108－321	—
3-22	R2-43	民間	今泉遺跡	若林区今泉２丁目	宅地造成	876	95.0	12月20日～23日	堀跡など、陶器	R3 109－91	次年度以降

（令和３年４月１日～令和４年12月31日）

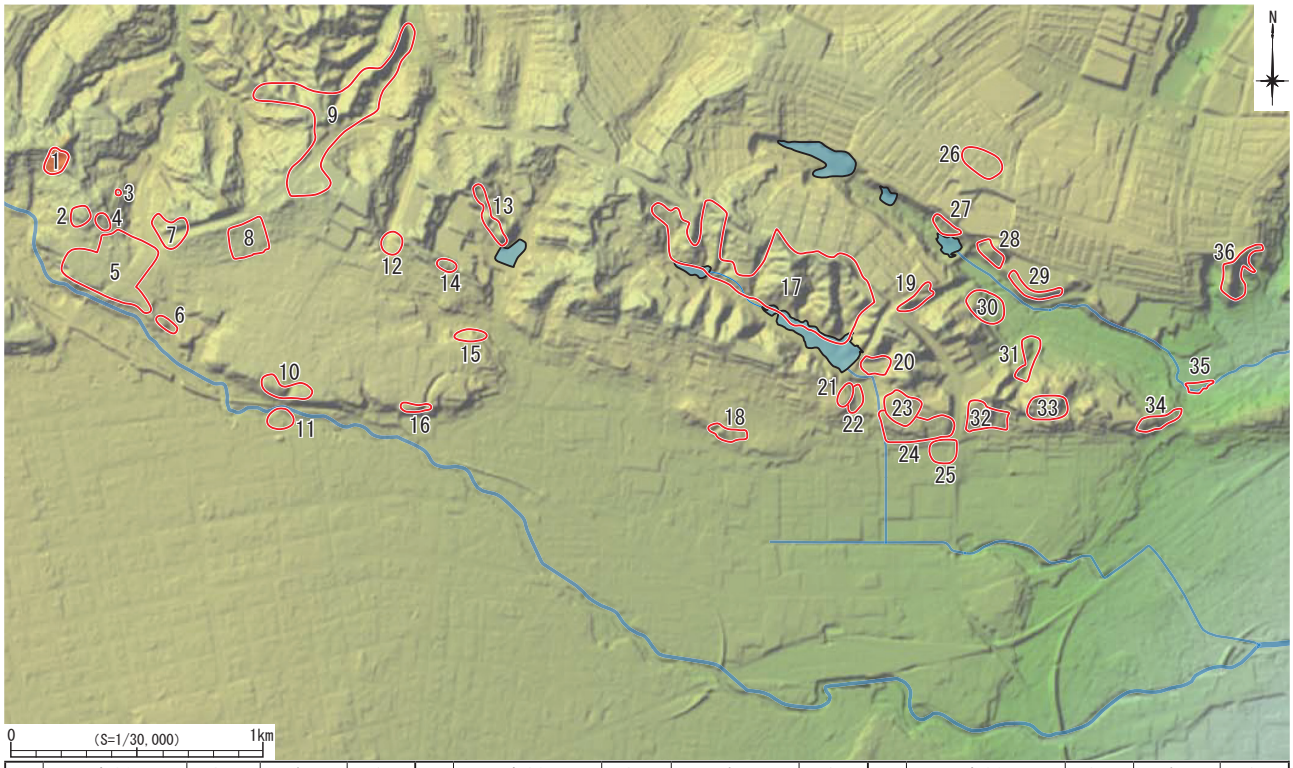
第１図　令和２～３年度調査地点位置図（国土地理院地図を一部改変）

第２章　穴田東窯跡の調査

第１節　遺跡の概要

穴田東窯跡は、仙台市青葉区堤町２丁目に所在する。JR 北仙台駅の北北東約 0.8 ㎞に位置し、台原・小田原丘陵の標高約 65 ～ 80 ｍの比較的傾斜の急な丘陵の南側斜面に立地する。これまで発掘調査は行われてはいないが、大正時代から遺物が採集され、1974 年に遺跡を踏査した際に宝相華文軒丸瓦と、顎部に山形文が施された連珠文軒平瓦が採集されていたことから、9 世紀後半以降の窯跡が所在することが想定されていた。

穴田東窯跡の東側、梅田川と七北田川にはさまれた丘陵の標高約 27 ～ 80 ｍの南側斜面には、古墳時代から平安時代にかけての窯跡群が多数見つかっており、これらは「台原・小田原窯跡群」と総称されている。窯跡群はこれまでに数多くの発掘調査が行われており、5 世紀代と 7 世紀末から 8 世紀初頭の操業が確認され、8 世紀中頃から 10 世紀中頃まで断続的に須恵器や瓦などを焼成し、陸奥国分寺や国分尼寺、多賀城に瓦を供給していたことが判明している。窯跡は操業時期により立地場所が変化し、下流側にあたる丘陵東側から生産が開始され、時期が経るにつれて上流側に移動することが知られている。窯跡群の存在は戦前から知られていたが、市の中心部に近いことから早い段階から都市化が進み、一時は湮滅したとも考えられていた。実際に湮滅した窯跡も数多く存在するものと推測されるが、昭和 40 年代に東北学院大学考古学研究部によって分布調査と発掘調査が行われて後に、断続



番号	遺跡名	立地	時代	種別	番号	遺跡名	立地	時代	種別	番号	遺跡名	立地	時代	種別
1	穴田東窯跡	丘陵斜面	平安	生産遺跡	13	南光沢窯跡	丘陵斜面	奈良・平安	生産遺跡	25	神明社東南麓南瓦窯跡	丘陵斜面	奈良・平安	生産遺跡
2	堤町Ｂ窯跡	丘陵斜面	平安	生産遺跡	14	小田原長命坂窯跡	丘陵斜面	奈良・平安	生産遺跡	26	鶴ヶ谷窯跡	丘陵斜面	平安	生産遺跡
3	堤町Ｃ窯跡	丘陵斜面	平安	生産遺跡	15	長命荘窯跡	丘陵斜面	平安	生産遺跡	27	三高西側斜面窯跡	丘陵斜面	平安	生産遺跡
4	山田団地東南遺跡	丘陵	平安・近世	生産遺跡	16	五城中学校北窯跡	丘陵斜面	平安	生産遺跡	28	安養寺中囲瓦窯跡	丘陵斜面	奈良・平安	生産遺跡
5	堤町瓦窯跡	丘陵斜面	平安	生産遺跡	17	与兵衛沼窯跡	丘陵斜面	奈良・平安・近世	生産遺跡	29	安養寺下囲瓦窯跡	丘陵斜面	平安	生産遺跡
6	荒巻杉添窯跡	丘陵斜面	平安・近世	生産遺跡	18	庚申前窯跡	丘陵斜面	奈良	生産遺跡	30	安養寺囲瓦窯跡	丘陵斜面	平安	生産遺跡
7	荒巻一本杉瓦窯跡	丘陵斜面	平安	生産遺跡	19	安養寺配水場前窯跡	丘陵斜面	奈良・平安	生産遺跡	31	安養寺下瓦窯跡	丘陵斜面	奈良・平安	生産遺跡
8	台原二丁目遺跡	丘陵斜面	平安	生産遺跡	20	枡江遺跡	丘陵斜面	奈良・平安	生産遺跡	32	小田原前田窯跡	丘陵斜面	奈良	生産遺跡
9	五本松窯跡	丘陵斜面	平安	生産遺跡	21	二の森遺跡	丘陵斜面	平安	散布地	33	土手前瓦窯跡	丘陵斜面	奈良・平安	生産遺跡
10	杉添東窯跡	丘陵斜面	近世	生産遺跡	22	二の森窯跡	丘陵斜面	平安	生産遺跡	34	大蓮寺窯跡	丘陵斜面	古墳・奈良	生産遺跡
11	上杉六丁目遺跡	自然堤防	平安	散布地	23	神明社裏遺跡	丘陵	奈良・平安	散布地	35	燕沢公園窯跡	丘陵斜面	古墳・奈良	生産遺跡
12	台原七丁目五番窯跡	丘陵斜面	平安	生産遺跡	24	神明社窯跡	丘陵斜面	奈良・平安	生産遺跡	36	善応寺横穴墓群	丘陵斜面	古墳～平安	横穴墓

第２図　台原・小田原窯跡郡周辺遺跡地図（国土地理院地図・色別標高図使用）

的に発掘調査が行われその実態が知られるようになってきた。これまで行われた発掘調査例のうち代表的なものとしては、5 世紀代に須恵器と、7 世紀末に須恵器と瓦を生産していた窯跡が見つかった大蓮寺窯跡＜ 34 ＞や、8 世紀中頃の多賀城Ⅱ期に陸奥国分寺の創建瓦を生産し、また多賀城Ⅲ～Ⅳ期に該当する 9 世紀半ばにロストル式平窯も用いて瓦を生産していた与兵衛沼窯跡＜ 17 ＞、多賀城Ⅱ期の瓦窯と土器焼成遺構が検出された枡江遺跡＜ 20 ＞、多賀城Ⅱ期のロストル式平窯が複数基検出された神明社（蟹沢中）窯跡＜ 24 ＞、1961 年に初めて調査が行われ、半地下式の登窯が 5 基見つかった安養寺中囲瓦窯跡＜ 28 ＞、窯に付随して覆い屋と推定される掘立柱建物跡が検出され、また須恵器専用の窯跡も見つかった五本松窯跡＜ 9 ＞、また今回調査を行った穴田東窯跡の近隣に所在し、灰原の可能性がある土坑から宝相華文軒丸瓦が出土した堤町 B 窯跡＜ 2 ＞などを挙げることができる。

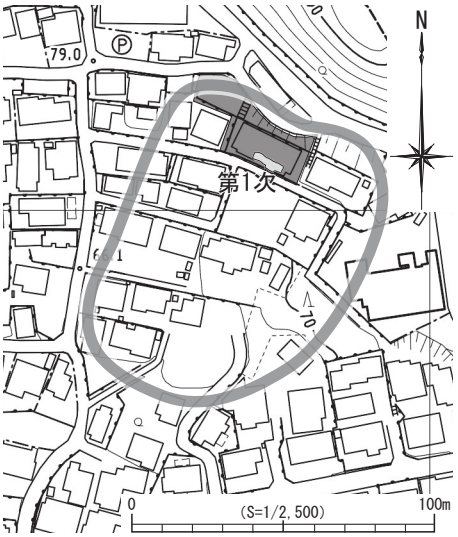
これまでの発掘調査で総計 96 基に及ぶ窯跡と、関連する遺構が多数見つかっているが、より多くの窯跡が存在するものと推定されており、須恵器や瓦を焼成した東北地方の最大級の規模を誇る窯跡群であるとされている。

近世においては元禄七（1694）年に仙台藩 4 代藩主伊達綱村により招聘された江戸の陶工、上村万右衛門が陶器を作り、杉村焼と称したと伝えられており、堤町に住む足軽衆の内職として日常雑器が盛んに生産された。近代に入ってからは陶器に加え瓦や人形、土管等の生産を行い、またその名称も「堤焼」という名で一般化し、現在もその伝統が伝えられている。

第２節　第１次調査

１．調査要項

遺　跡　名　　穴田東窯跡（宮城県遺跡登録番号 01444）
調 査 地 点　　仙台市青葉区堤町 2 丁目 1-25
調 査 期 間　　令和 3 年 7 月 8 日～ 30 日
調査対象面積　　約 158 ㎡
調 査 面 積　　70.88 ㎡
調 査 原 因　　共同住宅建築およびＬ型擁壁設置工事
調 査 主 体　　仙台市教育委員会
調 査 担 当　　仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係
担 当 職 員　　主査　及川謙作　　主事　早川太陽



第３図　第１次調査区位置図

２　調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、共同住宅建築およびＬ型擁壁設置工事に伴い申請者から提出された「埋蔵文化財の取扱いについて（協議）」（令和３年６月 24 日、R3 教生文第 109-36 号で回答）に基づき実施した。当初は申請者に対し掘削が遺構検出面に達すると推定されるＬ型擁壁設置範囲を対象に確認調査が必要であるとに回答したが、これに先立ち事業者から当該地において令和 3 年 5 月 12 日付で申請者から仮設駐車場設営に伴い提出された「埋蔵文化財発掘の届出」（令和 3 年 5 月 19 日付 R3 教生文第 108-58 号で回答）に基づき実施した工事立会いの際、古代の瓦が採集された。またその後 6 月 28 日にも現地確認を行ったところ、事業予定範囲から大量の瓦が採集され、また南側の法面を一部精査したところ、基本層とその上面に遺物包含層（本発掘調査の際の 1 号灰原）が検出され、瓦などの遺物が出土したことから、Ｌ型擁壁設置範囲を対象に本発掘調査を実施することになった。

調査は令和3年7月8日に着手した。調査区の掘削に先立ち近隣の3級基準点「QE303801」から基準点の移設を行った。また調査区と周囲の事業予定範囲の微地形計測を行った。調査区は重機によりⅠ・Ⅱ層を除去し、Ⅲ層上面で遺構検出作業を行った。その結果、南側の道路に接した範囲は、玉石積み擁壁設置の際の削平を受けているものの、

窯跡２基と灰原２基、さらにSO1窯跡に付随する形で２条の溝跡（SD1・2）が検出され、各遺構および基本層中から瓦を中心に多数の遺物が出土した。その後７月21日にSO1窯跡の最終焼成面を完掘した状態でドローンにより調査区全景の空撮を行った。７月30日まで調査区内の遺構の完掘および計測等を行い、野外調査を終了した。

遺構の記録は、トータルステーションを用いて遺構平面図（S=1/20）を、また必要に応じて各土層断面図（S=1/20）を作製し、デジタルカメラを用いて記録写真を撮影した。また遺物が多数出土し、図化が難しい一部の遺構については、デジタルカメラを用いた三次元写真計測を行った。

３　基本層序

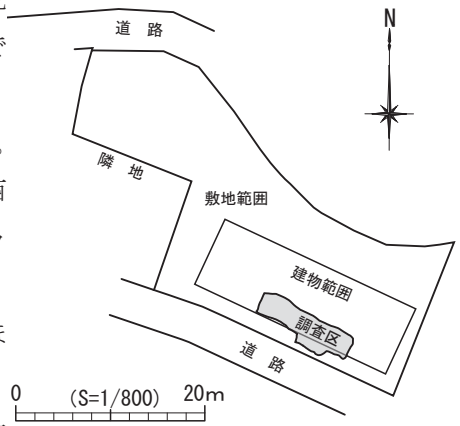
基本層を大別３層、細別８層確認した。

Ⅰａ層：10YR4/6褐色粘土質シルトで、層厚は約０～20㎝である。既存の共同住宅建築以前の畑の耕作土である。ほぼ均質の層である。

Ⅰｂ層：10YR3/3暗褐色粘土質シルトで、層厚は約０～34㎝である。既存の共同住宅建築以前の畑の耕作土である。調査区の北西側で検出された。粘性はやや弱く、しまりが強い。酸化鉄ブロックと瓦を中心とした遺物が多量に混入する。

Ⅱａ層：10YR4/4褐色粘土質シルトで、層厚は約０～14㎝である。ほぼ均質な層である。

Ⅱｂ層：10YR4/6褐色粘土質シルトで、層厚は約０～18㎝で、酸化鉄粒を斑状に含む。



第４図　第１次調査区配置図

Ⅱｃ層：10YR3/3暗褐色粘土質シルトで、層厚は約０～14㎝で、酸化鉄粒を斑状に含む。

Ⅱｄ層：10YR4/4褐色の粘土質シルトである。層厚は約０～８㎝で、炭化粒を少量含む。

Ⅱｅ層：10YR5/4黄褐色粘土質シルトである。層厚は約０～22㎝で酸化鉄粒を斑状に含む。

Ⅱ層はいずれも２号灰原の上層で検出され、堆積状況から斜面が崩落して二次的に堆積した層と考えられる。

Ⅲ　層：SO1窯跡を境に調査区西側は10YR4/6褐色の砂質シルトで粘性は弱く、締まりが強い。東側は10YR6/6明黄褐色粘土に漸次的に変化し、粘性もやや強くなる。今回の調査の遺構検出面である。

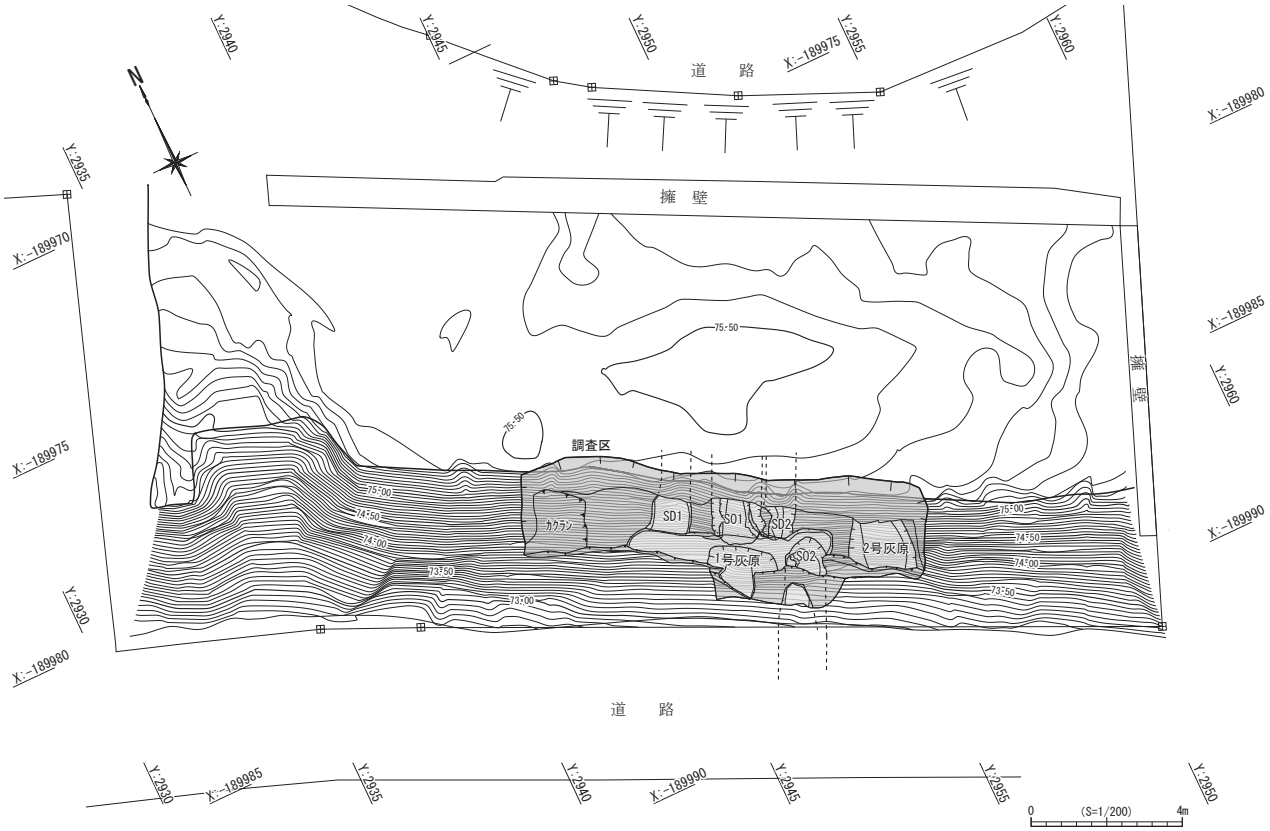
４　本発掘調査の発見遺構と出土遺物

本発掘調査に先立ち当該地の現地踏査を行った際に、既存共同住宅の解体後であったがわずかながらも敷地の中央部が高く、周囲に向かって落ち込む様子が観察されたことから、調査区およびその周囲の地形の現況計測を行った。本発掘調査後に遺構平面図と合成したところ、SO1窯跡の延長部分が最も標高が高くなることが判明した。

遺構は窯跡２基と溝跡２条、灰原が２基検出された。また各遺構および調査区の盛土およびⅢ層より上層の各遺構からは平瓦を中心とした遺物が大量に出土した。

SO1窯跡・SD1・2溝跡・1号灰原

調査区の中央部で検出された。SO1窯跡の東西にSD1・2溝跡が、南側に１号灰原が位置しており一連の遺構群を形成している。特にSO1窯跡と１号灰原は一連の堆積状況を示している。１号灰原の南側は既存の玉石積み擁壁設置に伴う掘削により削平を受けている。重複関係からSO2窯跡よりも新しい。また１号灰原東側の上層には２



第５図　第１次調査区現況測量図

号灰原の堆積土が堆積している。

SO1 窯跡は燃焼部が検出された。検出長約 1.2 m、横幅約 1.4 ～ 1.5 m、深さは約 60 ㎝で断面形状は半円形を呈している。1 号灰原の範囲で検出された前庭部も含めた傾斜角は約 14°である。壁面および底面は比熱により赤褐色に硬化している。

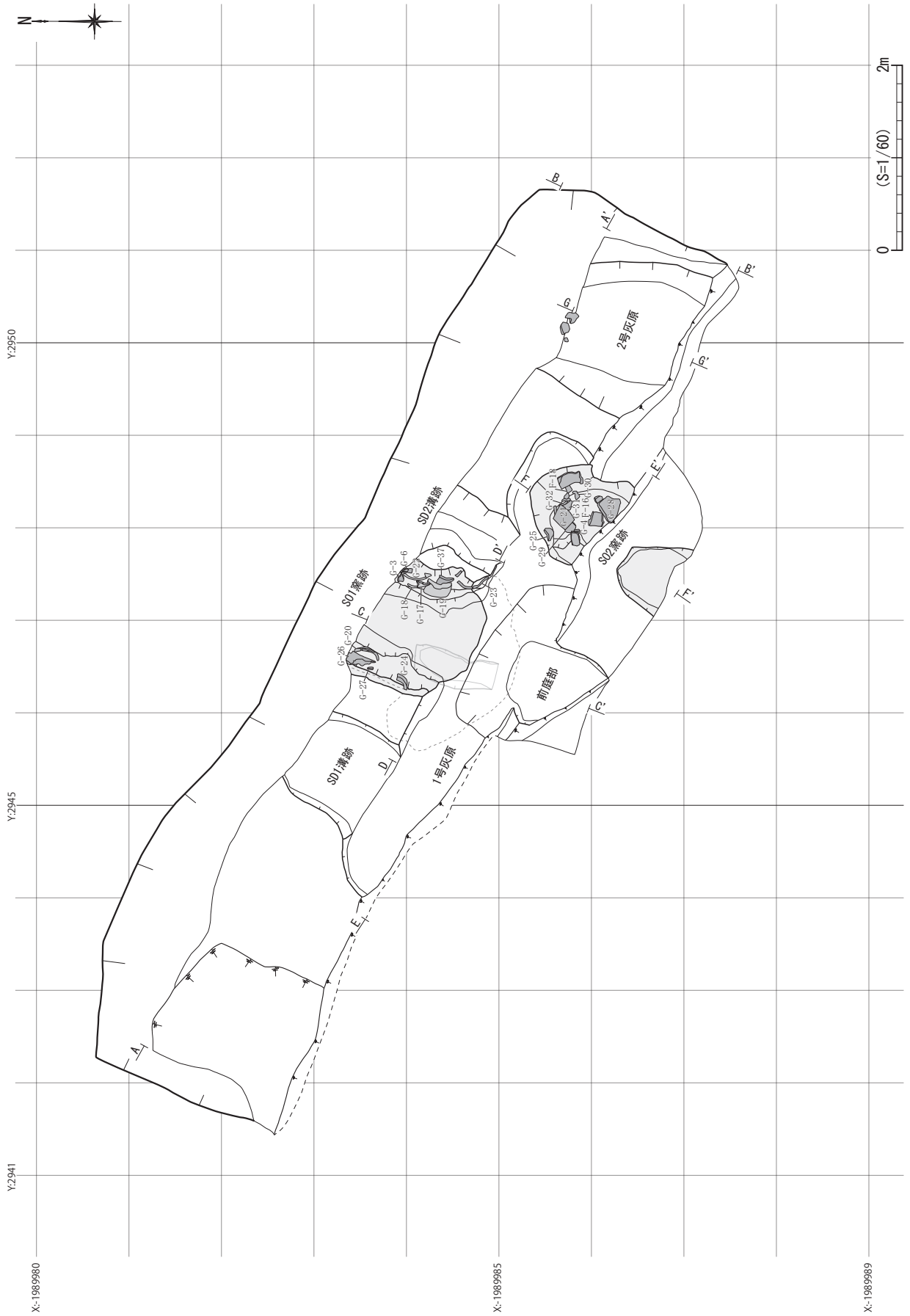
SO1 窯跡の南側からは 1 号灰原が検出された。検出長約 1.7m、横幅 5.4 mで、深さは約 10 ～ 40 ㎝である。SO1 窯跡の前面に落ち込みが存在し、窯の作業用のスペースの前庭部であると考えられる。

SO1 窯跡の東西には SD1・2 溝跡が窯に並行する形で検出された。SD1 は検出長約 95 ㎝、幅は約 1.2 m、深さは約 10 ～ 12 ㎝で、断面形状は浅い皿型を呈している。SD2 溝跡は窯と平行しつつもやや西側に張り出す箇所がある。検出長約 88 ㎝、幅約は 62 ～ 84 ㎝、深さは約 18 ～ 23 ㎝である。断面形状はやや開いたU字型を呈し、底面は丸い。堆積土はいずれも単層で炭化粒や焼土粒が混入する。

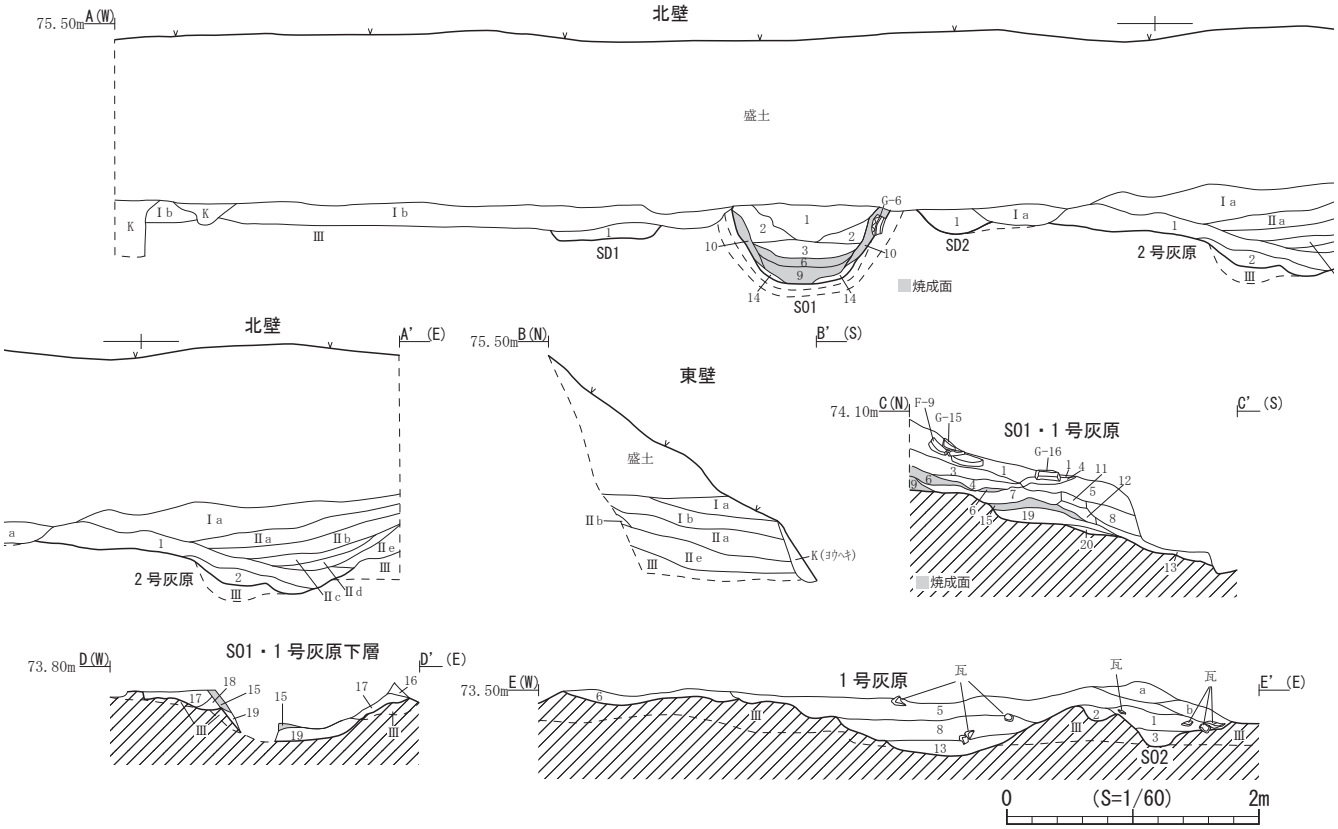
SO1 窯跡は底面も含めて 3 回の焼成面が確認された。1 層は基本層Ⅲ層由来のブロックが主体で、炭化粒や焼土粒が多量に混ざり、また完形に近い平瓦が窯の中軸線上を中心に一定量出土したことから、平瓦を裏込めとして利用した半地下式窯の天井部分の崩落土の可能性がある。堆積土のうち 6・9・10・15・18 層が焼成に伴う層であり、いずれの層も締まりが強く、非常に強く硬化している。堆積土中には焼土や炭化物などを含み、また窯の壁面付近に貼り付けられていた 10 層は基本層Ⅲ層由来のブロックが主体で、熱を受けて硬化した壁面補修の裏込め層であると考えられる。10 層には平瓦が重層的に立てかけられるような形で据えられていた。

窯の堆積土のうち 6・10 層が最終焼成面で、9・10 層が第 2 次焼成面、15・18 層が第 1 次焼成面である。16・17・19・20 層は窯での焼成以前の掘り込みで、焼きしまった層は存在しないものの炭化物や焼土粒を比較的多く含み、前庭部と共に SO1 窯跡構築以前の何らかの施設の一部であった可能性がある。

遺物は各層から平瓦を主体として多量に出土した。出土遺物の総重量は約 98.9 kgで、その内 79%の約 77.8 kg



第６図　第１次調査区遺構配置図



遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物
SO1・1号灰原	1	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	基本層Ⅲ層ブロック主体、焼土ブロックを少量含む。窯天井崩落土？
	2	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	炭化物を斑状に含む。
	3	7.5YR4/6 褐色	粘土質シルト	焼土ブロックを斑状に多量、炭化粒を少量含む。窯天井崩落土？
	4	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	焼土粒、炭化粒を斑状に含む。
	5	10YR2/2 黒褐色	シルト	焼土ブロック、炭化物を斑状に多量含む。
	6	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	焼土粒、炭化粒を少量、酸化鉄粒を斑状に含む。
	7	10YR3/4 暗褐色	粘土	基本層Ⅲ層ブロック主体、焼土粒を少量含む。焼成面
	8	10YR2/2 黒褐色	シルト	焼土粒を斑状に多量、炭化粒を斑状に含む。
	9	10YR2/2 黒褐色	シルト	焼土ブロック、炭化物を極多量に含む。
	10	7.5YR3/4 暗褐色	シルト	焼土ブロック主体。焼成面。
	11	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	焼土粒を少量、基本層Ⅲ層ブロックを斑状に含む。作業面
	12	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	基本層Ⅲ層ブロック主体、炭化粒・焼土粒を少量含む。焼成面
	13	10YR2/2 黒褐色	シルト	基本層Ⅲ層ブロックを少量、焼土粒、炭化物をやや多量に含む。
	14	10YR1.7/1 黒色	シルト	炭化物主体。
SO1・1号灰原	15	7.5YR3/3 暗褐色	シルト	焼成面。
	16	10YR5/6 黄褐色	粘土質シルト	基本層Ⅲ層主体、炭化粒を少量含む。
	17	10YR4/6 褐色	粘土質シルト	基本層Ⅲ層主体。
	18	7.5YR4/4 褐色	粘土質シルト	基本層Ⅲ層主体、焼土ブロックを斑状に含む。
	19	10YR4/6 褐色	粘土質シルト	基本層Ⅲ層ブロック主体、炭化粒を少量含む。
	20	7.5YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	焼面。
SD1	1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	基本層Ⅲ層ブロック下層との境に斑状に堆積、炭化粒を斑状に、焼土ブロックを少量含む。
SD2	1	10YR2/1 黒色	シルト	炭化物を少量、焼土ブロックを斑状に含む。
SO2	1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	下層に焼土粒を多量、炭化物を斑状に含む。
	2	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	焼土粒・炭化粒を少量含む。
	3	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	基本層Ⅲ層ブロック、炭化物、焼土ブロックを斑状に含む。
2号灰原	a	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	焼土粒を少量含む。1層と同一？
	b	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄ブロックを斑状に含む。
	1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	炭化粒をやや多量、酸化鉄ブロックを斑状に含む。
	2	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	下層との境に酸化鉄堆積。

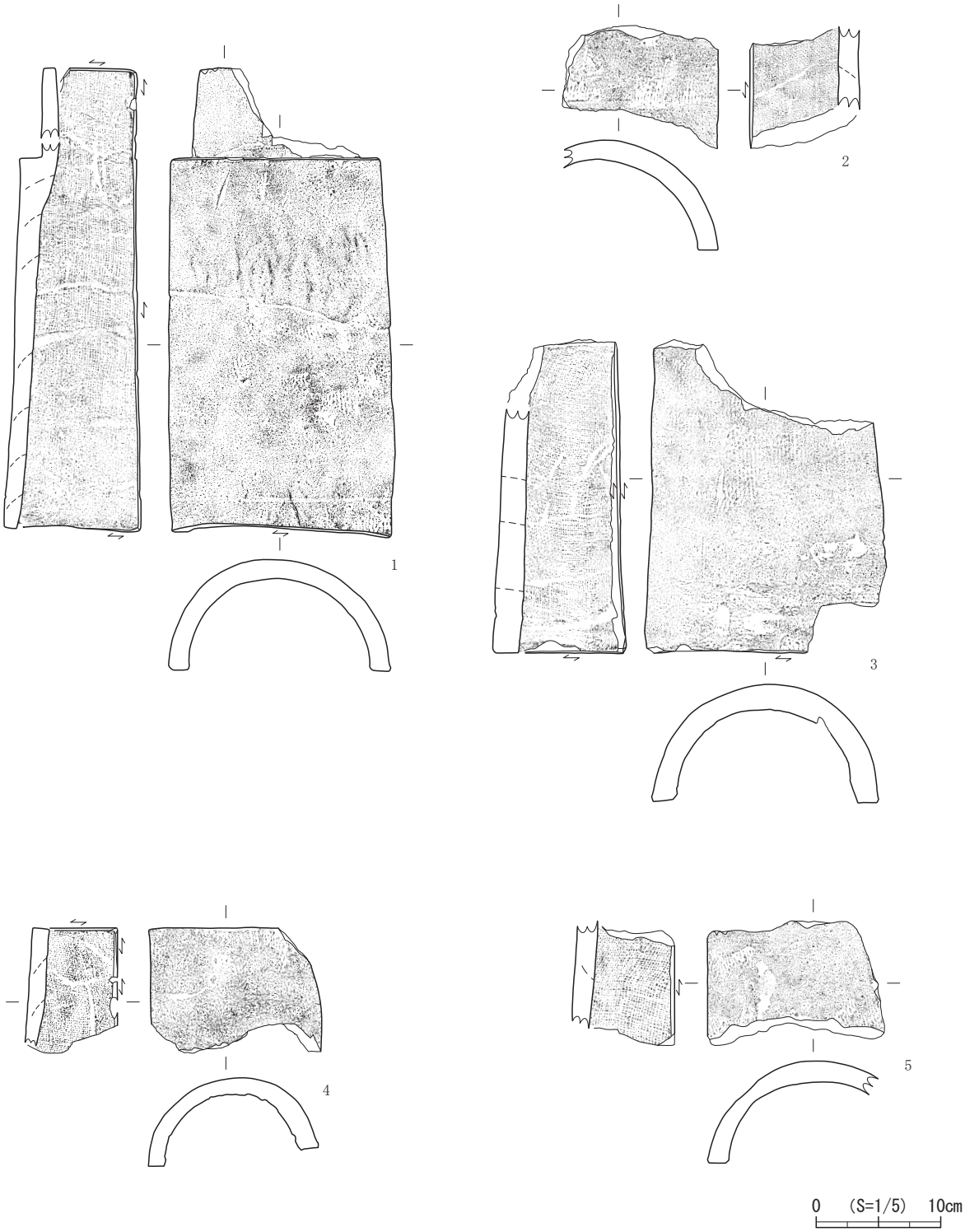
第７図　調査区北・東壁、SO1・2 窯跡、SD1・2 溝跡、1・2 号灰原土層断面図

が平瓦であった。丸瓦は 18.3 kgで約 18%を占める。またそれ以外にも軒丸瓦、軒平瓦などが少量出土している。その内の平瓦 14 点、丸瓦 5 点、軒平瓦 2 点を図化した。

SO2 窯跡

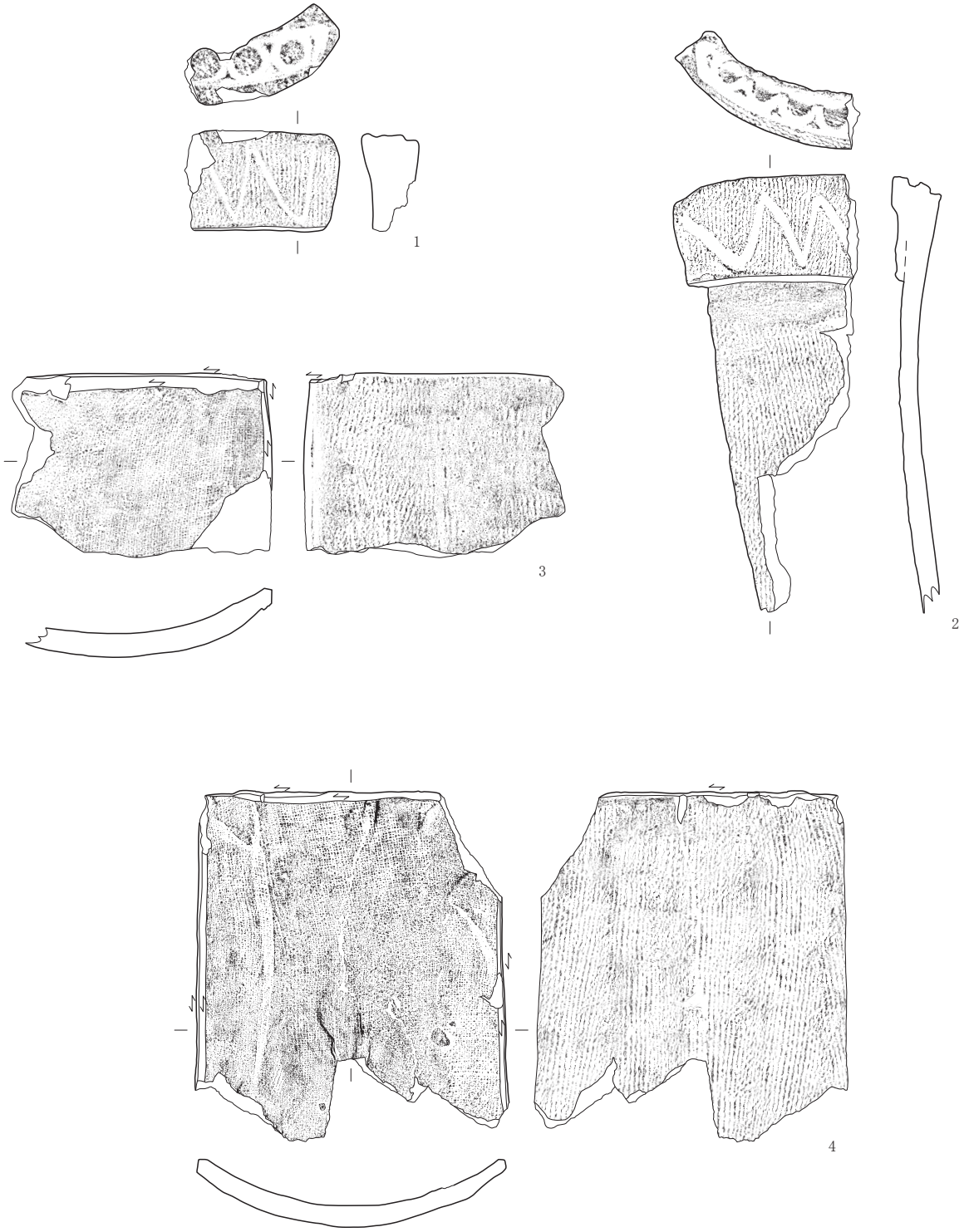
調査区中央のやや東側、1 号灰原の下層で検出された。検出されたのは窯の先端部分で、検出長は約 1.9 m、幅は約 1.1 m、深さは約 25 ㎝、底面の傾斜角は約 20°で、断面形状はやや開いたU字型を呈するが、底面は部分的に凹凸が存在する。堆積土は 4 層確認された。

遺物は1層を中心に平瓦を主体として多量に出土した。出土状況に遺物を規則的に配置した様相は見受けられず、



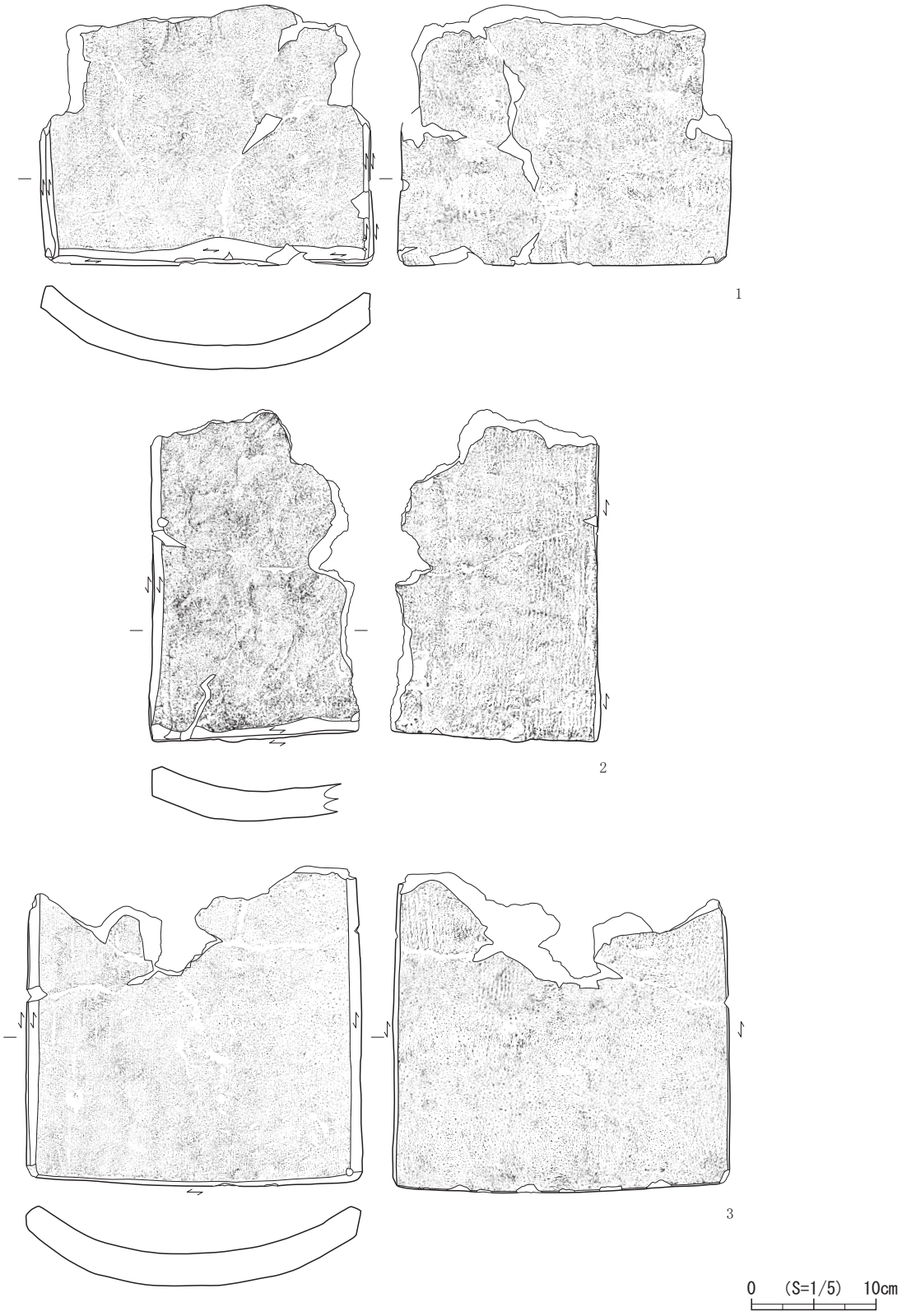
図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	長さ（cm）	幅（cm）	広端幅（cm）	狭端幅（cm）	厚さ（cm）	分類	備　考	写真図版
1	F-9	S01	1	丸瓦	37.2 玉 7.2	17.8	17.6 玉 13.7	16.6	1.5		凸面：縄叩き→ナデ 凹面：粘土紐痕→布目痕→ナデ	3-1
2	F-10	S01	－	丸瓦					1.7		凸面：縄叩き→ナデ 凹面：粘土紐痕→布目痕	3-2
3	F-11	S01	－	丸瓦		18.2	(19.7)		2.1		凸面：縄叩き 凹面：粘土紐痕	3-3
4	F-12	S01	－	丸瓦？		13.6			1.4		凸面：縄叩き→ナデ 凹面：粘土紐痕→布目痕	3-4
5	F-13	S01	－	丸瓦					1.7		凸面：縄叩き→ナデ 凹面：粘土紐痕→布目痕	3-5

第８図　S01 窯跡出土遺物（1）



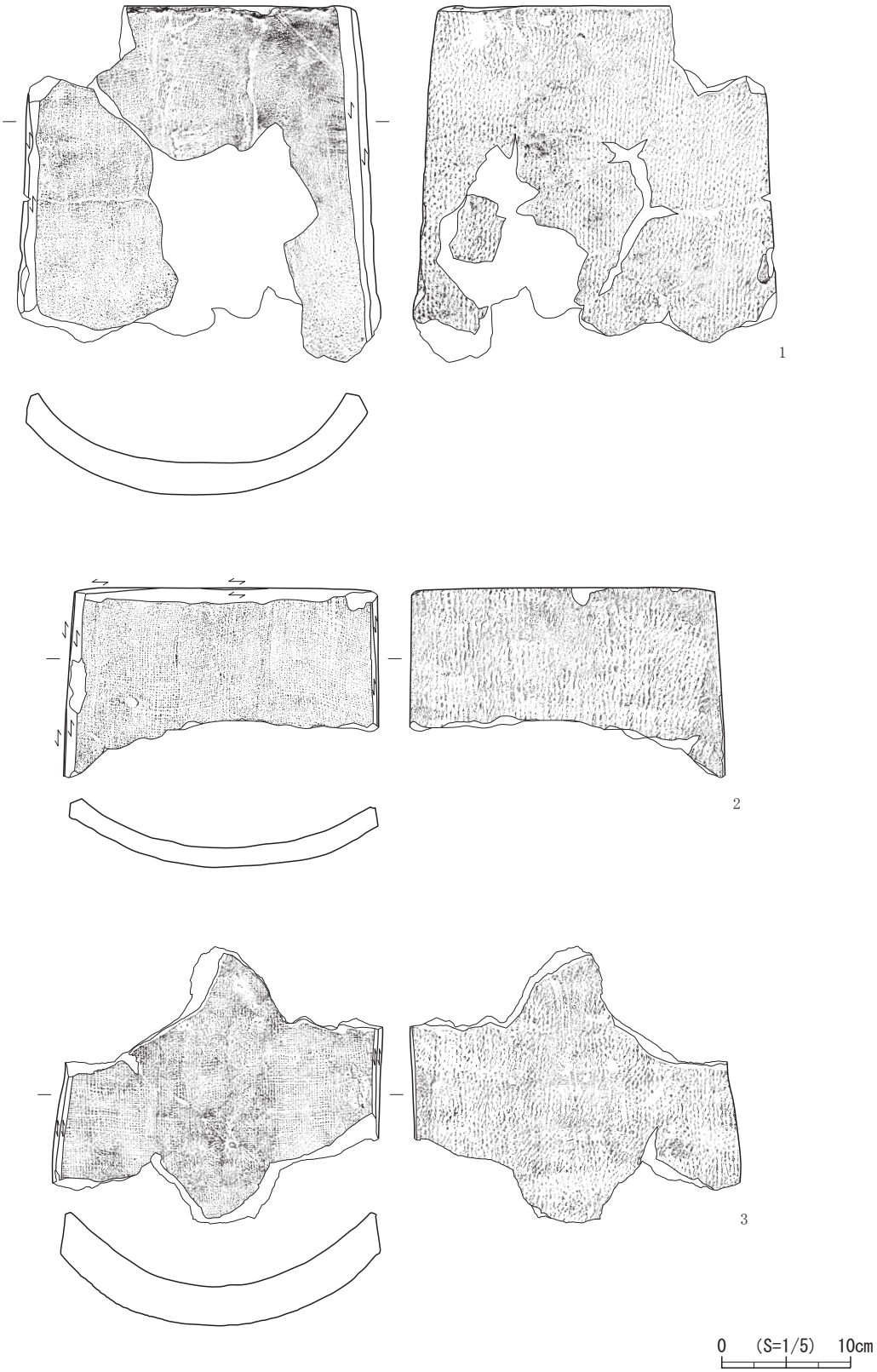
図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	長さ（cm）	幅（cm）	広端幅（cm）	狭端幅（cm）	厚さ（cm）	瓦当面長（cm）	瓦当面厚さ（cm）	分類	備　考	写真図版
1	G-3	S01	10 層直上	軒平瓦							4.6		瓦当面：連珠文笵押し→縄叩き　顎面：縄叩き→山形流線文　凸面：不明　凹面：不明　多賀城分類 831a、陸奥国分寺分類第二類に相当	3-7
2	G-6	S01	1	軒平瓦					1.7		3.6～4.4		瓦当面：連珠文笵押し→縄叩き→上端部ケズリ　顎面：縄叩き→山形流線文　凸面：縄叩き　凹面：布目痕→部分的なナデ　多賀城分類 831a、陸奥国分寺分類第二類に相当	3-8
3	G-16	S01	1	平瓦					2.0	－	－	A	凸面：縦縄叩き　凹面：布目痕	3-9
4	G-17	S01	－	平瓦		24.6		(23.7)	1.7	－	－	A	凸面：縦縄叩き　凹面：布目痕	3-10

第９図　S01 窯跡出土遺物（2）



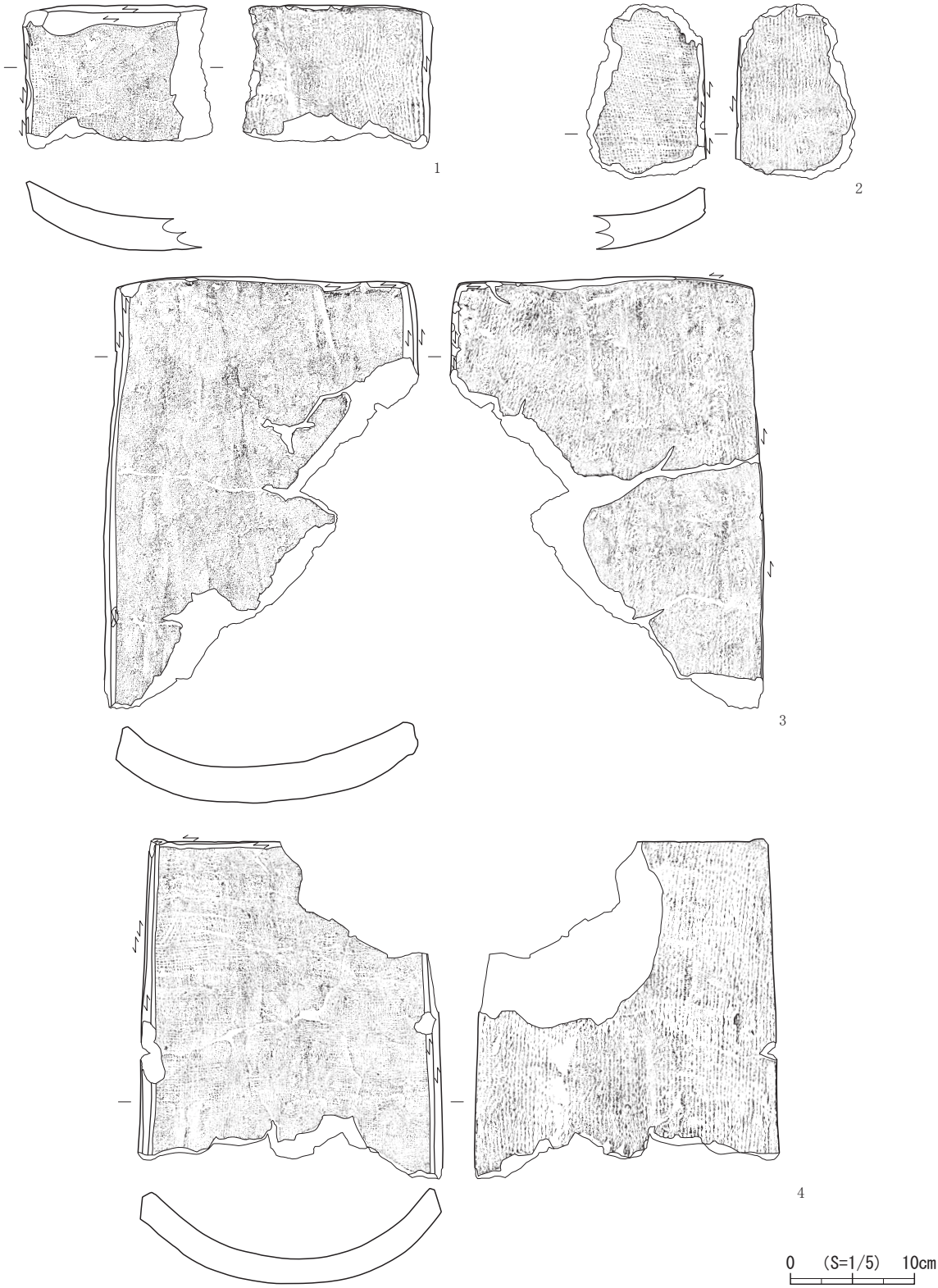
図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	長さ（cm）	幅（cm）	広端幅（cm）	狭端幅（cm）	厚さ（cm）	分類	備　考	写真図版
1	G-15	S01	1	平瓦		26.4	26.3		2.4	A?	凸面：縄叩き ケズリ ナデ 凹面：布目痕 糸切り痕	4-1
2	G-18	S01	10 層直上	平瓦					2.6	B	凸面：縦縄叩き→叩きのつぶれ 凹面：布目痕→ナデ	4-2
3	G-19	S01	10 層直上	平瓦		27.0	26.9		2.5	B	凸面：縦縄叩き→叩きのつぶれ 凹面：布目痕→ナデ	4-3

第 10 図　S01 窯跡出土遺物（3）



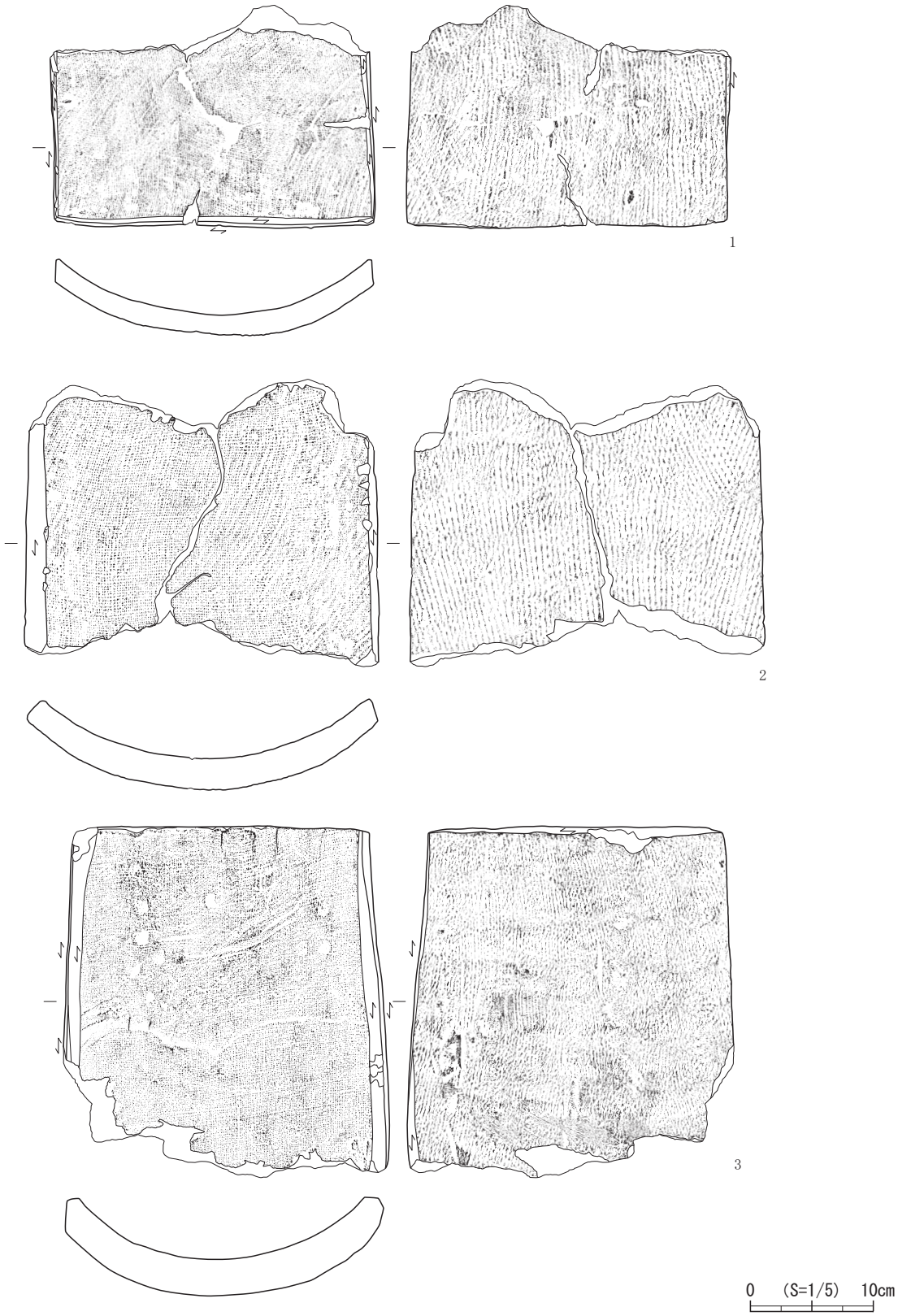
図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	長さ（cm）	幅（cm）	広端幅（cm）	狭端幅（cm）	厚さ（cm）	分類	備　考	写真図版
1	G-20	S01	10 層直上	平瓦		26.7		(25.3)	2.5	A	凸面：縦縄叩き 凹面：布目痕	4-4
2	G-22	S01	壁面直上	平瓦		23.9		23.5	1.7	A	凸面：縦縄叩き 凹面：布目痕	5-1
3	G-23	S01	壁面直上	平瓦		25.1			3.4	A	凸面：縦縄叩き 凹面：糸切り痕→布目痕	5-2

第 11 図　S01 窯跡出土遺物（4）



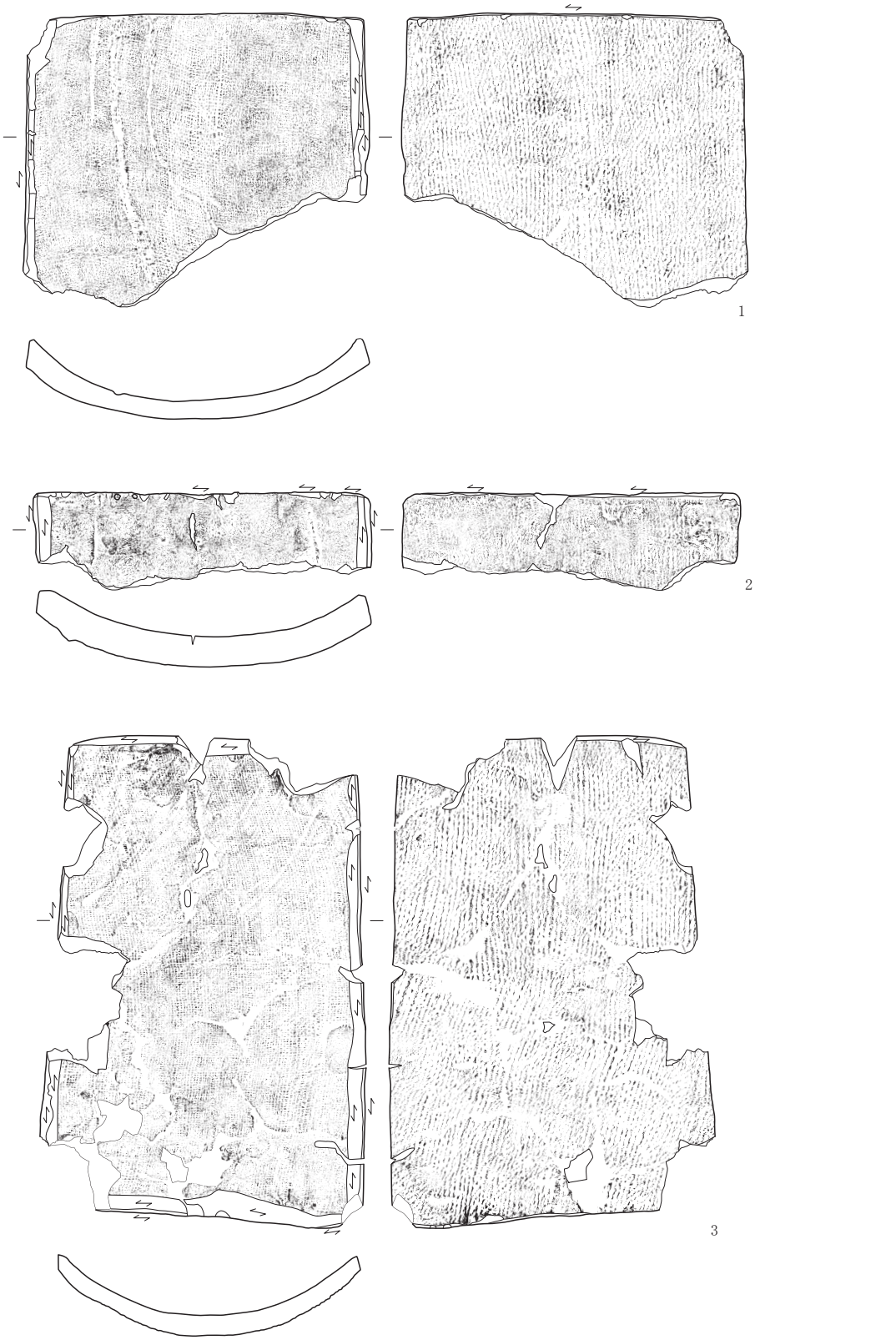
図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	長さ（cm）	幅（cm）	広端幅（cm）	狭端幅（cm）	厚さ（cm）	分類	備　考	写真図版
1	G-24	S01	壁面直上	平瓦					2.6	A	凸面：縦縄叩き　凹面：布目痕	5-3
2	G-27	S01	壁面直上	平瓦		(9.5)			2.6	A	凸面：縦縄叩き　凹面：布目痕	5-4
3	G-26	S01	壁面直上	平瓦	34.2	24.5		23.7	3.1	B	凸面：縦縄叩き→叩きのつぶれ　凹面：布目痕→ナデ	5-5
4	G-37	S01	壁面直上	平瓦		24.4		23.0	2.2	A	凸面：縦縄叩き　凹面：布目痕	5-6

第 12 図　S01 窯跡出土遺物（5）



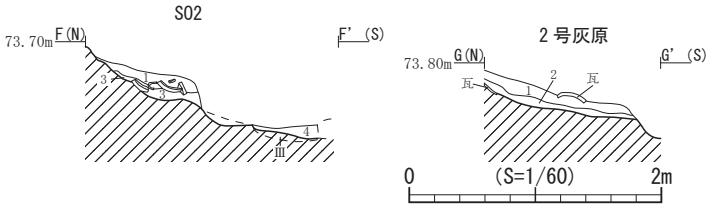
図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	長さ（cm）	幅（cm）	広端幅（cm）	狭端幅（cm）	厚さ（cm）	分類	備　考	写真図版
1	G-35	S01	－	平瓦		26.0	26.1		2.0	A	凸面：縦縄叩き 凹面：糸切り痕→布目痕	6-1
2	G-36	S01	3	平瓦		28.8			2.6	A	凸面：縦縄叩き 凹面：糸切り痕→布目痕 3層下層	6-2
3	G-13	1号灰原	1	平瓦		26.0		24.1	3.1	A	凸面：縦縄叩き 凹面：糸切り痕→布目痕	6-3

第13図　S01窯跡出土遺物（6）・1号灰原出土遺物（1）



図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	長さ（cm）	幅（cm）	広端幅（cm）	狭端幅（cm）	厚さ（cm）	分類	備　考	写真図版
1	G-14	1号灰原	1	平瓦		27.2		(24.9)	1.5	A	凸面：縦縄叩き 凹面：布目痕（部分的なつぶれあり）	6-4
2	G-34	1号灰原	－	平瓦		26.6		26.7	2.4	B	凸面：縦縄叩き→叩きのつぶれ 凹面：布目痕→ナデ	6-5
3	G-33	1号灰原	－	平瓦	38.0	23.8	(26.4)	(22.8)	1.7	A	凸面：縦縄叩き 凹面：糸切り痕→布目痕	7-1

第 14 図　1 号灰原出土遺物（2）



遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物
SO2	1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	下層に焼土粒を多量、炭化物を斑状に含む。
	2	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	焼土粒・炭化粒を少量含む。
	3	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	Ⅲ層ブロック、炭化物、焼土ブロックを斑状に含む。
	4	10YR2/1 黒色	粘土質シルト	炭化物、焼土ブロックを斑状に多量に含む。
2号灰原	1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	炭化粒をやや多量、酸化鉄ブロックを斑状に含む。
	2	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	下層との境に酸化鉄堆積。

第 15 図　SO2 窯跡・2 号灰原土層断面図

窯の廃絶後に周囲で発生した不良品を投棄したものと推測される。出土遺物の総重量は約 46.3 kgで、その内 67%にあたる約 30.8 kgが平瓦であった。丸瓦は 9.9 kgで約 21%を占める。またそれ以外にも軒丸瓦、軒平瓦、須恵器の坏などが出土している。その内の平瓦 7 点、丸瓦 5 点、軒丸瓦 2 点、軒平瓦 1 点、須恵器坏 1 点を図化した。

2 号灰原

調査区東側で検出された。平面図上は他の遺構との重複はないが、堆積土の一部は 1 号灰原の上面にまで広がっていた。堀込の検出長は約 1.2 m、横幅は 1.8 m、検出面からの深さは約 21 ㎝で、底面の傾斜角度は 13°である。南側は擁壁設置の際の削平を受けている。堆積土は粘土質シルトと粘土で 2 層確認され、南側と東側に向かって落ち込んでおり、その上層には基本層Ⅱ層が堆積している。1 層は粘土質シルトで炭化粒をやや多量に、酸化鉄粒を斑状に含んでいる。2 層は粘土で底面に酸化鉄粒が堆積していることから、水が流れるような環境であった可能性がある。この 2 層に関しては堆積土中の花粉分析を行っている。詳細については「6　穴田東窯跡から出土した炭化材の樹種同定と花粉分析」を参照して頂きたい。

遺物は 1 層を中心に平瓦と丸瓦などが約 5.8 kg出土したが、その内の 5.5 kgが平瓦で、その内の 1 点を図化した。

遺構外の出土遺物

今回の調査地点の敷地内および基本層中からは大量の瓦が出土した。その総重量は 135.3 kgにおよぶ。その内 82%にあたる約 111.0 kgが平瓦であった。丸瓦は 17.4 kgで約 13%を占める。またそれ以外にも軒丸瓦、軒平瓦、土師器などが出土している。その内の平瓦 5 点、丸瓦 1 点、軒丸瓦 5 点、軒平瓦 3 点、須恵器の坏と甕を 1 点ずつ図化した。

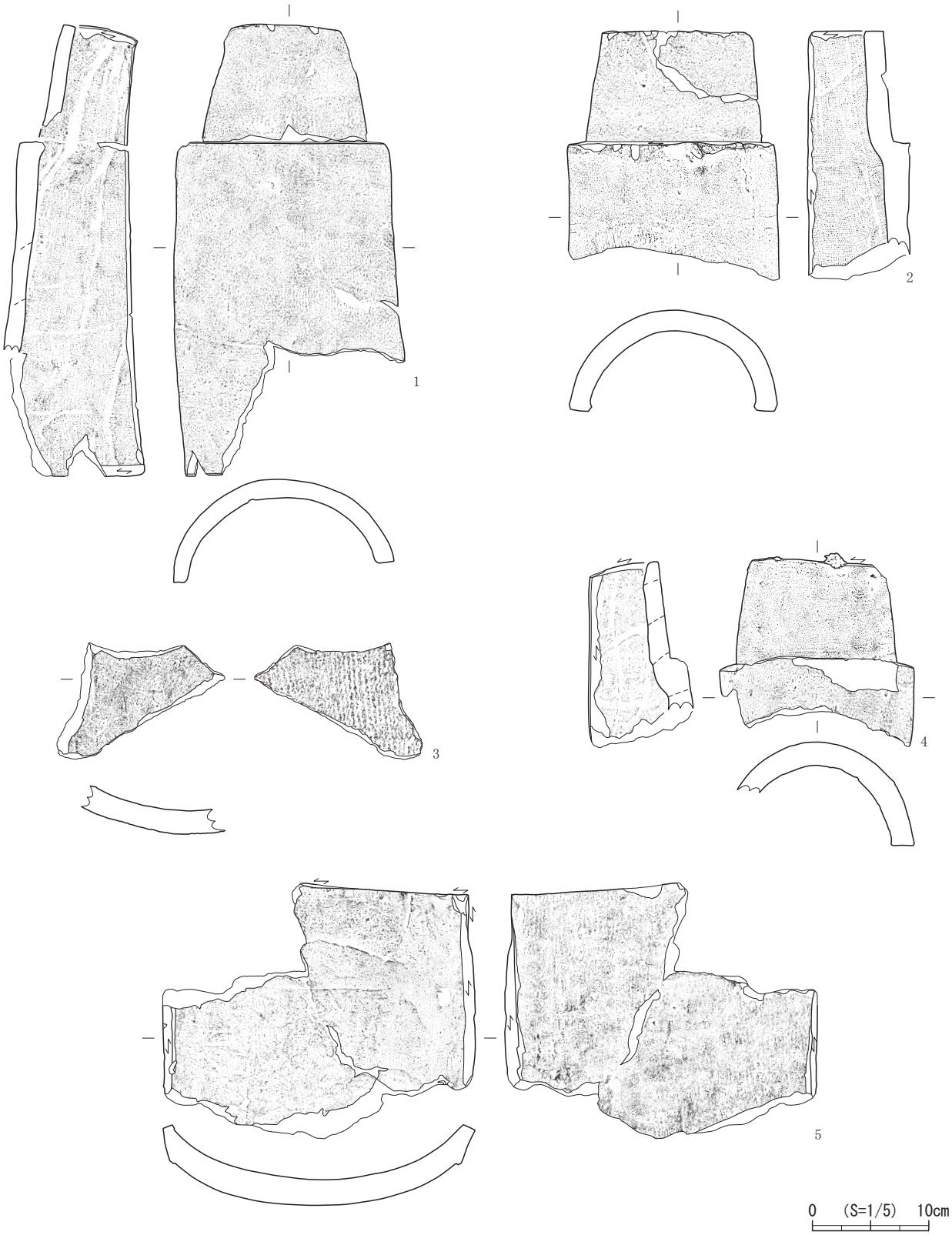
出土遺物の様相

上記の遺構をはじめ、調査区全体からは遺物が大量に出土し、その総重量は 286.5 kgにおよぶ。その大半は古代の瓦である。出土した軒瓦が宝相華文軒丸瓦（多賀城分類 422 型式、陸奥国分寺分類宝相花文第一類）と、連珠文軒平瓦（多賀城分類 831a 型式、陸奥国分寺分類連珠文第二類）のみであったことから、遺構外から出土した瓦も含めほぼ同時期に焼成されたものであると推測される。ちなみに各遺物の出土重量は、平瓦が 225.1 kgと全体の約 78%を占め、丸瓦は 45.8 kgで約 16%、その他の軒丸瓦、軒平瓦、不明瓦は 15 kgで約 5%である。このことからこの窯跡は平瓦を主体的に生産していた瓦窯であったといえる。ちなみにこの重量を個数に換算するために、過去の調査で出土している完形の瓦を抽出し、その重量を計量して平均値を求めた。使用したのは、平瓦が五本松窯跡（仙台市文化財調査報告書第 99 集）の第 40 図 1、第 43 図 1、第 46 図 1、第 64 図 1、与兵衛沼窯跡（同 366 集）G-052、G-125、薬師堂東遺跡（同 443 集）G-016 で、平均重量は 4.8 kgであった。丸瓦は五本松窯跡（同 99 集）第 28 図 1、2、与兵衛沼窯跡（同 99 集）F-043 で、平均重量は 2.9 kgであった。この数値を利用すると今回の調査で平瓦は約 46.9 枚分、丸瓦は 15.64 枚分出土したことになり、その比率は丸瓦 1 に対して平瓦 2.99 となり、

図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量（cm）			外面	内面	備考	写真図版
						口径	底径	器高				
1	E-3	S02	－	須恵器	坏	(14.0)	(6.4)	3.9	ロクロナデ	ロクロナデ		7-2

図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	長さ（cm）	幅（cm）	広端幅（cm）	狭端幅（cm）	厚さ（cm）	瓦当面長（cm）	瓦当面厚さ（cm）	分類	備　考	写真図版
2	F-6	S02	1	軒丸瓦					2.0	(19.9)	2.7		瓦当面：宝相華文笵押し 瓦当裏面：縄叩き→ケズリ ナデ 凸面：縄叩き→ケズリ ハケメ 凹面：布目痕 多賀城分類 422、陸奥国分寺分類第一類に相当 笵傷３ヶ所あり	7-5
3	F-7	S02	－	軒丸瓦							2.0		瓦当面：宝相華文笵押し 瓦当裏面：縄叩き→ケズリ ナデ 凸面：不明 凹面：不明 多賀城分類 422、陸奥国分寺分類第一類に相当 笵傷３ヶ所あり	7-6
4	G-4	S02	1	軒平瓦					1.8		5.5		瓦当面：連珠文笵押し→縄叩き 顎面：縄叩き→山形流線文 凸面：不明 凹面：布目痕→部分的なナデ 多賀城分類 831a、陸奥国分寺分類第二類に相当する	7-3
5	F-17	S02	－	丸瓦		16.4	16.8		1.8				凸面：縄叩き→ナデ 凹面：粘土紐痕	7-9
6	F-18	S02	3	丸瓦					1.6				凸面：縄叩き→ナデ 凹面：粘土紐痕→布目痕	8-1

第 16 図　S02 窯跡出土遺物（1）



図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	長さ（cm）	幅（cm）	広端幅（cm）	狭端幅（cm）	厚さ（cm）	分類	備　考	写真図版
1	F-15	S02	－	丸瓦	38.7 玉 10.3	19.0	(19.8) 玉 14.1	18.0 玉 (9.3)	1.7		凸面：縄叩き→ナデ 凹面：粘土紐痕→布目痕	7-4
2	F-14	S02	－	丸瓦	玉 9.3	18.0	玉 15.0	17.7 玉 12.5	2.4		凸面：縄叩き→ナデ 凹面：粘土紐痕→布目痕	7-7
3	G-31	S02	3	平瓦					2.1	B	凸面：縦縄叩き→叩きのつぶれ 凹面：布目痕→ナデ	8-7
4	F-16	S02	3	丸瓦	玉 9.4		玉 13.9	16.7 玉 (10.2)	2.2		凸面：縄叩き→ナデ 凹面：粘土紐痕→布目痕→ナデ	7-8
5	G-32	S02	3	平瓦		28.0		26.6	2.4	B	凸面：縦縄叩き→叩きのつぶれ 凹面：布目痕→ナデ	8-8

第 17 図　S02 窯跡出土遺物（2）

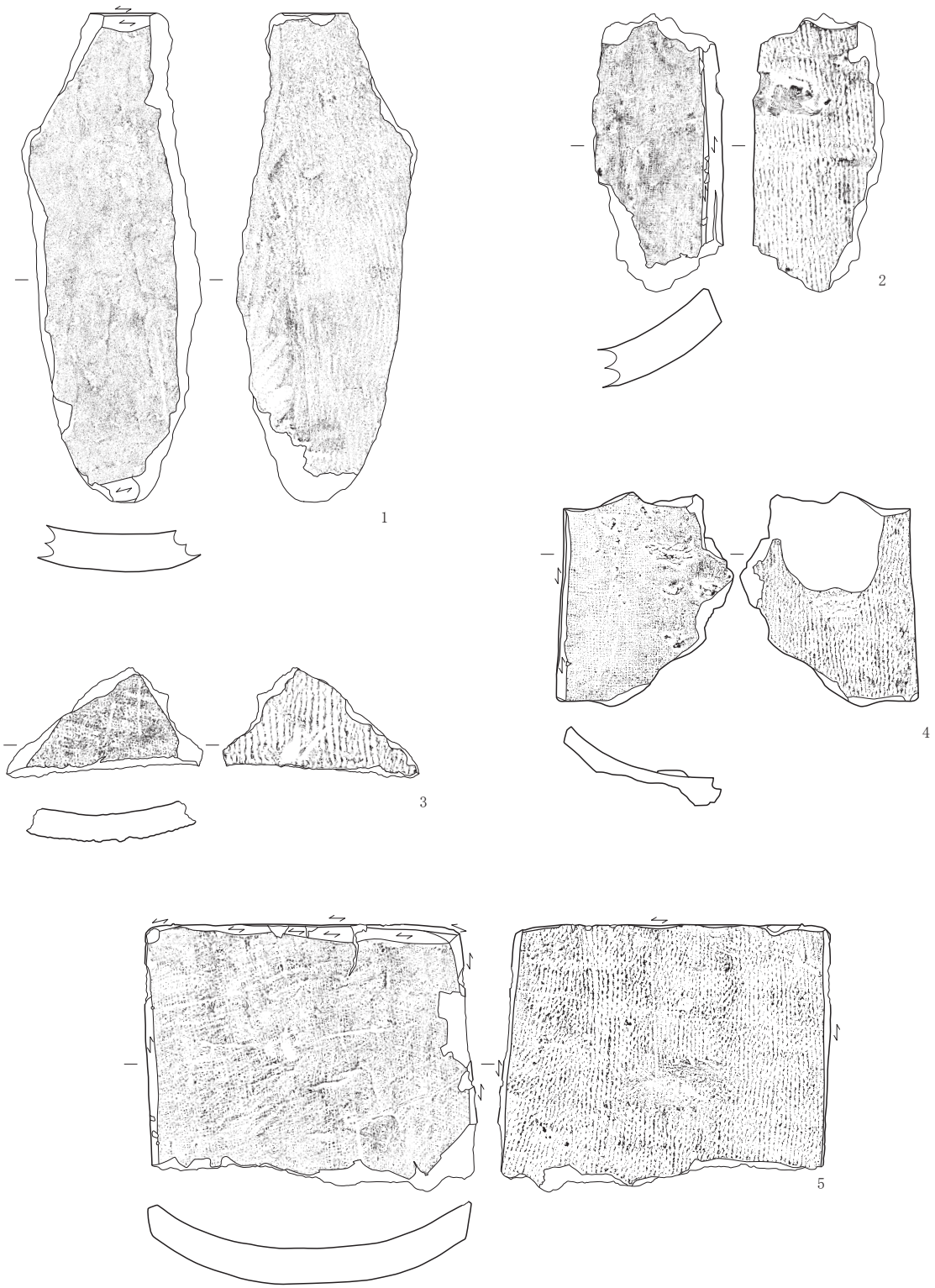
図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	長さ（cm）	幅（cm）	広端幅（cm）	狭端幅（cm）	厚さ（cm）	分類	備　考	写真図版
1	G-21	S02	1	平瓦					1.7	A	凸面：縦縄叩き 凹面：布目痕	8-3
2	G-25	S02	3	平瓦					1.7	A	凸面：縦縄叩き 凹面：糸切り痕→布目痕 焼台	8-4
3	G-30	S02	3	平瓦					2.0	A	凸面：縦縄叩き 凹面：布目痕 焼台	8-6
4	G-28	S02	－	平瓦					2.8	A	凸面：縦縄叩き 凹面：糸切り痕→布目痕	8-2
5	G-29	S02	3	平瓦					2.0	A	凸面：縦縄叩き 凹面：布目痕	8-5
6	G-12	2号灰原	－	平瓦					2.6	B	凸面：縦縄叩き→叩きのつぶれ 凹面：布目痕→ナデ	8-9

第 18 図　S02 窯跡出土遺物（3）・2 号灰原出土遺物

図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量（cm）			外面	内面	備考	写真図版
						口径	底径	器高				
1	E-1	－	－	須恵器	甕	－	－		ロクロナデ ヘラケズリ	ロクロナデ		9-1
2	E-2	－	－	須恵器	坏	－	(7.2)		ロクロナデ 底：回転ヘラケズリ→周辺部ナデ	ロクロナデ		9-2

図版番号	登録番号	種別	長さ（cm）	幅（cm）	広端幅（cm）	狭端幅（cm）	厚さ（cm）	瓦当面長（cm）	瓦当面厚さ（cm）	備　考	写真図版
3	F-3	軒丸瓦	－						2.8	瓦当面：宝相華文笵押し 瓦当裏面：ケズリ ナデ 凸面：縄叩き→ナデ 凹面：不明 多賀城分類 422、陸奥国分寺分類第一類に相当	9-5
4	F-4	軒丸瓦	－						2.7	瓦当面：宝相華文笵押し 瓦当裏面：ナデ 凸面：不明 凹面：不明 多賀城分類 422、陸奥国分寺分類第一類に相当	9-6
5	F-2	軒丸瓦							1.7	瓦当面：宝相華文笵押し 瓦当裏面：縄叩き→ケズリ ナデ 凸面：不明 凹面：不明 多賀城分類 422、陸奥国分寺分類第一類に相当 笵傷３ヶ所あり	9-4
6	F-1	軒丸瓦							2.6	瓦当面：宝相華文笵押し 瓦当裏面：ケズリ ナデ 凸面：不明 凹面：不明 多賀城分類 422、陸奥国分寺分類の第一類に相当 笵傷３ヶ所あり	9-3
7	F-8	丸瓦	玉 9.3				2.7			凸面：縄叩き→ナデ 凹面：粘土紐痕→布目痕	9-8
8	F-5	軒丸瓦							1.7	瓦当面：宝相華文笵押し 瓦当裏面：不明 凸面：縄叩き→ケズリ 凹面：不明 多賀城分類 422、陸奥国分寺分類第一類に相当	9-7
9	G-1	軒平瓦							4.7	瓦当面：連珠文笵押し→縄叩き 顎面：縄叩き→山形流線文 凸面：不明 凹面：布目痕→部分的なナデ 多賀城分類 831a、陸奥国分寺分類第二類に相当	9-10
10	G-2	軒平瓦					5.8			瓦当面：連珠文笵押し→縄叩き 顎面：縄叩き→山形流線文 凸面：不明 凹面：布目痕→部分的なナデ 多賀城分類の 831a、陸奥国分寺分類第二類に相当	9-11
11	G-5	軒平瓦								瓦当面：連珠文笵押し→縄叩き 顎面：縄叩き→山形流線文 凸面：不明 凹面：不明 多賀城分類 831a、陸奥国分寺分類第二類に相当	9-9

第 19 図　遺構外出土遺物（1）



図版番号	登録番号	種別	長さ（cm）	幅（cm）	広端幅（cm）	狭端幅（cm）	厚さ（cm）	分類	備　考	写真図版
1	G-7	平瓦					3.0	B	凸面：縦縄叩き→叩きのつぶれ 凹面：布目痕→ナデ	9-12
2	G-11	平瓦					3.1	A	凸面：縦縄叩き 凹面：布目痕	9-15
3	G-9	平瓦					2.1	A	凸面：縦縄叩き 凹面：布目痕	9-13
4	G-10	平瓦					2.2	A	凸面：縦縄叩き 凹面：布目痕 焼台	9-14
5	G-8	平瓦				24.7	2.8	B	凸面：縦縄叩き→叩きのつぶれ 凹面：糸切り痕→布目痕→ナデ	9-16

第 20 図　遺構外出土遺物（2）

丸瓦と平瓦は数的に１：３の割合で瓦の生産を行っていた可能性が高い。

軒丸瓦は調査区全体で７点出土している。いずれも８葉の宝相華文瓦で、瓦当の直径は約 19.5 ㎝、厚さは約 1.7 ～ 2.8 ㎝でややばらつきがある。側面にも縄叩きが施されており、部分的に叩き目が残る資料も存在する。裏面にはナデが施されているが、一部はナデの前に下端部を斜めに削る。瓦当文様は外圏幅が約 0.8 ～ 1.2 ㎝、外区には直径約 0.8 ～ 1.2 ㎝、高さ約 3㎜の珠文が８個配されていると推測されるが、最上部の珠文範囲はは瓦范が削り取られていた可能性がある（F-5、第 19 図 8）。花弁は葛葉形を呈し、その間にはやや長い雫形の間弁が規則的に配されている。また中房は圏線によって内外に分けられ、内側には直径約 1.6 ㎝、高さ約 4㎜の珠文が１個、外側には直径約 0.8 ～ 1.0 ㎝、高さ約 3㎜の珠文が４個配されている。また瓦范の板目が見えるものも存在する。いずれも特定の間弁が中軸線上に配置されるように瓦当面と丸瓦が規則性をもって接合されている。接合方法は印籠式で瓦当に接した丸瓦の上部には厚さ約２㎝の粘土が継ぎ足されている。范傷は瓦当面を正面から見て外区の真下の珠文と左上の珠文、中軸線の左隣の下側花弁の先端から外区にかけ、中房の外側の珠文の内、左上と左下の珠文に認められる。また一部の珠文は上面が扁平化しており、范傷の顕在具合と珠文上面の扁平化具合から軒丸瓦の新旧関係は以下のようになる。

F-6（第 16 図 2）→ F-7（第 16 図 3、間弁の范傷の顕在化）、→ F-1・2（第 19 図 5・6、内区珠文の扁平化）

軒平瓦は調査区全体で６点出土している。全体像を窺える資料は出土していないが陸奥国分寺跡の出土例から直径約 2.0 ～ 2.5 ㎝の珠文が 10 個配されていたものと推測される。瓦当部の厚さは 3.5 ～ 5.5 ㎝、顎部の幅は 7.8 ～ 8.6 ㎝で、平瓦の凸面に粘土板を継ぎ足して形成している。瓦当面の外区枠は最大で 1.2 ㎝である。瓦范と平瓦の湾曲が異なるため、平瓦部の端部が瓦当紋様よりも反り上がるが、瓦当部の厚さが足りず瓦范の上部が平瓦部の凹面にまでいたってしまい、瓦当紋様の上側が途切れている資料も存在する。実際に G-6（第９図 2）は瓦当面の上部が途切れ､珠文の上側まで欠損している。珠文間には三角形の陽出部が圏線から独立した形で配されている。瓦当面や顎部には縄叩きが施され、顎部はその後ヘラ状工具もしくは指で山形文が描かれている。断面はやや長い三角形を呈する。

平瓦はいずれも縄叩きの一枚造りである。全体像を窺える資料は出土していないが、全長約 34.2 ～ 38.0 ㎝、狭端幅約 23.5 ～ 26.7 ㎝、広端幅約 26.1 ～ 26.9 ㎝である。凸型台で成型したもの（A 類）と、成型後の A 類を凹型台に設置し、その際の圧痕が凸面の端部に残り、縄叩き目が潰れたもの（B 類）が存在する。B 類は凹面の布目の一部がナデ消しされている。また B 類成型の際の凹型台に窪みを設け、凸面を押し付けた際にその圧痕である方形突出も２点確認されている。一部の平瓦の凹面、もしくは凸面にはヘラ状の道具を用いて線刻が施されているものが存在している。形状から文字の一部であると推測されるものも存在するが、判読できる資料はない。

丸瓦はいずれも粘土紐巻上げの有段式で、縄叩きが施された後に回転を用いた横方向のナデが施され、叩き目がナデ消しされている。有段部の狭端幅は 9.5 ㎝、広端幅は 14.1 ～ 17.6 ㎝、丸瓦部の狭端幅は 16.6 ～ 18.0 ㎝、広端幅は 16.8 ～ 19.8 ㎝、全長は 37.2 ～ 38.7 ㎝である。

須恵器は調査区一括と SO2 窯跡から坏と甕などが出土している。坏は２点とも底部切り離しが回転ヘラ切調整である。SO2 窯跡から出土した資料は口径 13.8 ㎝、底径 6.6 ㎝、器高 4.0 ㎝で口径と底径の比率は１：0.47 で、口縁部は緩やかに外反する。器形および調整は仙台市が調査を行った五本松窯跡の第１・２次調査で出土した B Ⅱ類と類似する。

５　まとめ

今回の調査では窯跡２基、溝跡２条、灰原２基を検出した。検出した遺構のうち、斜面の下側にある SO2 窯跡が最も古く、SO1 窯跡と SD1・2 溝跡は同時期に機能していたものと推定される。また２号灰原は最も新しい遺構

表３　穴田東窯跡第１次調査区から出土した遺物の破片数および重量一覧表

遺構名	出土遺物															
	平瓦		丸瓦		軒平瓦		軒丸瓦		不明瓦		土師器		須恵器		その他	
S01、１号灰原	409 個	77,783 g	137 個	18,360 g	1 個	85 g	9 個	1,205 g	88 個	1,347 g	0 個	0 g	0 個	0 g	2 個	70 g
S02	126 個	30,800 g	51 個	9,850 g	4 個	1,550 g	4 個	3,040 g	41 個	765 g	0 個	0 g	3 個	20 g	4 個	300 g
２号灰原	20 個	5,490 g	4 個	185 g	0 個	0 g	0 個	0 g	11 個	90 g	0 個	0 g	0 個	0 g	0 個	0 g
遺構外	523 個	111,055 g	149 個	17,480 g	8 個	2,740 g	13 個	3,630 g	36 個	445 g	3 個	50 g	2 個	100 g	3 個	92 g
合計	1,078 個	225,128 g	341 個	45,875 g	13 個	4,375 g	26 個	7,875 g	176 個	2,647 g	3 個	50 g	5 個	120 g	9 個	462 g
瓦総数	1,634 個			瓦総重量		285,900 g										

である可能性が高いことから、斜面の下側から順に遺構を構築したものと考えられる。また２基の窯跡はいずれも調査区外にも広がっており、今回発見された窯以外にも近隣には他の窯が存在している可能性が高い。

S01窯跡の南側には１号灰原が、両脇にはSD1・2溝跡が配されておりSD1・2溝跡はS01窯跡の周囲をめぐる排水溝、もしくは作業用の通路であったと推測される。同様の事例は利府町の硯沢窯跡A-8号窯跡や古窯跡研究会が調査を行った安養寺下瓦窯跡群などを挙げることができる。

出土した軒瓦の文様の種類から、遺構の時期はいずれも多賀城Ⅳ期の９世紀後半以降に比定されるが、この時期は貞観11（869）年に起きた大地震により多賀城や陸奥国分寺などにも大きな被害が出たことが知られており、実際に陸奥国分寺跡では今回出土した宝相華文軒丸瓦と連珠文軒平瓦は創建期の瓦に次ぐ量が出土している。今回調査を行った穴田東窯跡の近隣の堤町Ｂ窯跡や堤町瓦窯跡、五本松窯跡などでも同様の軒先瓦や須恵器が出土していることから、これらの窯跡は一連の窯跡群を形成していたものと考えられ、貞観地震からの復興のために瓦を生産していたと考えられる。また平瓦は凹型台を利用して凹面を調整したＢ類が一定数出土した。この形式は多賀城跡の調査では平瓦ⅡＢ類に、陸奥国分寺跡の1989年の調査ではⅤ類に分類され、生産時期は多賀城Ⅲ期（９世紀後半以前）までと想定されていたが、前述した五本松窯跡の第１・２次調査や硯沢・大沢窯跡の調査でも多賀城Ⅳ期以降の軒瓦が須恵器と共に出土していることから、多賀城Ⅳ期以降も製作されていたことが指摘されている。今回の資料もそれを裏付けるものであると言え、両者の違いは必ずしも年代としての差ではなく、系統としての差も考慮する必要があるものと思われる。

引用・参考文献

工藤雅樹　1965　「陸奥国分寺出土の宝相花文鐙瓦の製作年代について　－東北地方における新羅系古瓦の出現－」『歴史考古第13号』

古窯跡研究会　2009　「陸奥国官窯跡群Ⅶ　仙台市安養寺下瓦窯跡報告書」『仙台育英学園高等学校研究紀要24』

佐川正敏　2014　「貞観地震復旧瓦生産における新羅人の関与について」『宮城考古学　第16号』

仙台市教育委員会　1982　『仙台平野の遺跡群Ⅰ（堤町Ｂ窯跡第１次）』仙台市文化財調査報告書第37集

仙台市教育委員会　1987　『五本松窯跡　－都市計画道路「川内・南小泉線」関連遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第99集

仙台市教育委員会　1990　『仙台平野の遺跡群Ⅸ（陸奥国分寺第23次）』仙台市文化財調査報告書第134集

仙台市教育委員会　2010　『与兵衛沼窯跡　－都市計画道路「川内・南小泉線」関連遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第366集

仙台市教育委員会　2016　『薬師堂東遺跡Ⅱ　－仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査報告書Ⅺ』仙台市文化財調査報告書第443集

宮城県教育委員会　多賀城跡調査研究所　1982　『多賀城跡　政庁跡　本文編』

宮城県教育委員会　1987　『硯沢・大沢窯跡ほか』宮城県文化財調査報告書第116集

陸奥国分寺跡発掘調査委員会編　1961　『陸奥国分寺跡』

６　穴田東窯跡から出土した炭化材の樹種同定と花粉分析

吉川昌伸・吉川純子（古代の森研究舎）

穴田東窯跡は仙台市青葉区堤町に所在する平安時代の瓦窯跡である。今回の調査では窯跡２基、灰原２基、溝跡２条が確認された。これらの遺構からは炭化材の破片が検出されていることから当時の瓦窯燃料材としての木材利用状況を調査する目的で４遺構から出土した炭化材 10 点の樹種同定を実施した。また、周辺の植生等推定する目的で堆積物の花粉分析をおこなった。

Ⅰ　炭化材

炭化材試料からはステンレス剃刀で横断面、放射断面、接線断面の３方向の断面を割りプレパラートに固定して反射光式顕微鏡で観察・同定した。樹種同定結果を表４に示す。４遺構からは４分類群が確認され、最も多かったのはナナカマド属５点で、ついでクマシデ属とコナラ属コナラ節が各２点、ウワミズザクラ属が１点であった。窯跡本体から出土しているのはクマシデ属、ナナカマド属、コナラ属コナラ節であるが、これら３種は灰原や溝跡からも出土しており、瓦を取り出す際に窯から出た破片が周囲に堆積した可能性がある。ウワミズザクラ属とナナカマド属は、着火は緩慢だが火持ちがよく長時間燃焼する。また、クマシデ属は福島県沿岸部の原町市割田Ｈ遺跡製鉄炉跡や相馬市向田Ｄ遺跡炭窯など燃料材を製造する窯から出土する例が多く（伊東ほか 2012）コナラ属材同様、燃料材として当時頻繁に使われていたと推測される。宮城県の平安時代における窯跡炭化材出土例は大変少なく、仙台市では五本松窯跡で燃料材としてサクラ属、ブナ属、モチノキ属の３点が確認されているだけであるが、同遺跡の窯の天井構架材として出土した炭化材にはクマシデ属とコナラ属コナラ節が多く確認されている。

表４　穴田東窯跡出土炭化材の樹種

遺　構	遺物番号	枝番号	樹　種
１号灰原	13	a	コナラ属コナラ節
	13	b	ウワミズザクラ属
	16	a	クマシデ属
	16	b	ナナカマド属
SD1 溝跡	24		ナナカマド属
SO1 窯跡	40		クマシデ属
SO2 窯跡	55		コナラ属コナラ節
	71	a	ナナカマド属
	71	b	ナナカマド属
	71	c	ナナカマド属

以下に同定された炭化材の細胞構造学的記載を行う。

クマシデ属（Carpinus）：中程度の道管が放射方向に数個複合してまばらに分布する散孔材で道管は単穿孔、道管内壁にらせん肥厚が見られる。放射組織は異性で 1-3 細胞幅で顕著な集合放射組織がある。

コナラ属コナラ節（Quercus sect. Prinus）：年輪初めに大きな道管が数列配列し急に径を減じて小道管が波状に配列する環孔材で道管は単穿孔、放射組織は同性で単列と幅の広い広放射組織がある。

ナナカマド属（Sorbus）：やや小さい道管が単独ないし数個不規則に複合して比較的密に分布する散孔材で晩材部でやや径が小さくなる。道管は単穿孔で内壁に水平に近いらせん肥厚がある。放射組織はほぼ同性で 1-2 細胞幅。

ウワミズザクラ属（Padus）：中程度の道管が単独ないし数個塊状に複合して晩材部に向かって径を減じながらややまばらに分布する散孔材で、道管は単穿孔で内壁にらせん肥厚がある。放射組織は異性で 1-5 細胞幅である。

Ⅱ　花粉分析

１．花粉分析試料と方法

穴田東遺跡から出土した２号灰原では、堆積物がいくぶん有機質であるため、水つきの堆積物である可能性があることから花粉化石について調査した。２号灰原１・２層から採取された No.３試料（層厚約 10 ㎝幅で採取）の下部と上部層準で行った。堆積物は、灰黄色ないしにぶい黄色細粒砂質シルトからなり極粗粒砂を混入する。

花粉化石の抽出は、試料約 2g を秤量し体積を測定後に 10%KOH、傾斜法により粗粒砂を除去、48%HF、比重分離

(比重 2.15 の臭化亜鉛)、アセトリシス処理の順に処理を行った。プレパラート作製は、残渣を適量に希釈しタッチミキサーで十分撹拌後、マイクロピペットで取り重量を測定（感量 0.1mg）しグリセリンで封入した。同定と計数はプレパラートの全面を行った。

分析試料の堆積物の特徴にかかる有機物量、砂分量、シルト以下の細粒成分量、および生業の指標となる細粒微粒炭量を求めた。有機物量については強熱減量を測定し、電気マッフル炉により 750℃で 3 時間強熱し、強熱による減量を乾燥重量百分率で算出した。細粒微粒炭量は、プレパラートの顕微鏡画像をデジタルカメラで取り込み、画像解析ソフトの ImageJ で 75 μ m2 より大きいサイズの微粒炭の積算面積を計測した。

２．結果と考察

分析試料の堆積物は、下部は砂 22.0%、シルトから粘土 71.0%、有機物 7.0%、上部は砂 26.7%、シルトから粘土 66.2%、有機物 7.1% であった。

検出された分類群は、樹木花粉が 2、草本花粉が 1、シダ植物胞子が 2 と少なかった（表 5)。産出した花粉・胞子数は、全体で 27 ～ 55 粒と少なく、このうち大半をシダ植物胞子が占めた。産出した分類群は、樹木がマツ属複維管束亜属とコナラ属コナラ亜属、草本がキク科、シダ植物がゼンマイ科と単条型胞子であった。細粒微粒炭は 12 ～ 24 mm2/cm2 と少なかった。

表 5　2 号灰原 1・2 層の No.3 試料から検出された花粉胞子石の一覧表

和　名	学　名	上部	下部
樹 木			
マツ属複維管束亜属	Pinus subgen. Diploxylon	1	1
コナラ属コナラ亜属	Quercus subgen. Lepidobalanus	-	2
草 本			
キク科（キクニガナ亜科除く）	Asteraceae (excluding Cichorioideae)	1	-
シダ植物			
ゼンマイ科	Osumandaceae	9	23
単条型胞子	Monolete spore	16	29
樹木花粉	Arboreal pollen	1	3
草本花粉	Nonarboreal pollen	1	0
シダ植物胞子	Fern spores	25	52
花粉・胞子数	Pollen and Spores	27	55
不明花粉	Unknown pollen	2	3
細粒微粒炭量 (mm2/cm3)		12	24

検出された花粉化石の分類群数と粒数は少なかった。花粉化石が少ない要因としては、シダ植物胞子は花粉より酸化分解に対し相対的に強靭であり、キク科花粉の外層が分解されていたことから、花粉の多くは化学的に酸化分解された可能性が推定される。したがって、森林植生に関する資料は得られなかったが、周辺にはゼンマイや他のシダ植物が生育していたと考えられる。また、マツ属複維管束亜属やコナラ亜属は比較的保存状態が良いことから現生花粉などが混入した可能性がある。

第 21 図　灰原から検出されたシダ植物胞子
1：ゼンマイ科　2-3：単条型胞子　スケール＝ 10 μ m

Ⅲ　当時の植物利用と周囲の環境

本遺跡の炭化材と花粉分析の結果および近隣の五本松窯跡の樹種同定結果から、遺跡の周辺はコナラ属コナラ節やクマシデ属が生育する二次林で、これらは萌芽更新することから薪炭林として一定期間利用していたことが考えられる。ナナカマド属やウワミズザクラ属などは薪炭林に混在していたと考えられる。また林の林床や林縁などにはゼンマイ属を含むシダ植物が生育していたとみられる。

引用・参考文献

伊東隆夫・山田昌久．2012．木の考古学　出土木製品用材データベース．海青社．
高橋利彦．1987．五本松窯跡 D 地点出土炭化材同定．仙台市文化財調査報告書第 99 集　五本松窯跡　都市計画道路「川内・南小泉線」関連遺跡発掘調査報告書．仙台市教育委員会．155-166.

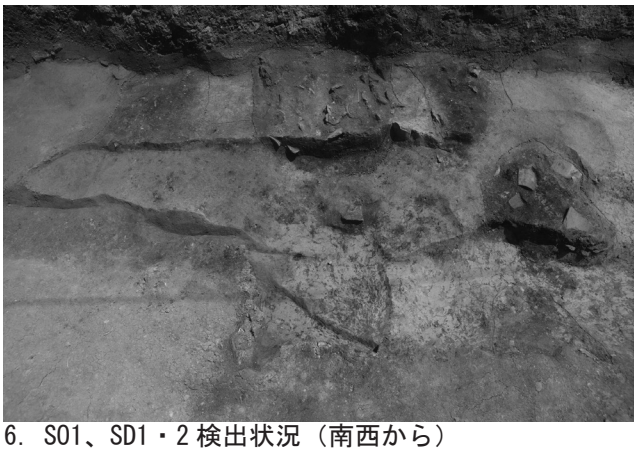
1. 調査区遠景空撮（南西から）

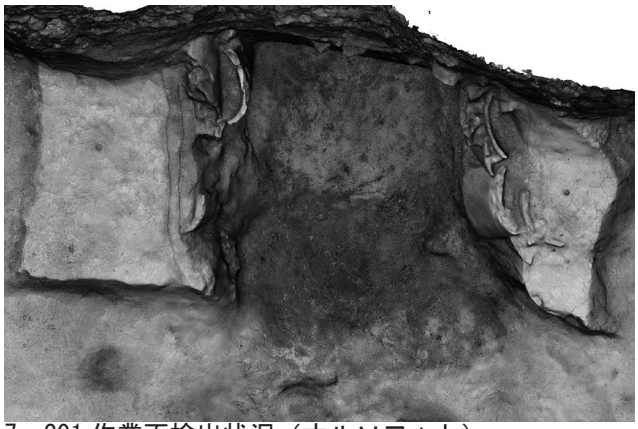
2. 遺構一部完掘状況（オルソフォト）

3. SO1、1・2号灰原検出状況（西から）

4. 1号灰原土層断面（北西から）

5. SO1 土層断面（南西から）


6. SO1、SD1・2検出状況（南西から）


7. SO1 作業面検出状況（オルソフォト）

8. SO1 壁面瓦設置状況（南西から）

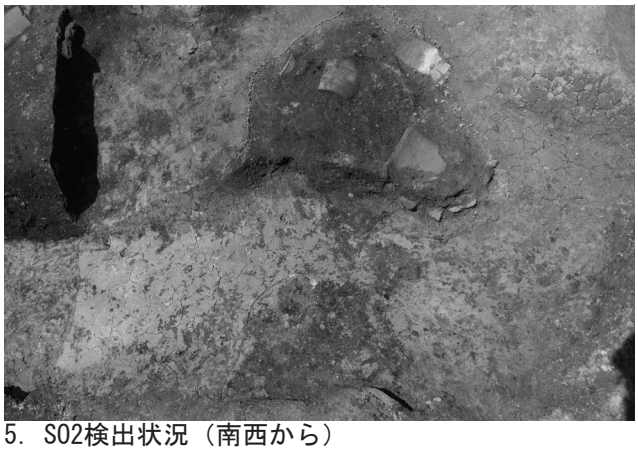
写真図版１　穴田東窯跡第１次調査（1）

1. S01 壁面瓦設置状況（北西から）

2. S01 完掘状況（南西から）

3. S01 土層断面（南西から）

4. S01 付近調査区北壁土層断面（南西から）

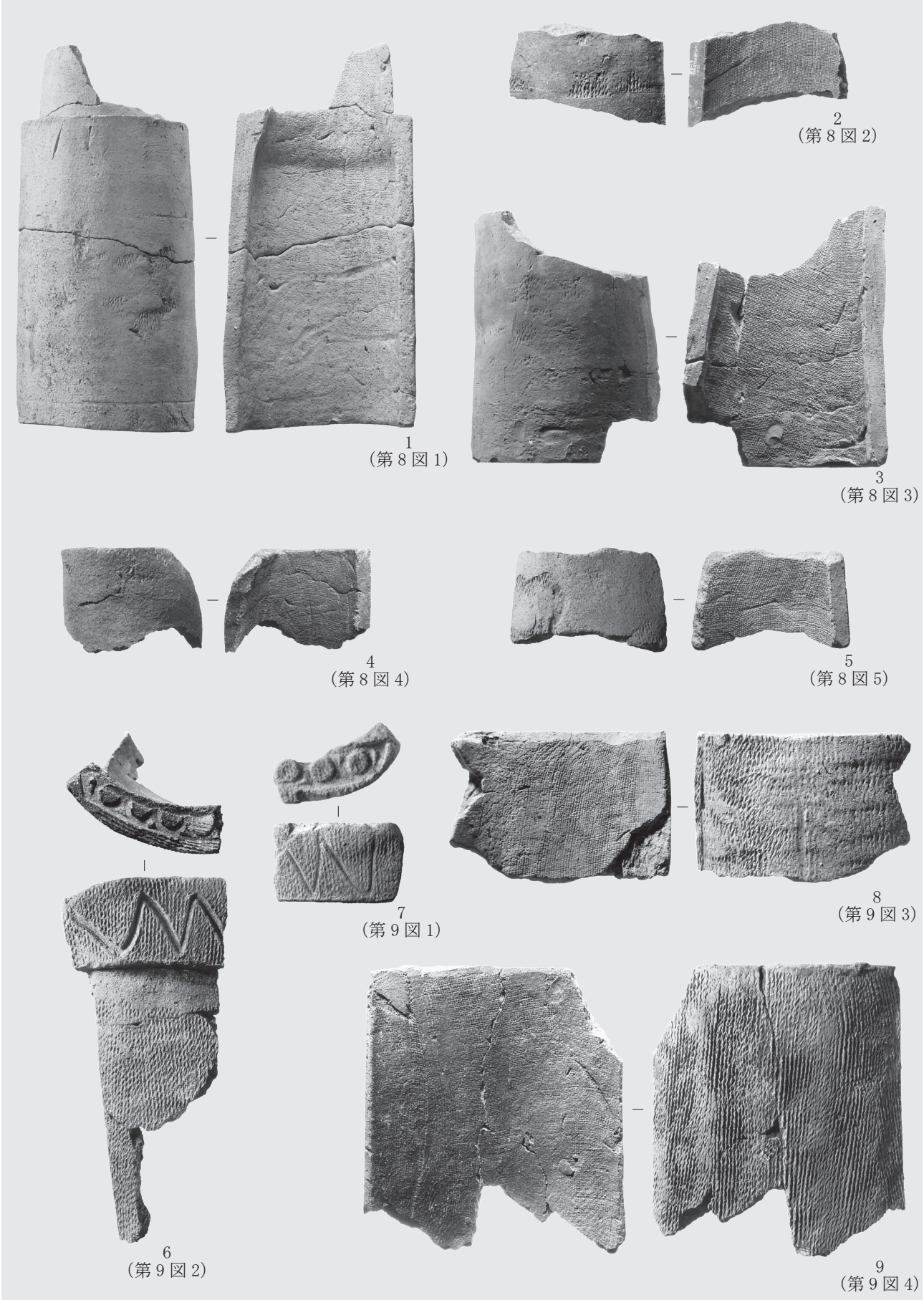

5. S02検出状況（南西から）

7. S02 完掘、底面遺物出土状況（南西から）

7. S02 土層断面（西から）

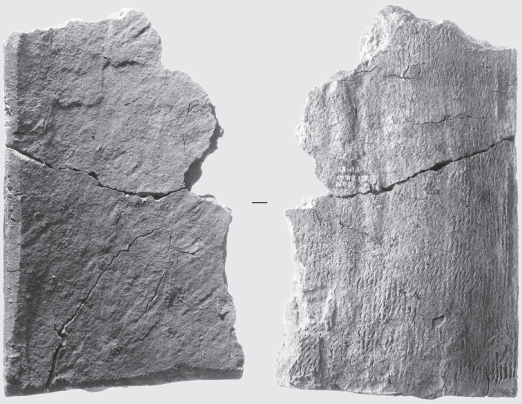
8. 2 号灰原土層断面（西から）

写真図版 2　穴田東窯跡第 1 次調査（2）



写真図版３　穴田東窯跡第１次調査出土遺物（１）

1
（第 10 図 1）

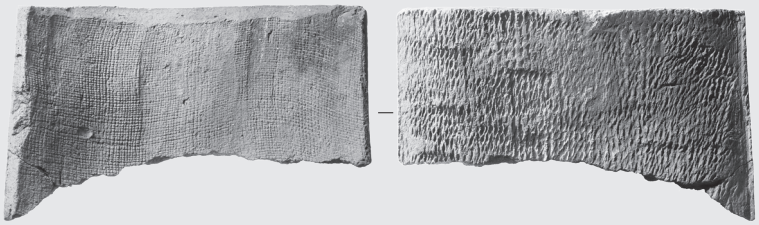


2
（第 10 図 2）

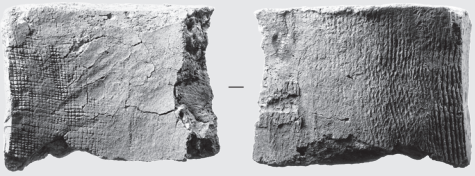
3
（第 10 図 3）

4
（第 11 図 1）

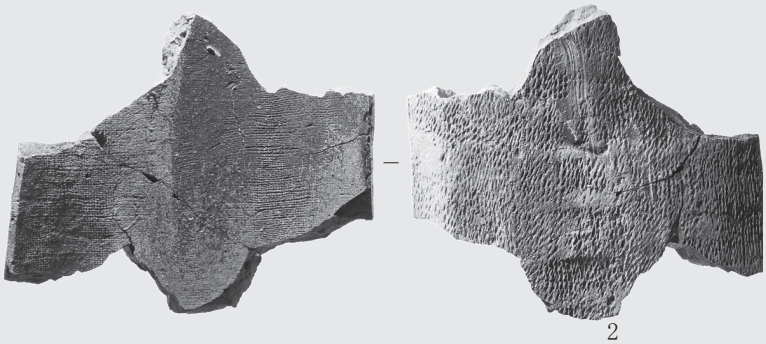
写真図版 4　穴田東窯跡第 1 次調査出土遺物（２）



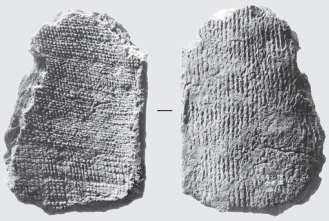
1
（第 11 図 2）



3
（第 12 図 1）

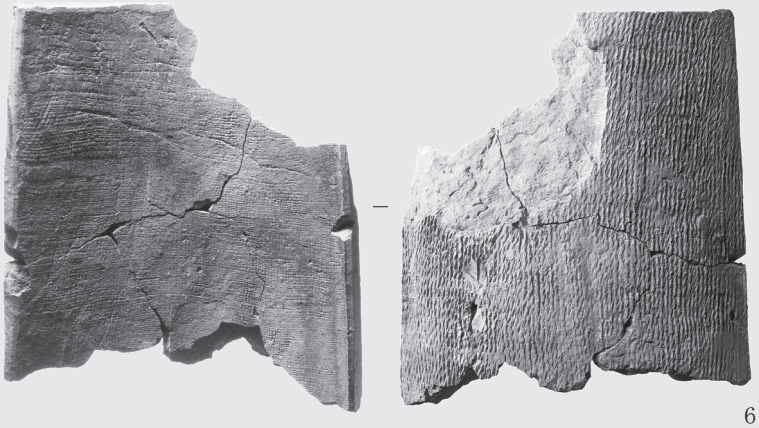


2
（第 11 図 3）



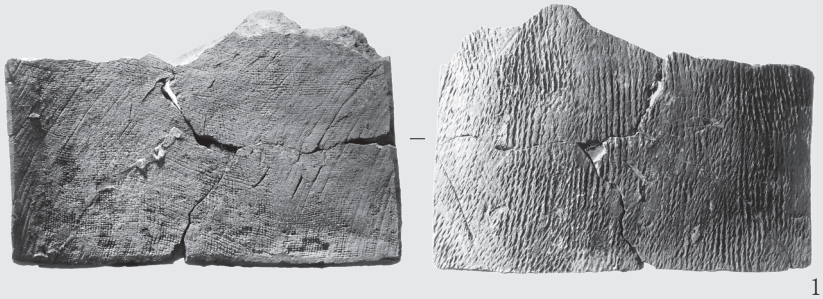
4
（第 12 図 2）

5
（第 12 図 3）

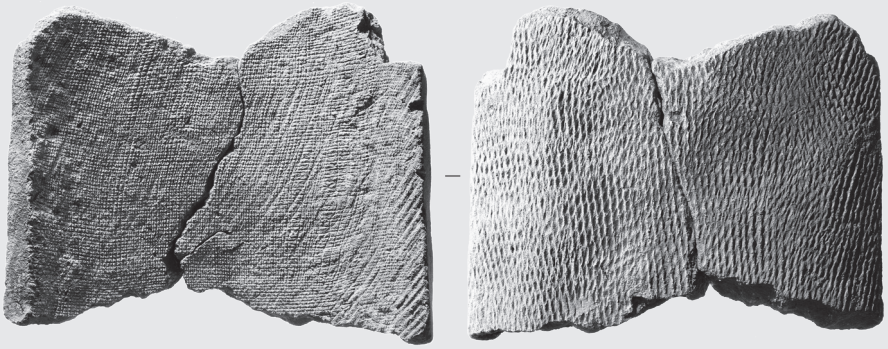


6
（第 12 図 4）

写真図版５　穴田東窯跡第１次調査出土遺物（３）

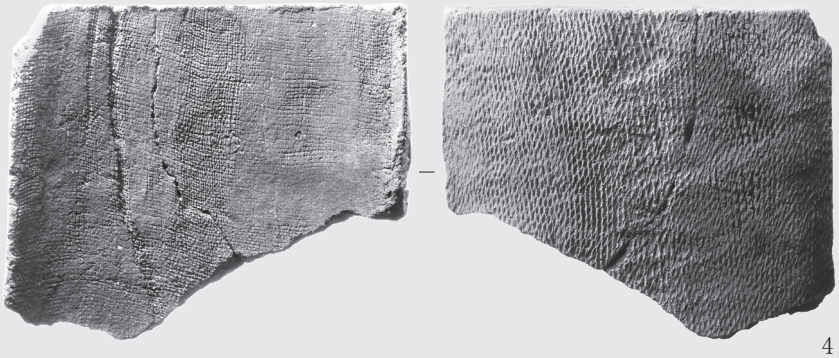


1
（第 13 図 1）

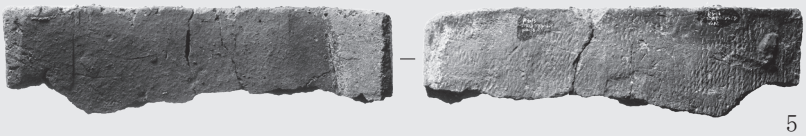


2
（第 13 図 2）

3
（第 13 図 3）

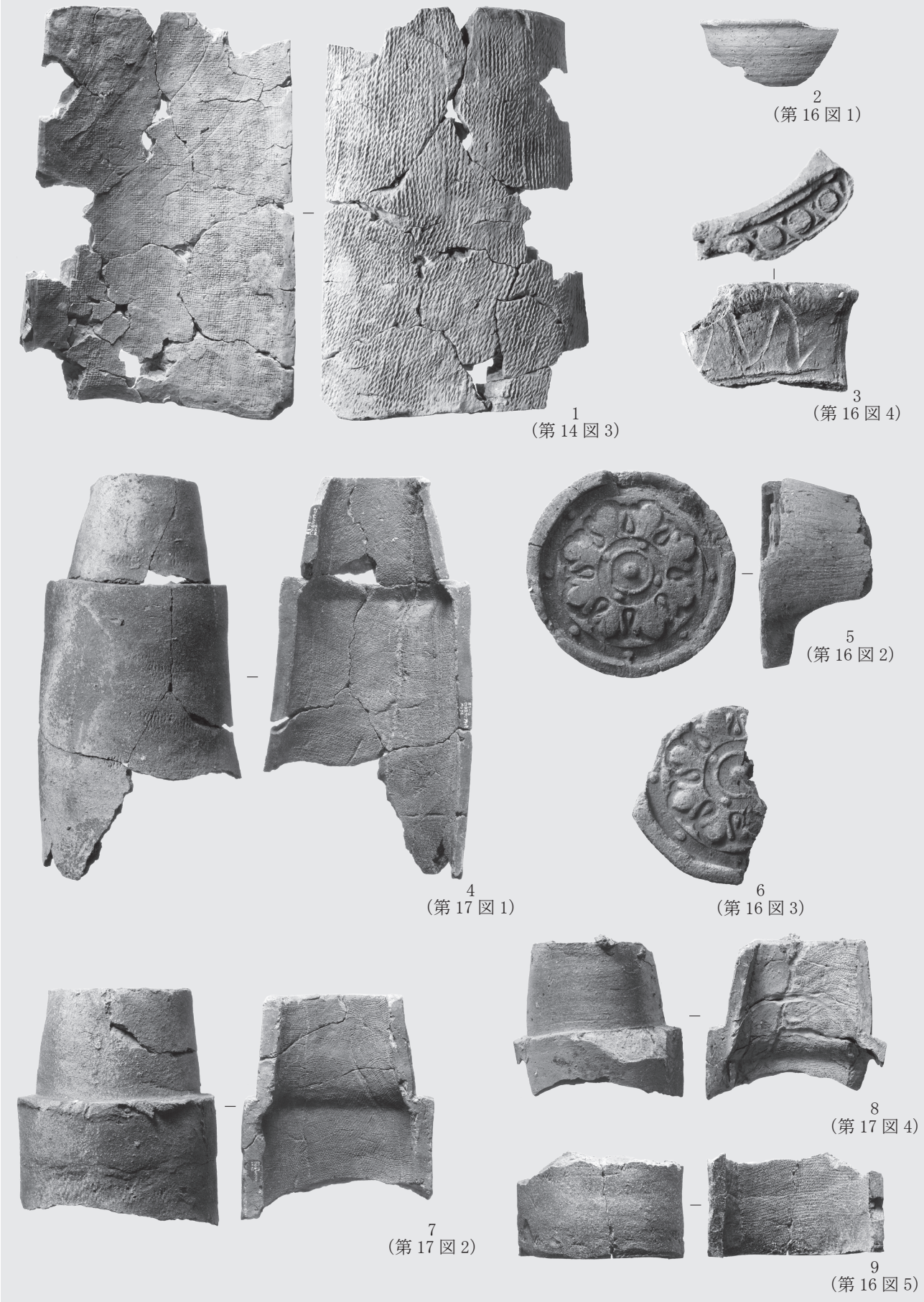


4
（第 14 図 1）

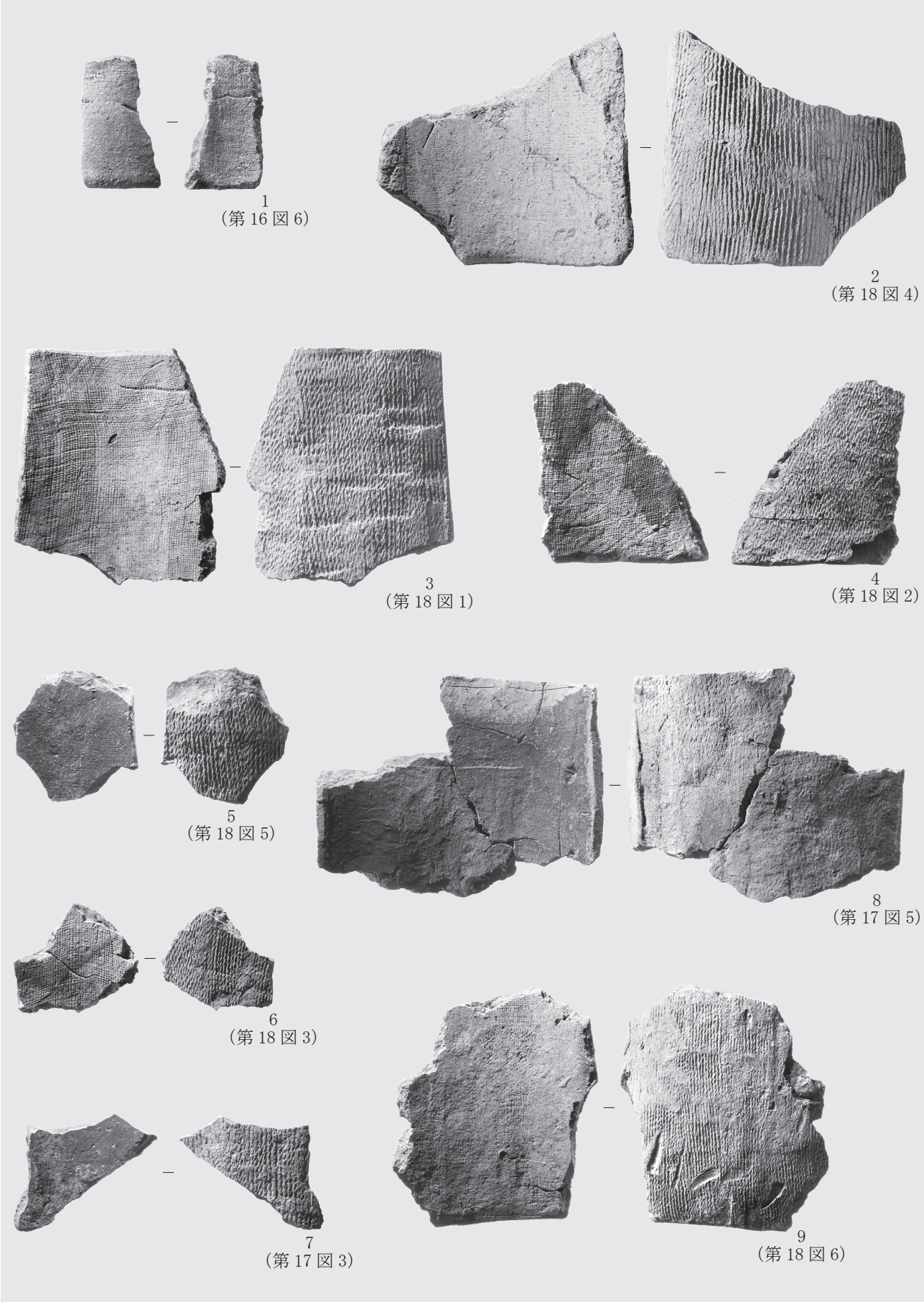


5
（第 14 図 2）

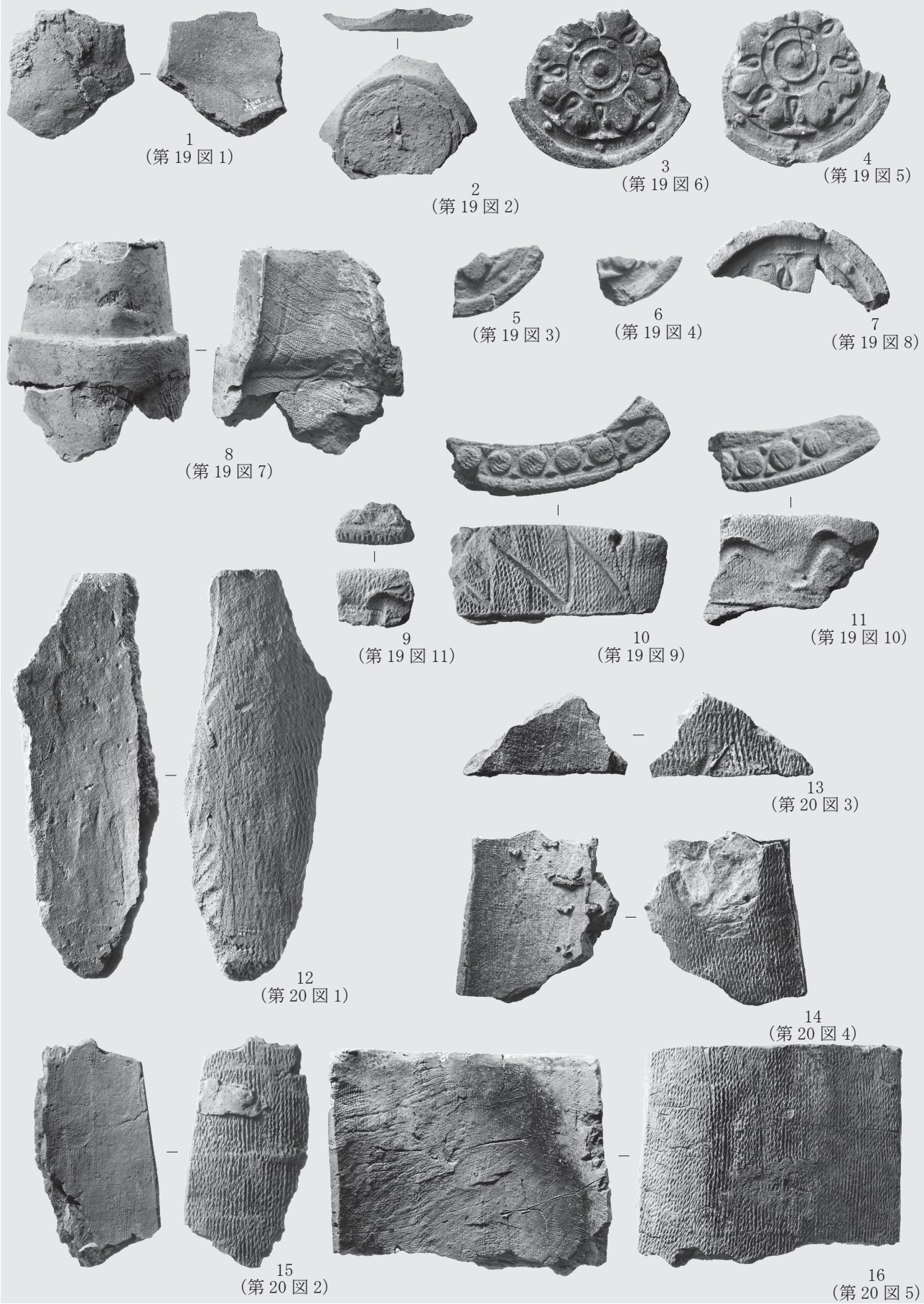
写真図版 6　穴田東窯跡第 1 次調査出土遺物（４）



写真図版７　穴田東窯跡第１次調査出土遺物（５）



写真図版 8　穴田東窯跡第 1 次調査出土遺物（６）



写真図版 9　穴田東窯跡第 1 次調査出土遺物（７）

第３章　富沢遺跡の調査

第１節　遺跡の概要

富沢遺跡は、仙台市南東部の太白区富沢、長町、長町南、泉崎、鹿野等に広くまたがる、水田跡を中心とする大規模な複合遺跡である。遺跡北西側には青葉山丘陵、南西には高舘丘陵が東に向かって張り出し低地部と面している。また、青葉山丘陵南東縁には長町・利府構造線と呼ばれる活断層が北へ伸び、それによって低地と丘陵部はより明確に分けられる。青葉山丘陵と高舘丘陵の間から平野部に流れ込む名取川の下流域西半部は沖積平野となっており、左岸は郡山低地、右岸は名取低地と呼ばれる。

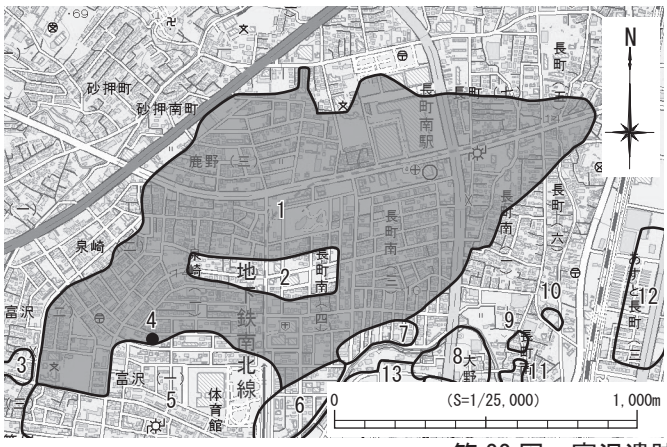
本遺跡は郡山低地の中央西寄りに位置し、仙台平野を南東方向に流れる広瀬川と、名取川の支流である笊川の自然堤防に挟まれた後背湿地上に立地する。地質や富沢遺跡における土地条件の変遷については、富沢遺跡第 15 次調査報告書に詳細に記載されていることから、そちらを参照されたい。

富沢遺跡の発掘調査件数はこれまで 150 次を数え、弥生時代から近世にかけての水田が重層的に検出されている。特に 1987 ～ 1988 年の第 30 次調査では古代の条里型土地区画に関わる大畦畔の検出に加え、旧石器時代の遺構や遺物も発見されており重要である。今回の 151 次調査地点の近辺では、西に隣接する旧鍋田変電所の建設に伴う 13 次、太白区役所建設時の 28 次、東に隣接する県道仙台・館腰線建設の際の 49 次調査など多数行われている。それぞれ水田に伴う多くの畦畔や溝跡などが検出され、学史的に大きな成果を上げている。一方で、富沢遺跡周辺には数々の遺跡が分布しており、通時的に見て生活に適した場所であったと考えられる。以下、主要な近辺の遺跡に触れ富沢の歴史環境を概観したい。

下ノ内浦遺跡：富沢遺跡の南に隣接する縄文時代早期～前期・後期・弥生～古代にかけての集落跡および水田跡である。日計式土器とともに竪穴遺構と７基の土壙が検出されていることから、縄文早期にも近辺では生活の痕跡が確認できる。また、平安時代と考えられる水田跡が検出されている。

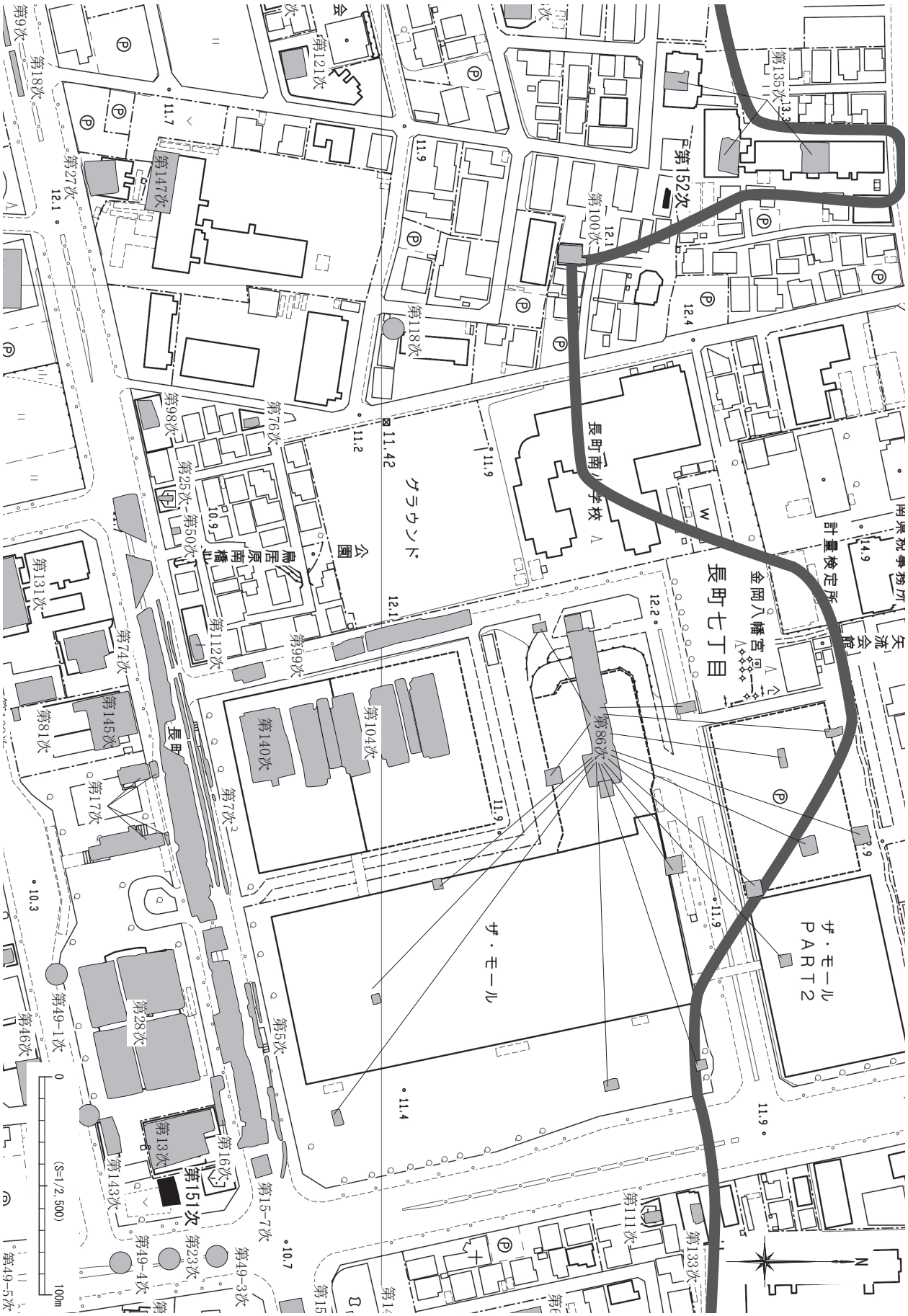
山口遺跡：富沢遺跡に南接、下ノ内浦遺跡に西接する縄文時代早期末～後期・弥生・中世にかけての集落跡および水田跡である。山口遺跡で検出された平安時代の水田跡は 10 世紀前半とされる火山灰層で覆われており、真北方向を基準とする大畦畔と直交する小畦畔によって区画される。この大畦畔は富沢遺跡の各調査でも検出されており、条里型土地割に関わる畦畔であると考えられている（平間　1991）。

泉崎浦遺跡：富沢遺跡のほぼ中心部に位置する、縄文～古墳・平安・近世にかけての集落跡および水田跡である。後背湿地と微高地に位置し、後背湿地側で弥生時代と平安時代の水田跡が検出された。畦畔は東西と南北が意識されているが、弥生時代の水田は水田規模、枚数などは不明である。



番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	富沢遺跡	包含地、水田跡	後背湿地	後期旧石器～中世
2	泉崎浦遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防、後背湿地	縄文～古墳、平安、近世
3	富沢清水遺跡	集落跡	自然堤防	奈良～平安
4	教塚古墳	円墳	後背湿地	古墳
5	山口遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防、後背湿地	縄文～中世
6	下ノ内浦遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防	縄文～中世
7	袋東遺跡	散布地	自然堤防	古墳～古代
8	元袋遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防	弥生、古代～近世
9	長町南遺跡	集落跡	自然堤防	奈良～平安
10	長町六丁目遺跡	集落跡	自然堤防	奈良～平安
11	新田遺跡	集落跡	自然堤防	奈良～平安
12	長町駅東遺跡	包含地	自然堤防	弥生、古墳、古代
13	六反田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文～古代、近世

第 22 図　富沢遺跡と周辺の遺跡

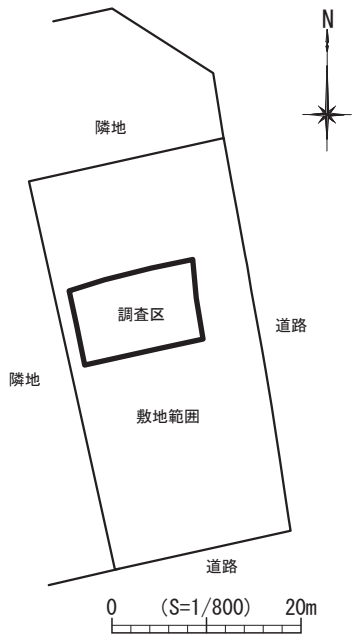


第 23 図　富沢遺跡 151・152 次調査区位置図

第２節　第 151 次調査

１．調査要項

遺　跡　名	富沢遺跡（宮城県遺跡登録番号：01369）
調 査 地 点	仙台市太白区長町南３丁目１－２、１－３
調 査 期 間	令和３年８月 23 日～ 10 月 18 日
調査対象面積	354.13 ㎡（敷地面積：849.89 ㎡）
調 査 面 積	約 93.6 ㎡
調 査 原 因	共同住宅建築工事
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係
担 当 職 員	主査　菅原翔太　　主事　早川太陽



第 24 図　第 151 次調査区配置図

２．調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、令和３年５月 21 日付で事業者から提出された「埋蔵文化財の取扱いについて（協議）」（令和３年５月 25 日付 R3 教生文第 109-21 号で回答）に基づき実施した。調査開始までには事前に現地確認を行い、重機の搬入経路や調査対象となる範囲の確認を行いながら、付近の建物や電柱に注意しつつ調査を開始することとした。また、範囲内の草木が重機の進入や調査の妨げとなることから、事前に伐根を行ってから掘削を開始した。調査区の大きさは約 40 ㎡であるが、安全を考慮して GL-2.0m を目安に中段をつけて調査区を縮小した。掘削排土は場内仮置きとした。掘削の際は重機と人力を併用した。重機で盛土とⅠ層およびⅡ層を除去した後、側溝の掘削により水田耕作土を確認し、Ⅲ・Ⅶ・Ⅸ・Ⅻ層上面において精査を行った。Ⅻ層の調査終了後は、部分的な掘り下げによる断面での調査に切り替えた。出土遺物はナンバーをつけて層位ごとに取り上げた。10 月 18 日まで調査区内の遺構の完掘および計測、重機による埋め戻し等を行い、野外調査を終了した。

遺構の記録については、平面図はトータルステーションと遺構実測支援システムを用い、また適宜断面図（S＝1/20）を作製した。記録撮影にはデジタルカメラを用いた。

３．基本層序

基本層は厚さ約 1.6 mの盛土下にⅠ～XⅥ層まで確認している。土層の観察については調査担当者が全調査区で統一した見方によって行った。どの層でも年代を決定できるような遺物が出土しなかったため、過去の調査履歴と比較して対応させ年代を決定した。Ⅰ～Ⅱ層は近～現代の水田耕作土であり、Ⅲ層以下は中世～弥生時代の水田耕作土と泥炭質粘土のラミナ状自然堆積層が続く。

Ⅰ　層：2.5Y3/1 黒褐色シルト。径 10 ～ 20 ㎜の小礫を含んでいる。層厚は約 15 ～ 20 ㎝である。層中に陶磁器を少量含む。現代の耕作土である。

Ⅱ　層：2.5Y3/2 黒褐色シルト。層厚は０～８㎝である。全体的に残存状況はあまりよくない。径 10 ㎜程度の酸化鉄粒を下面に斑状に含んでいる。水田耕作土の可能性がある。

Ⅲ　層：5Y2/2 オリーブ黒色粘土。層厚は約３～ 25 ㎝である。下面の凹凸が激しく、 Ⅳ層に由来する灰白色の火山灰ブロックを少量含んでおり、調査区の東側に向かうほどⅣ層を攪拌しているため灰色に近くな

表６　土層対応表

	151 次				28 次			49 次		
層位名	色調	土性	成因	特徴	対応層	水田の有無	所属年代	対応層	水田の有無	所属年代
Ⅰ	黒褐色	シルト	水田耕作土	杭貫入	1	水田耕作土	現代	1	水田	現代
Ⅱ	黒褐色	シルト	水田耕作土？	酸化鉄粒斑状に含む	２？	水田耕作土？	近現代	２？	水田耕作土？	近現代
Ⅲ	オリーブ黒	粘土	水田耕作土	下層の火山灰含む水田を攪拌、畦畔段差状に残る	3	水田耕作土？	近世	3a	水田耕作土？	
Ⅳ	黄灰色	粘土	水田耕作土	火山灰ブロック含む、酸化鉄粒を斑状に含む	4	水田耕作土？	平安以降	4a	水田耕作土？	平安
Ⅴ	黒色	粘土	自然堆積土	下層ブロックを斑状に含む		－	－		－	－
Ⅵ	オリーブ黒・黄褐色	粘土	自然堆積土	互層	６？	－	－	6a	－	－
Ⅶ	黒褐色	粘土	水田耕作土	下面が乱れ下層ブロックを含む	9a ？	水田耕作土	弥生（十三塚）	9a ？	水田耕作土	弥生
Ⅷ	オリーブ黒・黒色	泥炭質粘土	自然堆積土	互層	10a ？	－	－	10a ？	－	－
Ⅸ	黒褐色	粘土	水田耕作土	黄褐色土ブロックを少量含む	10b	水田耕作土	弥生（枡形囲以降）	10b ？	水田耕作土	弥生
Ⅹ	黒褐色・灰黄褐色	泥炭質粘土	自然堆積土	互層	10c	－	－	10c	－	－
XI	黒褐色・灰黄褐色	泥炭質粘土	自然堆積土	互層		－	－		－	－
XII	黒褐色	粘土	水田耕作土	下面に酸化鉄ブロック少量	10d	水田耕作土	弥生（枡形囲以降）	10d ？	水田耕作土	弥生
XIII	黒褐色・灰黄褐色	粘土	自然堆積土	互層　黒褐色粘土ブロックを斑状に含む	10e ？	－	－	10e ？	－	－
XIV	黒褐色	粘土	自然堆積土	部分的に明暗がある		－	－		－	－
XV	黒褐色・灰黄褐色	粘土	自然堆積土	互層	11b ～ 12 上	－	弥生（枡形囲以前）	12a ？	－	－
XVI	黒色・灰黄褐色	粘土	自然堆積土	互層	13	－	－	13	－	－

る。段差状の高まりが検出された。中～近世の水田耕作土と推定される。

Ⅳ　層：2.5Y4/1黄灰色粘土。層厚は約５～20㎝である。西壁際および東壁際の一部に分布する。径10㎜程度の灰白色の火山灰ブロックを含んでいるほか、下面に酸化鉄粒を斑状に含む。下面は凹凸が激しい。過去の調査から、平安期の水田耕作土であると推定される。

Ⅴ　層：2.5Y2/1黒色粘土。層厚は０～10㎝である。下面に下層由来の径約20㎜のブロックを斑状に含む。西壁の一部において、層下面に凹凸が見られる。部分的に欠落する。

Ⅵ　層：5Y2/2 オリーブ黒色粘土と 2.5Y5/4 黄褐色粘土の互層。層厚は約４～ 13 ㎝である。

Ⅶ　層：2・5Y3/1 黒褐色粘土。層厚は約２～８㎝である。層下面には凹凸がある。過去の調査から、弥生時代後期十三塚式段階の水田耕作土と推定される。

Ⅷ　層：5Y2/2 オリーブ黒色と 2.5Y2/1 黒色土の互層。植物遺体を大量に含む泥炭質粘土層である。層厚は約 25 ～ 30 ㎝である。

Ⅸ　層：10YR3/1 黒褐色粘土。層厚は約３～８㎝である。黄褐色土ブロックを少量含む。層下面は凹凸が激しい。弥生時代の水田耕作土と推定される。

Ⅹ　層：2.5Y3/1 黒褐色と 10YR4/2 灰黄褐色土の互層。植物遺体を大量に含む泥炭質粘土層である。層厚は約８～ 12 ㎝である。

XI　層：10YR2/2 黒褐色と 10YR4/2 灰黄褐色土の互層。植物遺体を大量に含む泥炭質粘土層である。層厚は約 10 ～ 15 ㎝である。

XII　層：2.5Y3/2 黒褐色粘土。層厚は約 5 ～ 10 ㎝である。下面に酸化鉄ブロックをごく少量含む。層下面は凹凸が激しい。弥生時代の水田耕作土と推定される。

XIII　層：10YR2/2 黒褐色粘土と 10YR4/2 灰黄褐色粘土の互層。植物遺体が少量と、黒褐色土ブロックを斑状に含む。層厚は約３～ 12 ㎝である。

XIV　層：2.5Y3/1 黒褐色粘土。植物遺体を層下面に大量に含む。層厚は約２～５㎝である。

XV　層：2.5Y2/1 黒褐色粘土と 10YR4/2 灰黄褐色粘土の互層。植物遺体を中ほどに層状に大量に含む。層厚は約 15 ㎝である。

XVI　層：10YR2/1 黒色粘土と 10YR4/2 灰黄褐色粘土の互層。植物遺体を少量含む。層厚は 15 ㎝以上である。

４．発見遺構と出土遺物

近現代を除く水田耕作土を５層（Ⅲ・Ⅳ・Ⅶ・Ⅸ・Ⅻ層）検出し、このうちⅢ層上面で畦畔状の段差１条、Ⅶ層上面で耕作域と非耕作域を検出した。各層の水田は南東から東に向かって約３～５㎝傾斜して低くなっている。

出土遺物は主に土師器 34 点、須恵器４点、陶器 10 点、磁器３点、瓦２点、自然遺物 10 点など計 63 点あり、いずれも小片であるため、写真のみの掲載とした。

（１）Ⅲ層水田跡

１．検出・遺存状況

畦畔状の段差は、直上層を削り込んでいく過程で確認された。一部攪乱されているが、全体的に遺存状況は良好である。

２．耕作土

耕作土はオリーブ黒色粘土である。層厚は約３～ 25 ㎝で一定でなく、平均約 15 ㎝である。

下面の凹凸が激しく、下層の水田耕作土を撹拌して構築されているため灰白色火山灰ブロックを少量含む。

３．遺構の状況

段差はⅣ層の火山灰を含んだ水田耕作土を盛り上げて造られており、南北方向に１条検出された。真北よりも８°ほど東に傾いている。高低差は約３㎝である。断面を観察すると、段差とほぼ一致する箇所にⅣ層の耕作土が遺存している。Ⅲ層水田の耕作により大部分は撹拌されたが本来Ⅳ層は全面に分布しており、段差直下は耕作が及ばないため結果的に帯状に残存したと推定される。概して、大畦畔の直下は下層の耕作土が撹拌されず残る場合が多いため、今回のⅢ層とⅣ層の状況から段差は大畦畔の一部である可能性が高いと考えられる。

４．水田面の標高と傾斜

全体的に南東方向へ緩やかに傾斜している。標高は 8. 624 ～ 8. 516 ｍである。

（２）Ⅳ層水田耕作土

１．検出・遺存状況

畦畔などは確認されなかったため、水田耕作土と判断した。遺存状況はあまりよくない。

２．耕作土

耕作土は黄灰色粘土である。灰白色火山灰をブロック状に多く含む。下面の凹凸は激しい。

（３）Ⅶ層水田耕作土

１．検出・遺存状況

畦畔などは確認されなかったため、水田耕作土と判断した。遺存状況はあまりよくない。また、南西隅で非耕作域が検出された。

２．耕作土

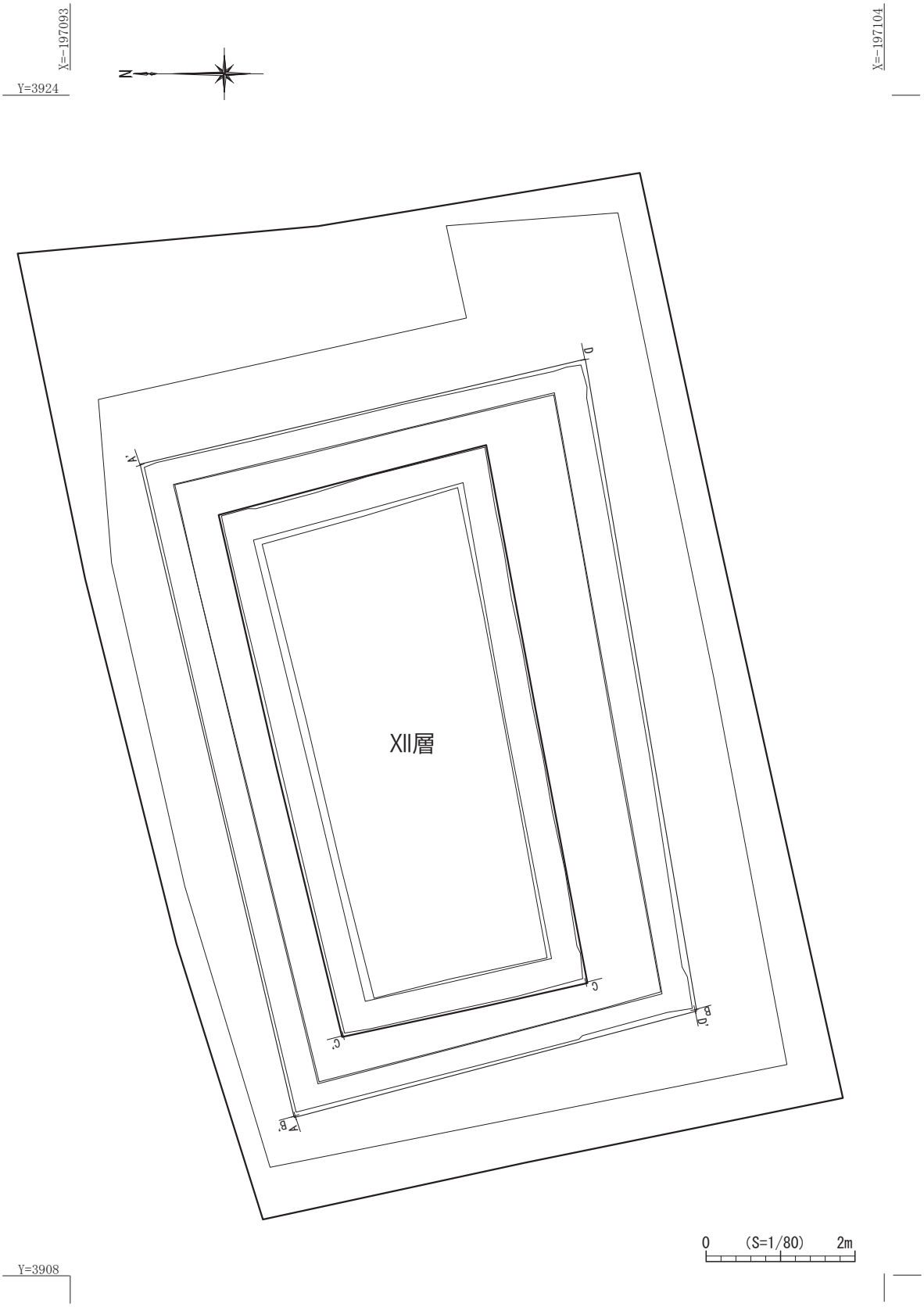
耕作土は黒褐色粘土である。層厚は約０～８㎝で薄く堆積する。下面に凹凸があり、直下層を巻き上げている。

３．水田面の標高と傾斜

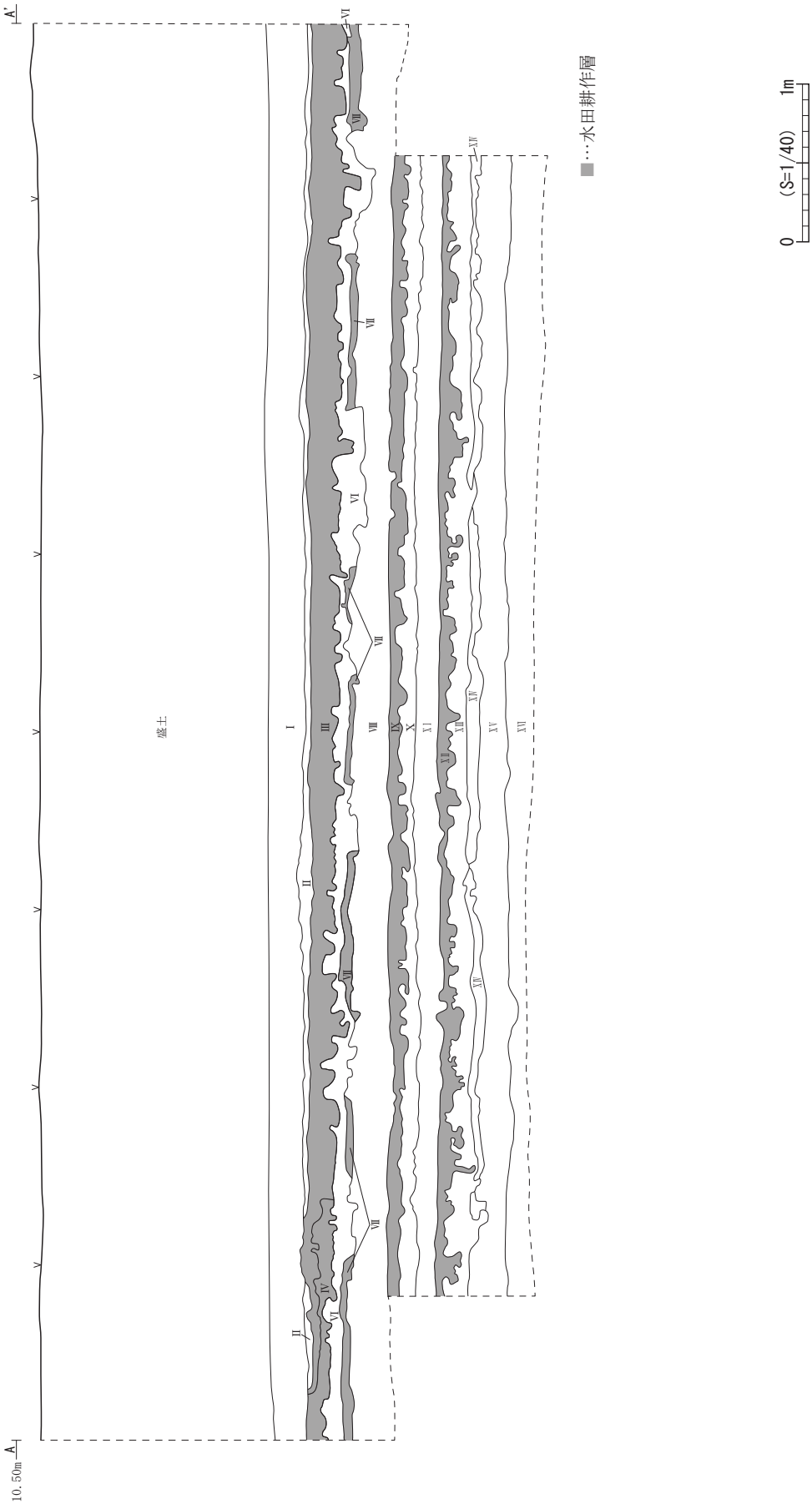
全体的に南東方向へ緩やかに傾斜している。標高は 8. 428 ～ 8. 339 ｍである。

４．非耕作域の状況

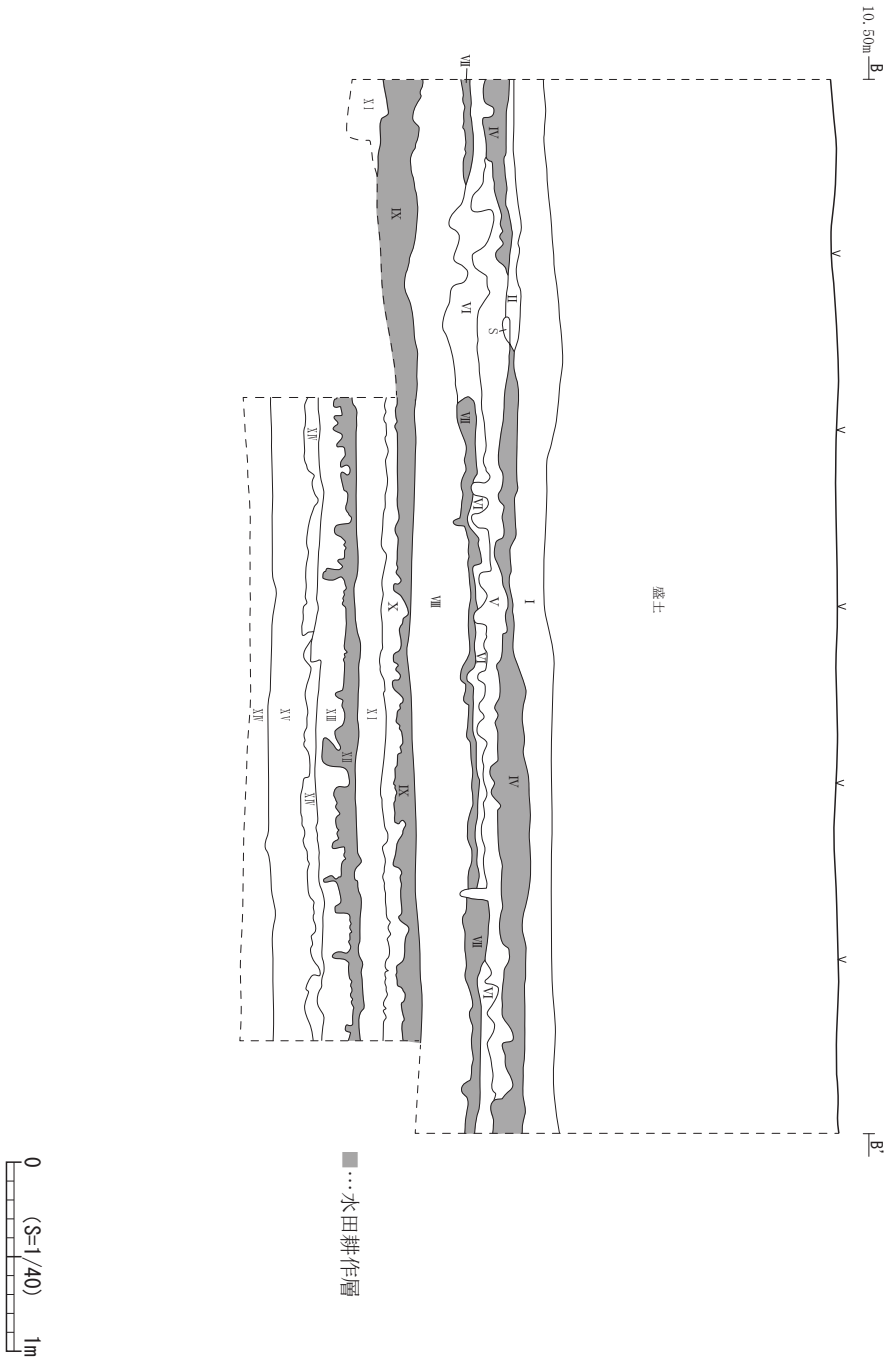
西壁および南壁で耕作土が途切れた位置と対応している。下層の混入がほぼない黒褐色粘土で、やや直線的に



第 25 図　第 151 次調査区全体平面図

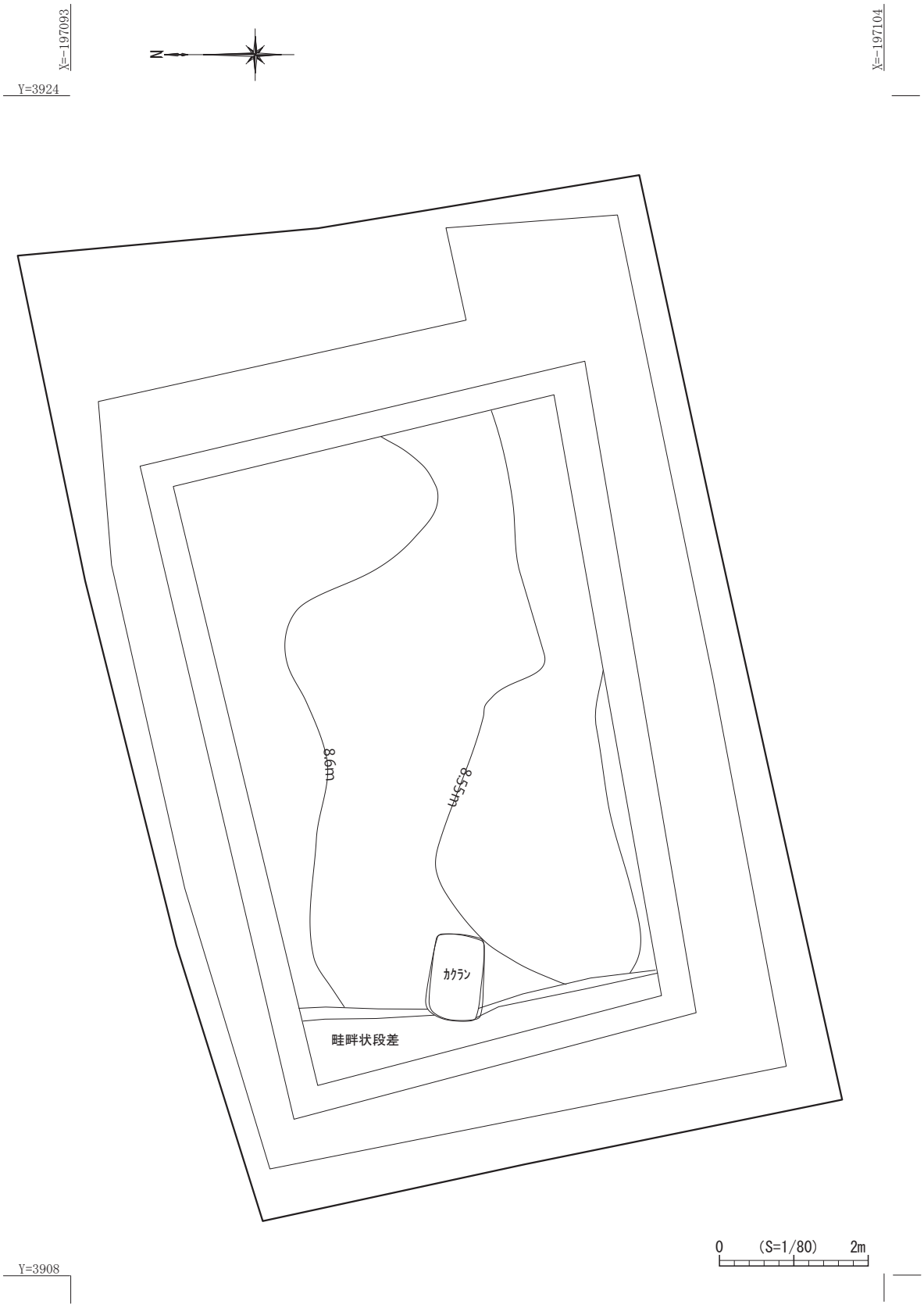


第 26 図　調査区北壁断面図

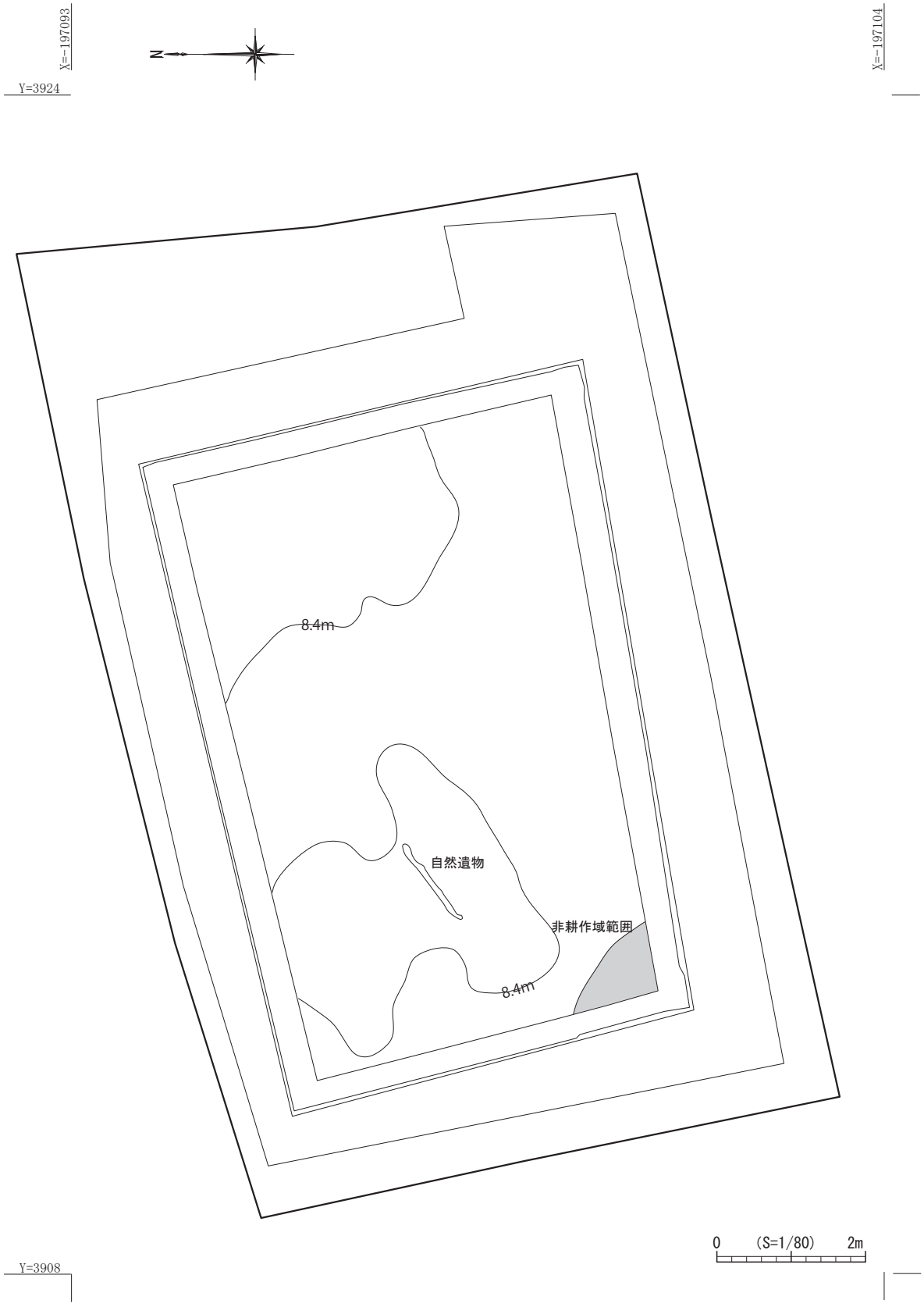


第 27 図　調査区西壁断面図

第 28 図　調査区南壁断面図



第 29 図　Ⅲ層およびⅣ層平面図



第 30 図　Ⅶ層平面図

調査区外まで延びている。一方で、Ⅶ層は境界が確認された部分以外にも数箇所途切れて堆積しているが、これらの部分では対応する境界線は確認されていない。いずれの平面及び断面でも判断が難しいことから、今回はその可能性があると指摘するに留める。

（４）Ⅸ層水田耕作土

１．検出・遺存状況

畦畔などは確認されなかったが層相から水田耕作土と判断した。遺存状況は比較的良好である。

２．耕作土

耕作土は黒褐色粘土である。層厚は約３～８㎝で、概ね一定である。下面の凹凸が激しく、直下層を巻き上げている。

３．水田面の標高と傾斜

ほぼ平坦な面だが、わずかに東へ傾斜する。標高は 8.111 ～ 8.071 ｍである。

（５）Ⅻ層水田耕作土

１．検出・遺存状況

畦畔などは確認されなかったが層相から水田耕作土と判断した。遺存状況は比較的良好である。

２．耕作土

耕作土は黒褐色粘土である。層厚は約５～ 10 ㎝で概ね一定である。下面の凹凸が激しく、直下層を巻き上げている。

３．水田面の標高と傾斜

ほぼ平坦な面だが、わずかに南東へ傾斜する。標高は 7.792 ～ 7.759 ｍである。

表７　遺物観察表

番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量（㎝）			外面	内面	備考	写真図版
						口径	底径	器高				
1	C-1	－	Ⅱ層中(側溝)	非ロクロ土師器	甕？	－	－	－	ヘラナデ	器面剥落	胎土緻密 砂粒含む	17-1
2	C-2	－	Ⅵ層中	非ロクロ土師器	坏？	－	－	－	ヘラナデ	ヘラナデ	外面・内面ともに剥落が著しい 胎土緻密 砂粒含む	17-2
3	D-1	－	Ⅱ層中(側溝)	ロクロ土師器	坏？	－	－	－	ロクロナデ	器面剥落	胎土緻密 砂粒含む	17-3
4	D-2	－	Ⅱ層中(側溝)	ロクロ土師器	坏？	－	－	－	ロクロナデ→手持ちヘラケズリ	器面剥落	胎土緻密 砂粒含む	17-4
5	D-3	－	Ⅲ層上面	ロクロ土師器	坏？	－	－	－	ロクロナデ→手持ちヘラケズリ	器面剥落	胎土緻密 砂粒含む	17-5
6	D-4	－	Ⅲ層上面	ロクロ土師器	甕？	－	－	－	ロクロナデ	器面剥落	胎土緻密 砂粒含む	17-6
7	D-5	－	Ⅲ層上面	ロクロ土師器	坏？	－	－	－	ロクロナデ	ロクロナデ	胎土緻密 砂粒含む	17-7
8	D-6	－	Ⅴ層中	ロクロ土師器	坏？	－	－	－	ロクロナデ	ロクロナデ	胎土緻密 砂粒含む	17-8
9	D-7	－	Ⅴ層中	ロクロ土師器	坏？	－	－	－	ロクロナデ→手持ちヘラケズリ？	器面剥落	内面の剥落が著しい 胎土緻密 砂粒含む	17-9
10	D-8	－	Ⅵ層中	ロクロ土師器	甕？	－	－	－	ロクロナデ→ヘラケズリ	器面剥落	胎土緻密 砂粒含む	17-10
11	D-9	－	Ⅵ層中	ロクロ土師器	坏？	－	－	－	ロクロナデ	器面剥落	外面の磨滅が著しく内面の剥落が著しい 胎土緻密 砂粒含む	17-11
12	E-1	－	Ⅱ層中(側溝)	須恵器	坏？	－	－	－	ロクロナデ	ロクロナデ	胎土緻密	17-12

図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量（㎝）			備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ		
13	G-1	－	Ⅲ層中 Ⅳ層混（火山灰含）	瓦	平瓦	(4.5)	(5.5)	(1.9)	燻し瓦 凸面：ナデ 凹面：ナデ	17-13
14	K-1	－	Ⅲ層中（火山灰含）	石製品	砥石？	(6.6)	(4.3)	(1.3)	部分的に砥石と見られる箇所あり 線状の擦痕あり 裏面は剥落している 重さ 44.03 ｇ 石材：安山岩	17-14
15	L-2	－	Ⅻ層 側溝②下底	木製品？	－	－	－	－	部分的に平坦な面が見られる	17-15
16	L-1	－	Ⅶ	木製品？	－	－	－	－		17-16

出土遺物（写真図版 17）

１～ 11 は土師器である。土師器は主にⅢ層水田耕作土中から出土している。全体で 34 点出土した内の、16 点を掲載した。１～２は非ロクロ土師器で、２点とも摩滅や器面剥落が激しく観察が困難である。１は甕で外面にヘラナデ痕跡がわずかに見える。２は坏で内外面ともヘラナデ調整と考えられる。３～ 11 はロクロ土師器で、ほとんどが坏の破片である。これらも摩滅や器面の剥落が著しく調整の観察が困難である。基本的には内外面ともにロクロナデで、数点外面をロクロナデ後手持ちによるヘラケズリを施す。

12 は須恵器で坏の口縁部であり、内外面ともにロクロナデ痕跡が確認できる。

13 は燻し瓦で、Ⅲ層から出土の破片資料であり、全体的に暗灰色を呈した平瓦である。

15、16 は自然遺物である。16 は長さ約 130 ㎝の大型の枝であり、中ほどに穴が開いている。これは節が何らかの要因で抜け落ちたことで形成された穴と考えられる。木製品ではなく自然遺物ととらえたが、付近で行われた 28 次調査においては類似する杭などが出土していることから、この遺物も杭材として遺跡内に搬入された可能性がある。15 は長さ約 13 ㎝でひし形に近い。切断されたような平坦な面が一部見られる。現段階では用途の推定が難しく判断ができないため、自然遺物ととらえた。

14 は砥石と考えられる石製品で、安山岩が用いられている。部分的に砥面の形成が認められ線状の擦痕が観察できることから、小片であるが砥石と判断した。

５．まとめ

調査の結果、水田耕作土５層とⅢ層上面で畦畔状の段差が１条、Ⅶ層上面で耕作域と非耕作域が検出された。Ⅲ層（近世）、Ⅳ層（平安）、Ⅶ層（弥生―十三塚式）、Ⅸ層・Ⅻ層（弥生―枡形囲式以降）は過去の調査履歴と概ね対応した水田跡である。しかし全体的に遺存状態は悪く、主な比較対象の第 28 次および第 49 次調査と対応するような畦畔は平面でも断面でも確認されなかった。

また、Ⅲ層上面では畦畔状の段差が確認された。段差下のⅣ層は他と比べて撹拌されずよく遺存していることから、この段差は大畦畔の一部であった可能性が高い。

引用・参考文献

仙台市教育委員会・仙台市交通局 1985　「Ⅵ富沢水田遺跡（C-301）鳥居原地区」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報 pp55 － 59

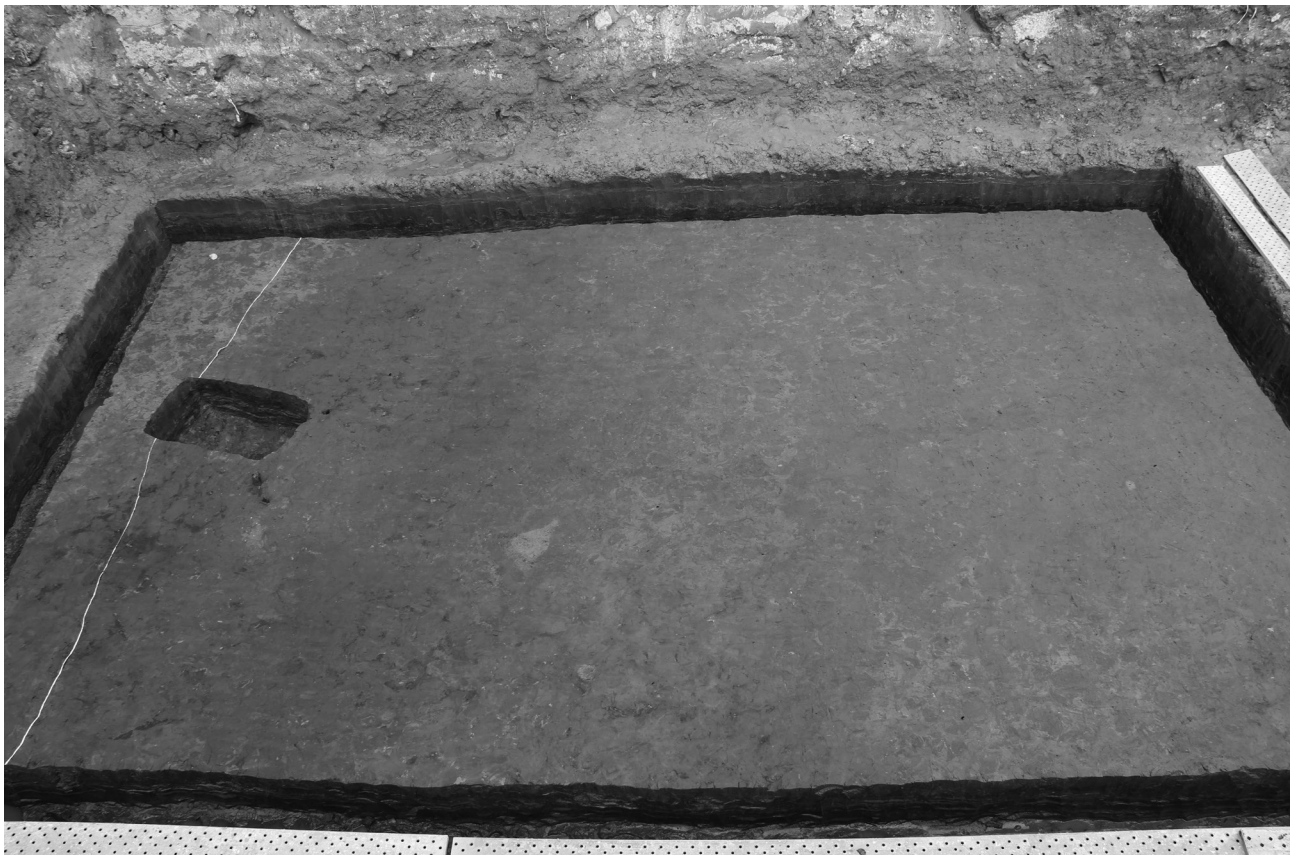
仙台市教育委員会 1987　『富沢　仙台市都市計画道路長町・折立線建設に伴なう富沢遺跡第 15 次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第 98 集

仙台市教育委員会 1988　『富沢遺跡―第 28 次発掘調査報告書―』仙台市文化財調査報告書第 114 集

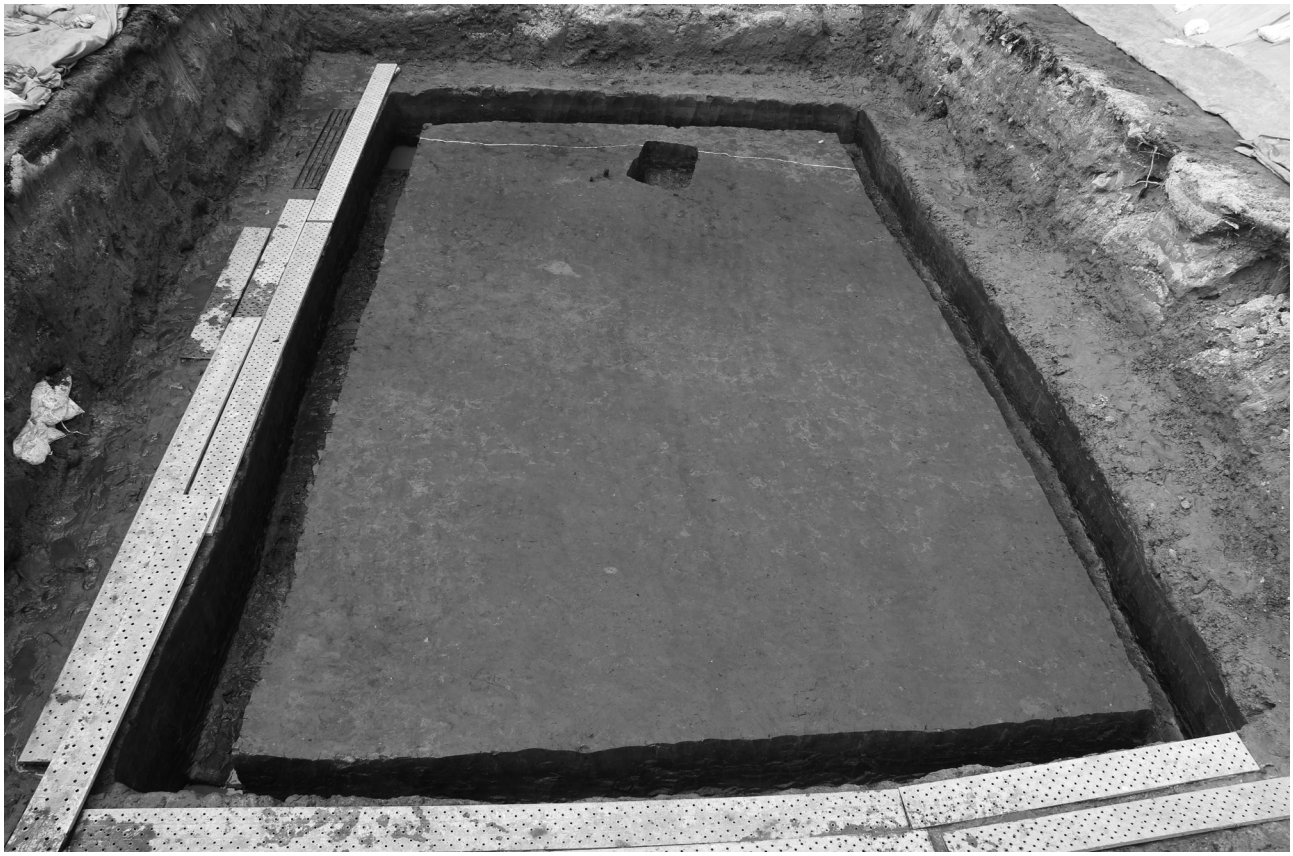
仙台市教育委員会 1990　『富沢遺跡 49 次　東光寺遺跡第 3 次　青葉山 A 遺跡』仙台市文化財調査報告書第 142 集 pp1 － 18

斎野裕彦 2005　「水田跡の調査方法及び構造の理解について」『シンポジウム　山形県の水田遺構　資料集』山形考古学会　pp5 － 19

平間亮輔 1991　「（ウ）条里型土地割について」『富沢遺跡―第 30 次調査報告書第Ⅰ分冊―縄文～近世編』仙台市文化財調査報告書第 149 集　第 6 章第 3 節　pp366 ～ 371



１．Ⅲ層水田跡　確認状況（南から）



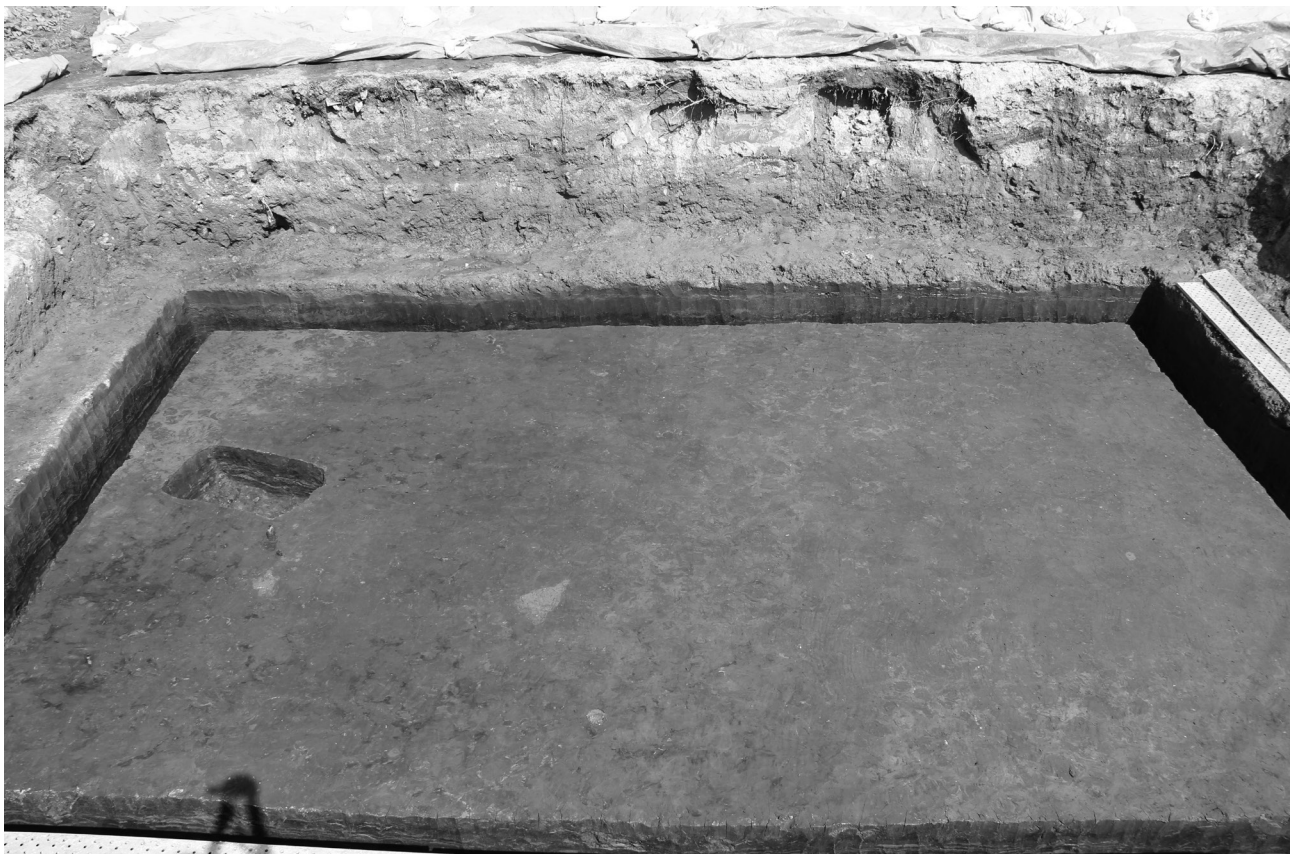
２．Ⅲ層水田跡　確認状況（東から）

写真図版 10　富沢遺跡第 151 次調査（１）

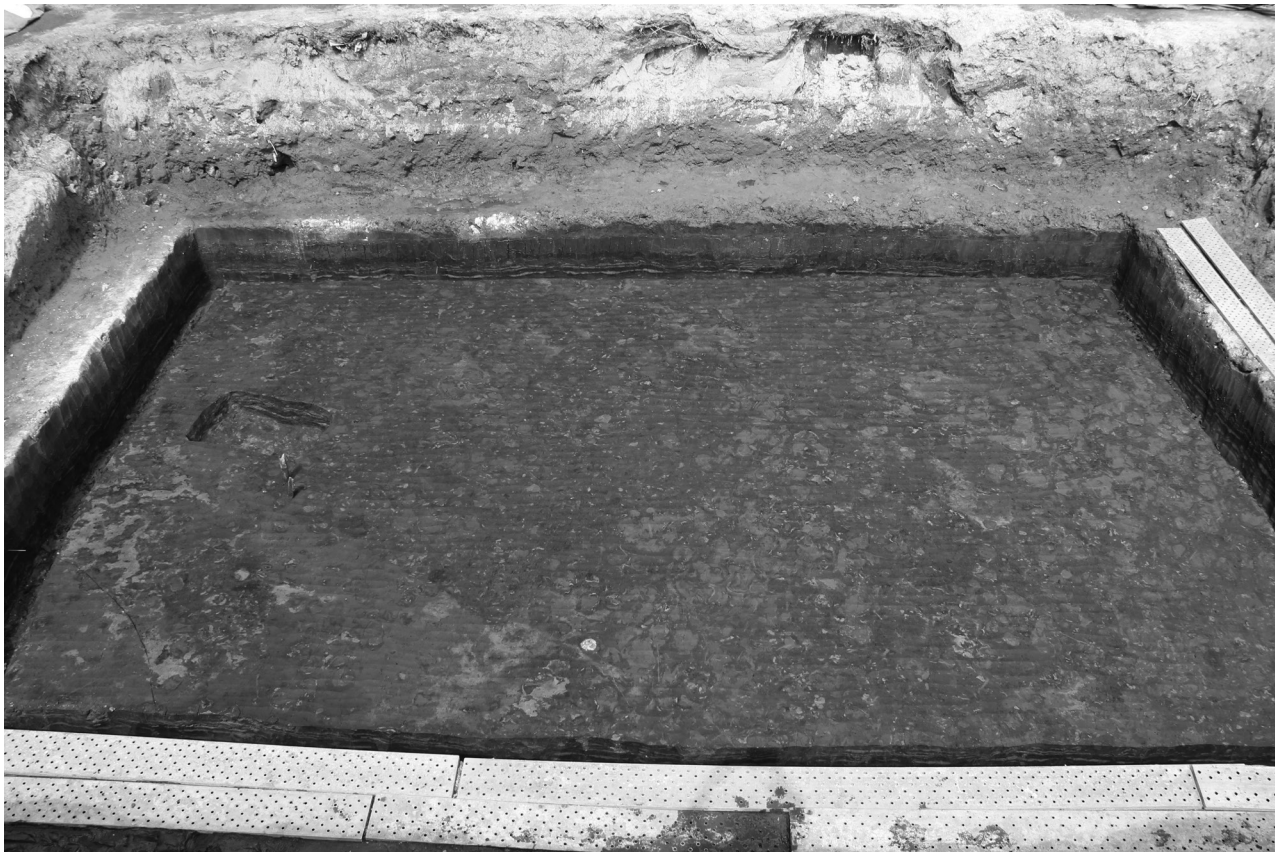
１．Ⅲ層水田跡　畦畔状段差　確認状況（東から）

２．Ⅲ層水田跡　畦畔状段差　確認状況（部分）（東から）

写真図版 11　富沢遺跡第 151 次調査（２）



１．Ⅲ層水田跡　検出状況（南から）



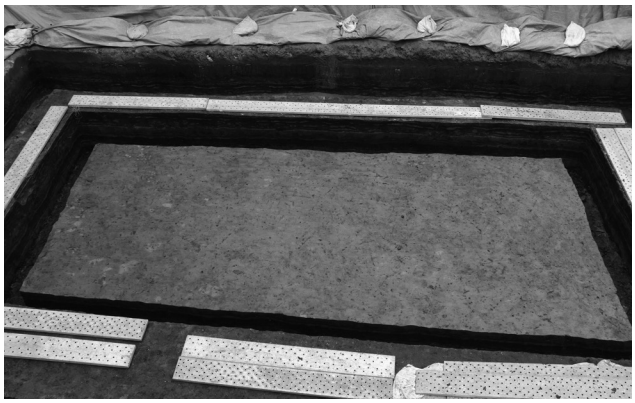
２．Ⅶ層水田耕作土　確認状況（南から）

写真図版 12　富沢遺跡第 151 次調査（３）

１．Ⅶ層水田耕作土　検出状況（南から）

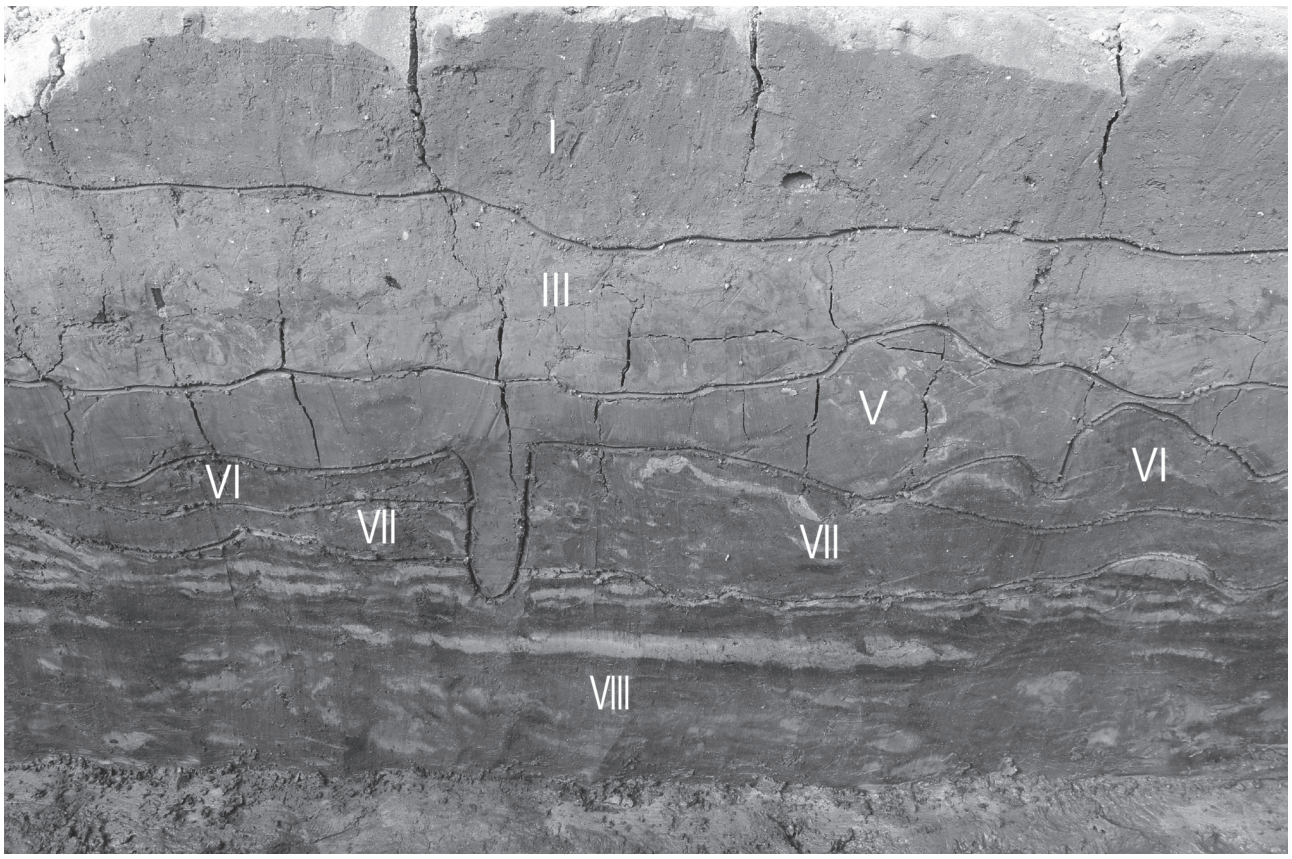
２．Ⅶ層水田耕作土　耕作域・非耕作域　確認状況（南から）

３．Ⅶ層中自然遺物　出土状況

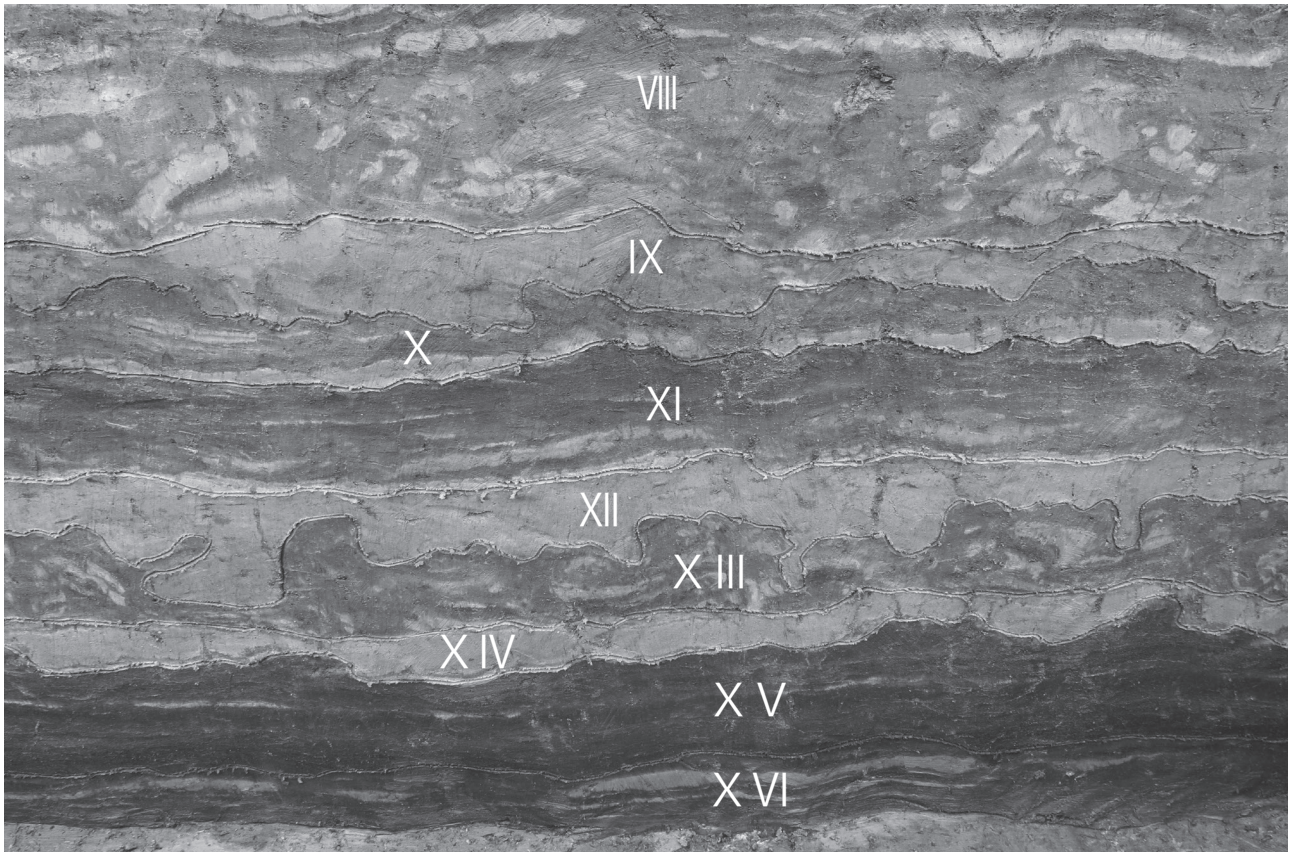


５．Ⅻ層水田跡　確認状況（南から）

写真図版 13　富沢遺跡第 151 次調査（４）

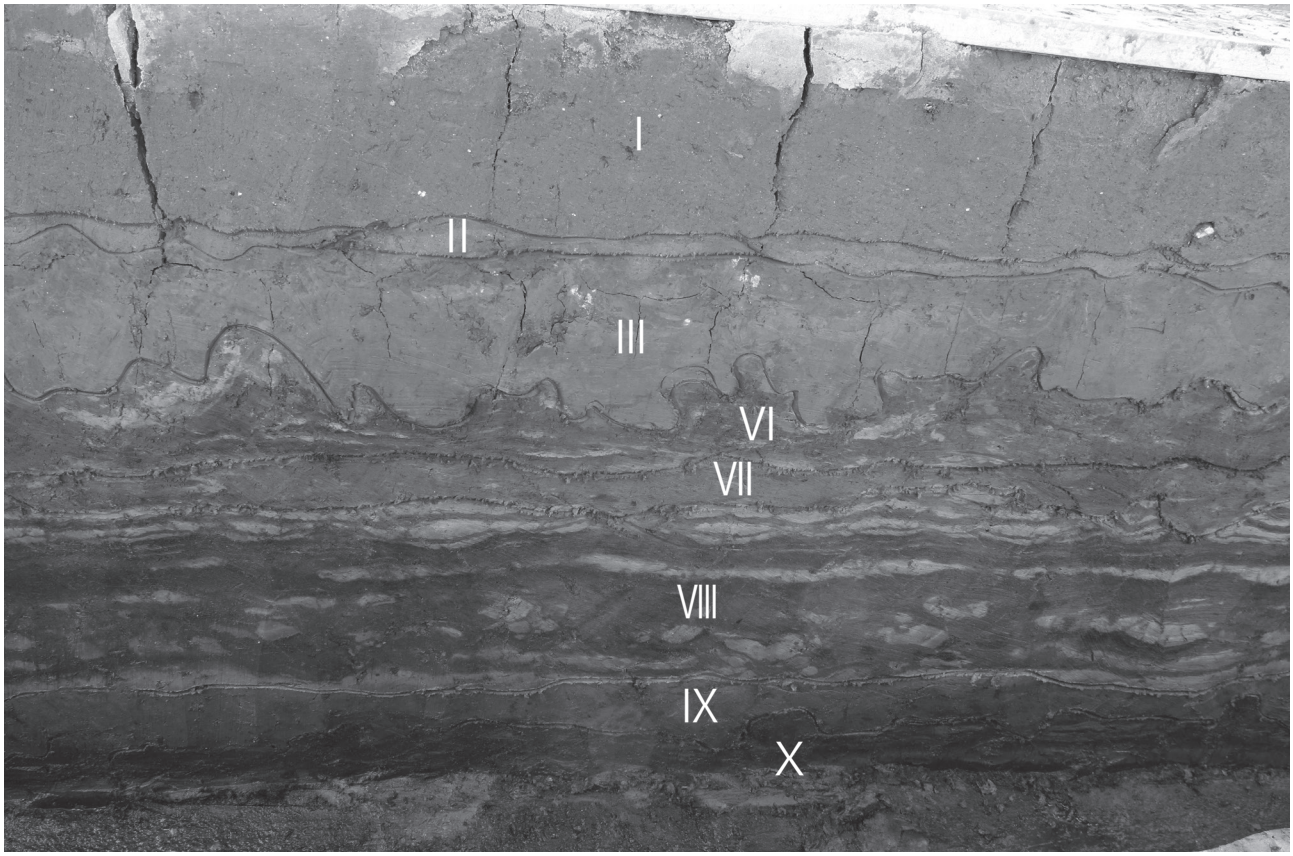


1．調査区基本層　西壁（1）

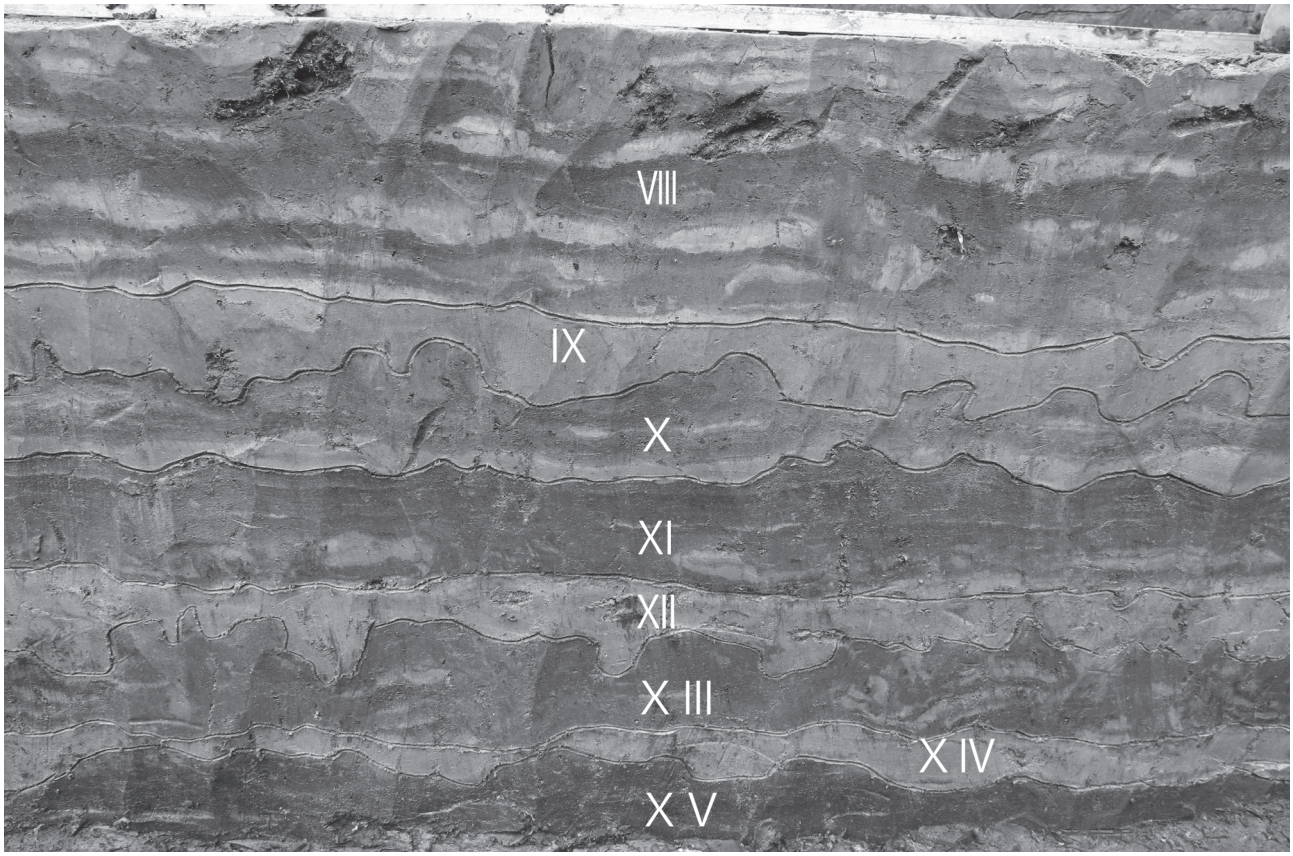


2．調査区基本層　西壁（2）

写真図版 14　富沢遺跡第 151 次調査（5）

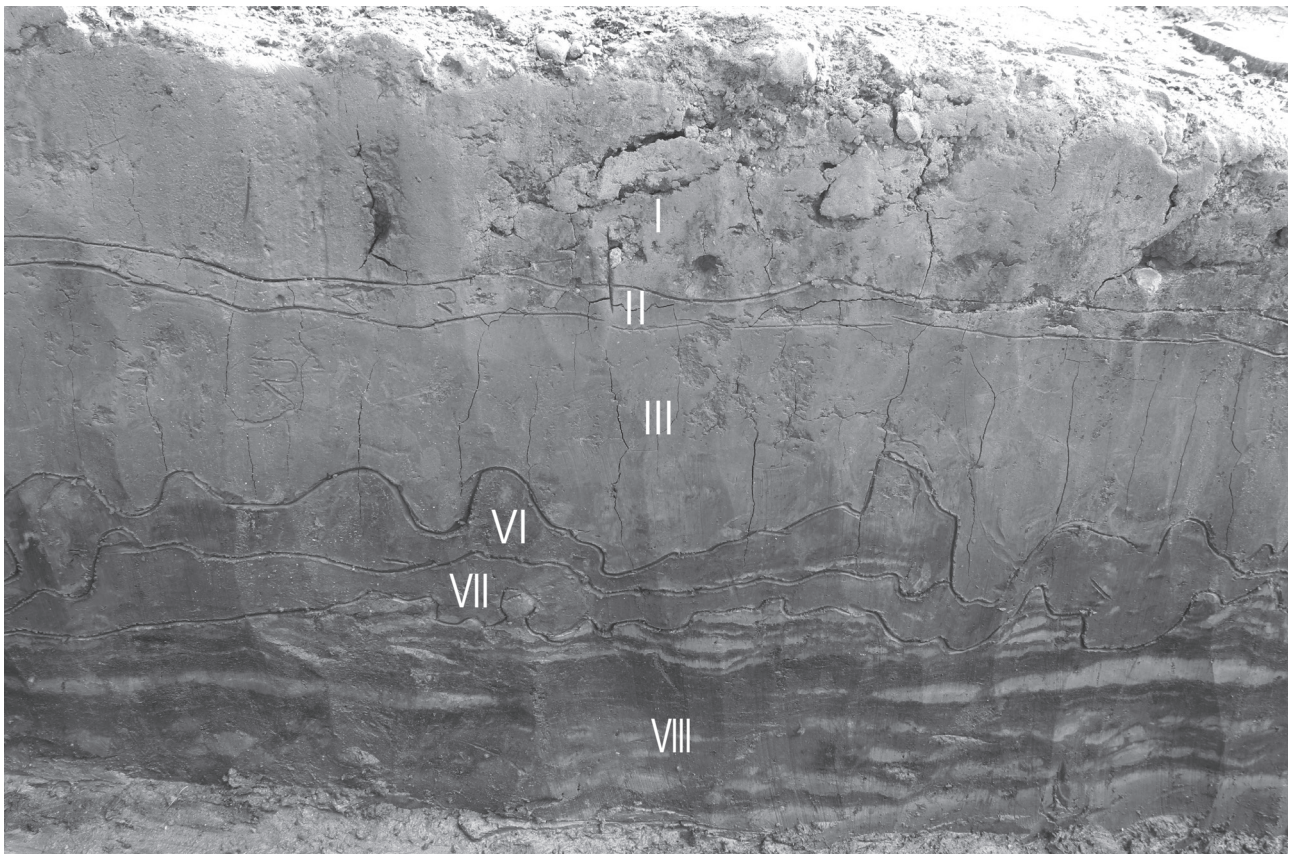


１．調査区基本層　南壁（１）

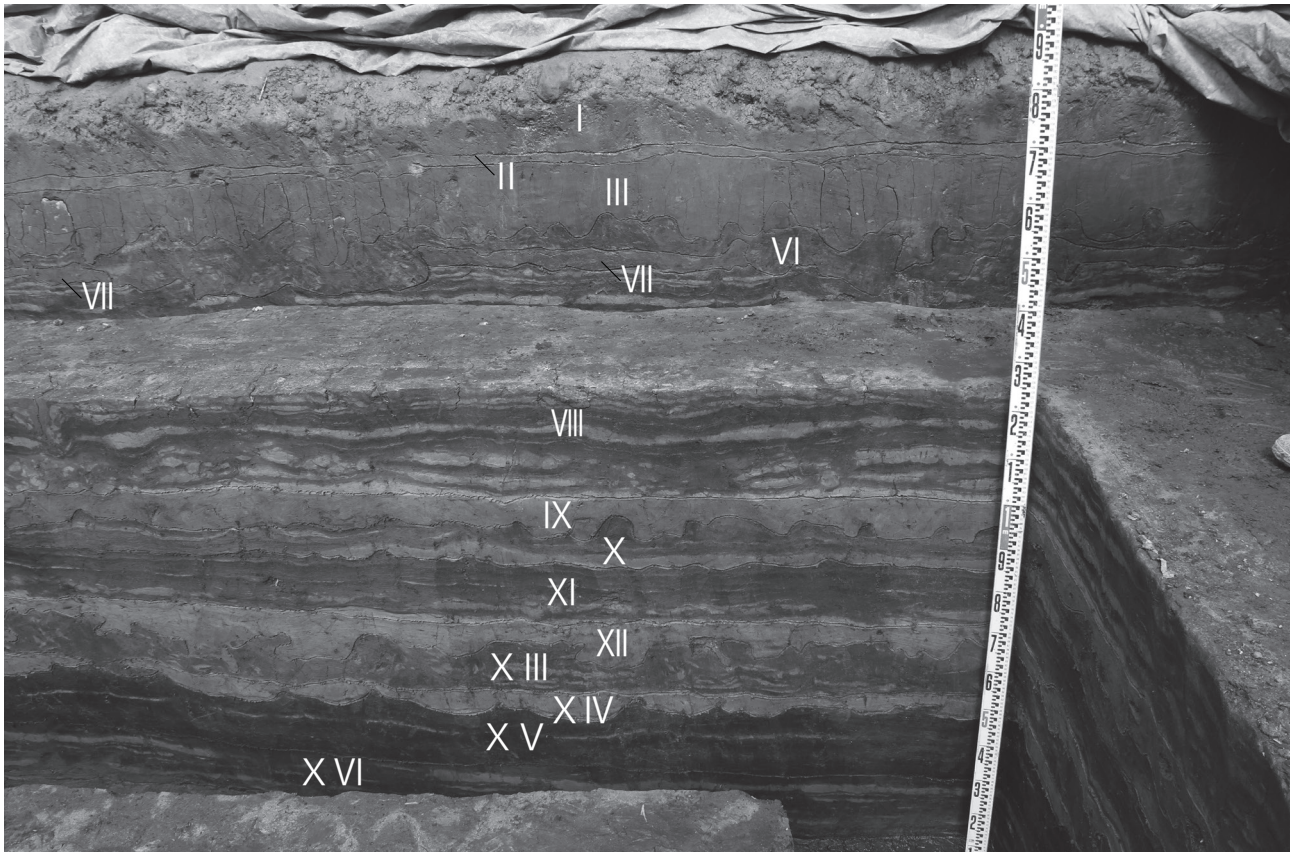


２．調査区基本層　南壁（２）

写真図版 15　富沢遺跡第 151 次調査（６）

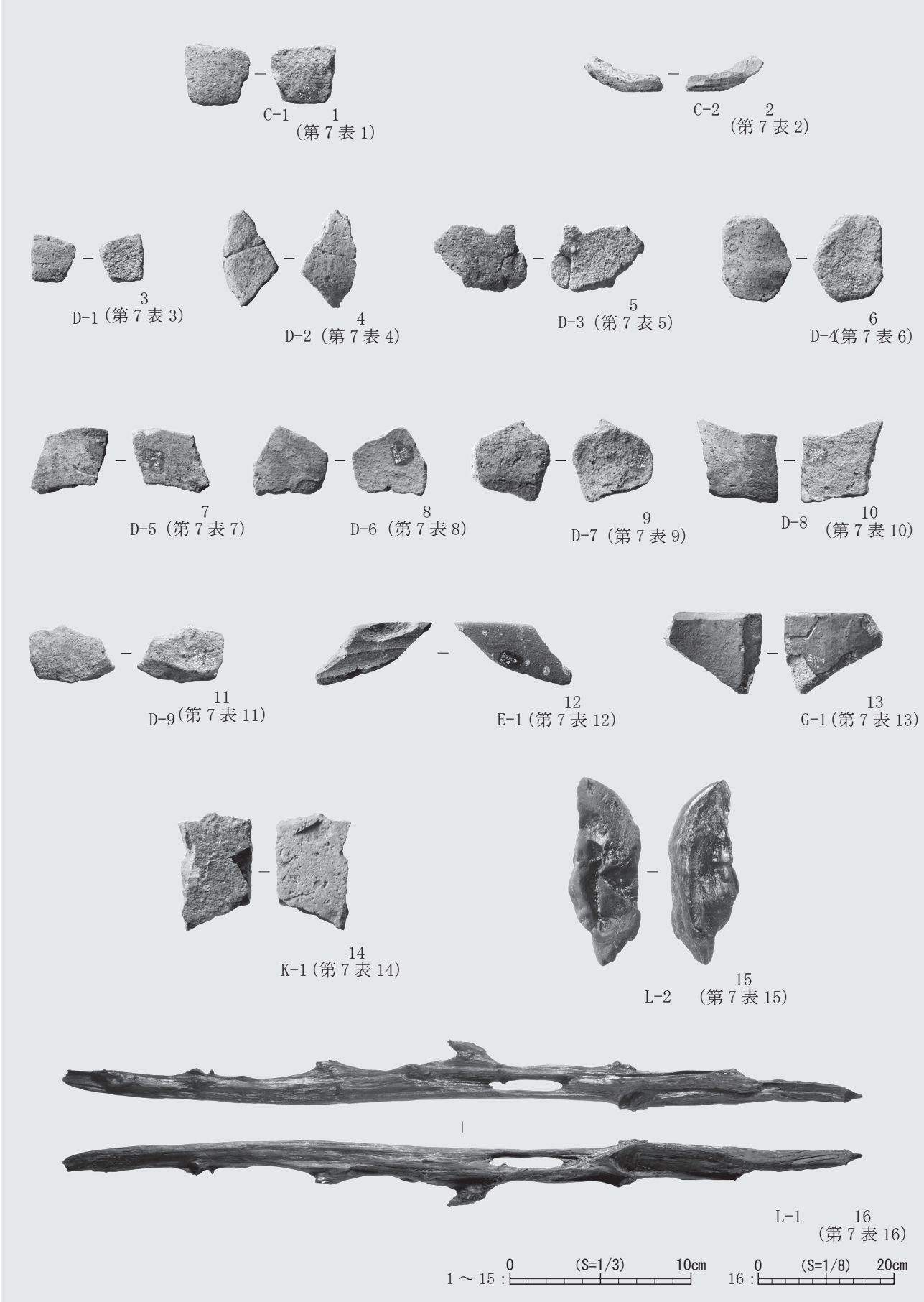


１．調査区基本層　東壁



２．調査区基本層　北壁

写真図版 16　富沢遺跡第 151 次調査（７）

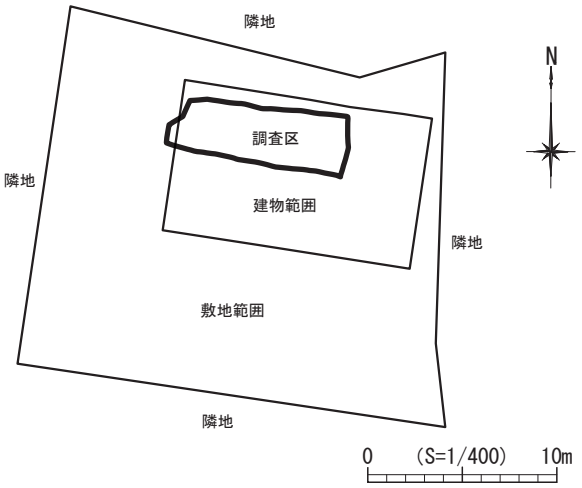


写真図版 17　富沢遺跡第 151 次調査出土遺物

第３節　第 152 次調査

1. 調査要項

遺　跡　名	富沢遺跡（01369）
調 査 地 点	仙台市太白区鹿野３丁目 211 －７
調 査 期 間	令和３年 12 月６日～ 10 日
調査対象面積	116.56 ㎡（敷地面積：428.92 ㎡）
調 査 面 積	約 24 ㎡
調 査 原 因	共同住宅建築工事
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育局生涯学習部 文化財課調査調整係
担 当 職 員	係長 平間亮輔 主事 早川太陽



第 31 図　第 152 次調査区配置図

２．調査に至る経過と調査方法

今回の調査は令和３年９月 13 日付で事業者から提出された「埋蔵文化財の取扱いについて（協議）」（令和３年９月 16 日付 R3 教生文第 109-85 号で回答）に基づき実施した。今回の調査地点は、第 30 次調査で確認されていた平安時代の条里型土地割に関わる大畦畔の南北方向の延長上にあることから、埋没条里の検出が予想された。調査区は東西約 8.0m ×南北 3.0m で設定した。

重機掘削で盛土と現代の水田耕作土を除去した後、遺構確認および掘下げを行った。出土遺物はナンバーをつけて各層位ごとに取り上げた。12 月 10 日までに調査区内の計測等を行い野外調査を終了した。

遺構の記録については、平面図、断面図（S ＝ 1/20）を作製し、デジタルカメラを用いて記録写真を撮影した。また基準点は近隣の２級基準点「1114A」からトータルステーションを用いて移設した。

３．基本層序

基本層は盛土以下にⅠａ～Ⅴ層まで確認している。土層の観察については調査担当者が統一した見方によって行った。

Ⅰａ層：2.5Y3/1 黒褐色粘土。現代の水田耕作土であるが、造成時の盛土やゴミが混入している。

Ⅰｂ層：2.5Y2/1 黒色粘土。現代の水田耕作土である。調査区西側で部分的に深くなり下層を切っている。

Ⅱ　層：2.5Y3/1 黒褐色粘土。下面は乱されておらず、水田耕作土の可能性は低い。

Ⅲ　層：2.5Y3/1 黒褐色粘土と 5Y4/2 粗砂との互層。自然堆積した粘土と丘陵部から複数回流れ込んだ砂によって形成されたと考えられる。

Ⅳ　層：2.5Y4/2 黒褐色粘土。

Ⅴ　層：10YR3/2 黒褐色の泥炭質粘土。

４．発見遺構と出土遺物

今回は30次調査で確認された平安時代の条里型土地割（特にNS0－１）に伴う大畦畔の検出を主な目的とし、東西約８ｍ×南北約３ｍの調査区を設定したが、中・近世や古代の水田および区画等は確認されなかった。参考とした30次調査においては旧測地系に基づいて座標を割り出して区画を復元していることから、現在の都市計画図と合わせるために世界測地系に変換した。数値は以下の通りである。

畦畔No.	X座標	Y座標	→	X座標	Y座標
NS0-1	-197606.2	+3749.8		-197297.4392	3449.7994

さらに、世界測地系に合わせた土地割推定線を、富沢遺跡を含め主要な周辺の遺跡範囲を加えて示した（第33図）。これを参照すると、条里型土地割に伴う大畦畔は今回の調査のような丘陵部に近い遺跡の北端ではなく、遺跡中心から東側でよく検出されている。大畦畔の存在する可能性がある範囲を狭められた点では一定の成果があったといえる。

出土遺物はⅡ層中から土器の小片が１点のみである。約３㎝四方で器面の摩耗が著しく、時期の判断は難しい。

５．まとめ

今回の調査では、平安時代の大畦畔検出を目的とし、最深でGL-2.0mまで掘削した。しかし畦畔や水田跡は検出されなかった。富沢遺跡では10世紀前半頃の火山灰を含んだ水田耕作土が頻繁に検出され、近隣の土地で行われた第135次調査でも火山灰を含んだ水田耕作土が検出されているが、今回の調査区では確認されなかった。現代の水田耕作土が下層へ深く陥入する部分があるため、近年の水田耕作などによって失われた可能性もある。

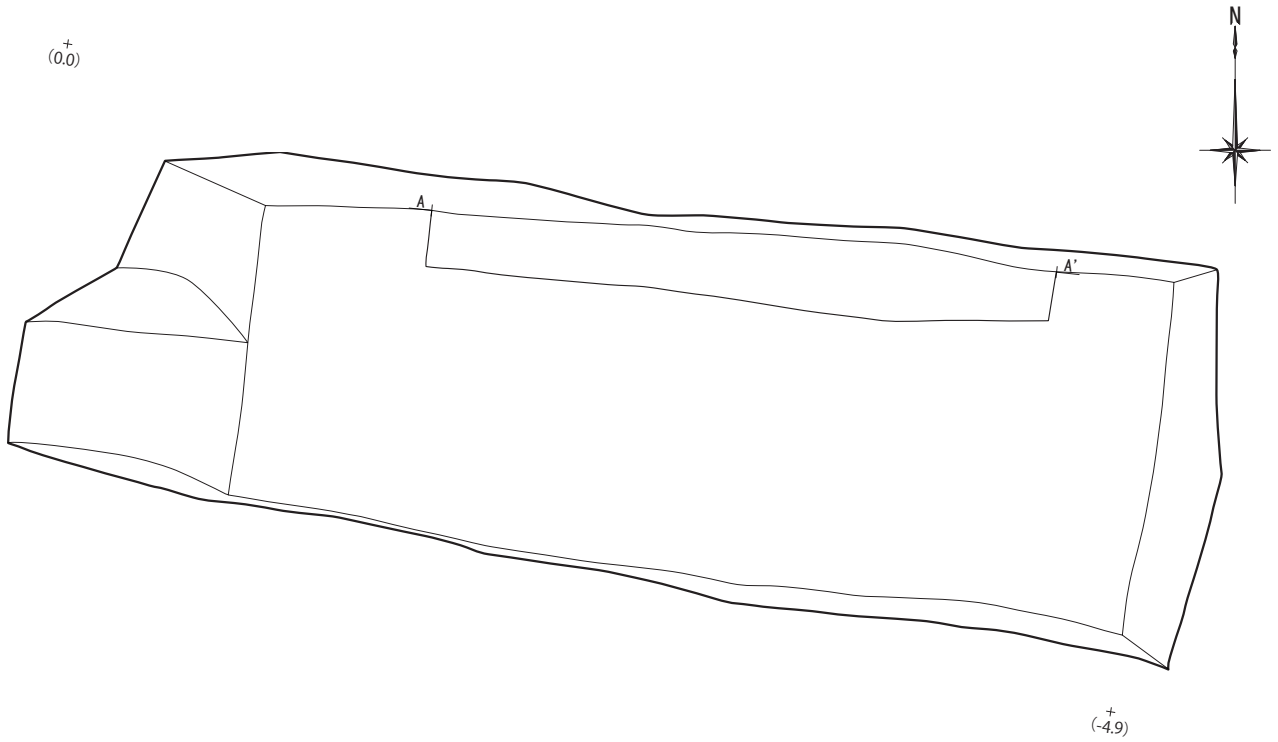
また、条里型土地割に関わる南北に伸びる大畦畔は、今回の調査地点のように青葉山丘陵の裾に近い地域まで延びていないことが確認できた。条里型土地割が広がる範囲については今後の調査成果の蓄積を待って改めて検討したい。

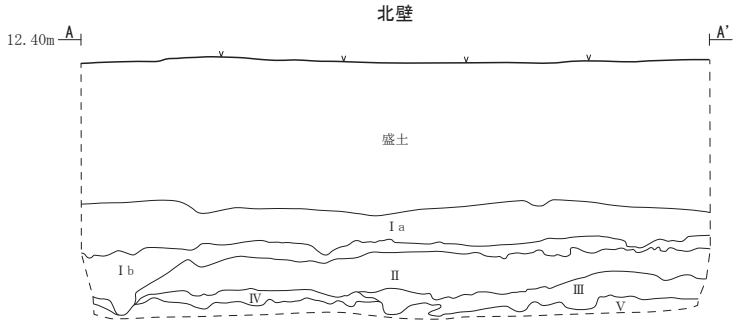
引用・参考文献

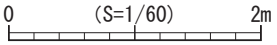
平間亮輔　1991　「（ウ）条里型土地割について」『富沢遺跡―第30次調査報告書第Ⅰ分冊―縄文～近世編』仙台市文化財調査報告書第149集　第６章第３節　pp366～371

斎野裕彦　2005　「水田跡の調査方法及び構造の理解について」『シンポジウム 山形県の水田遺構 資料集』山形考古学会　pp5－19

仙台市教育委員会　2006　『前田館跡他』仙台市文化財調査報告書第301集（第135次）

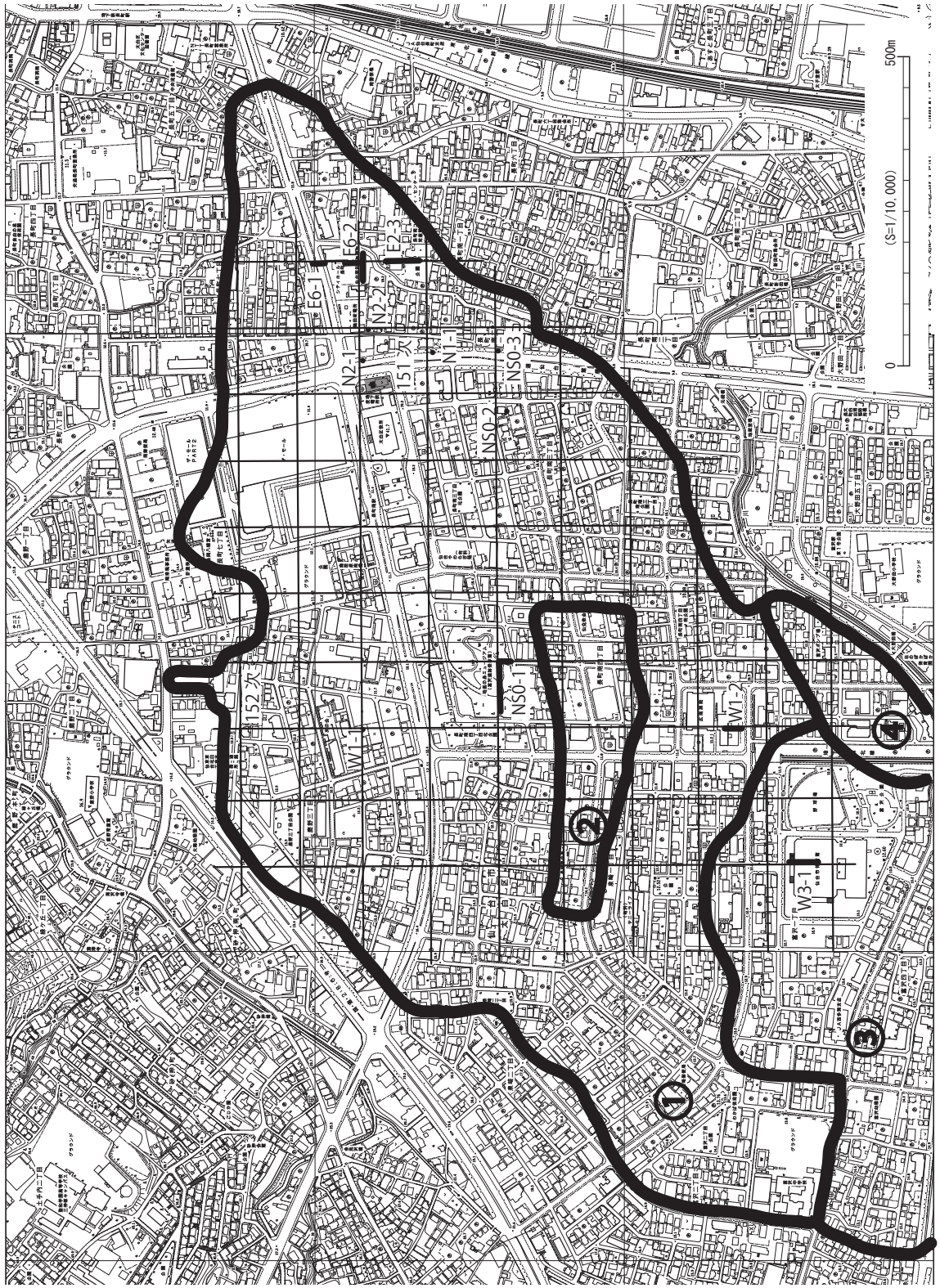






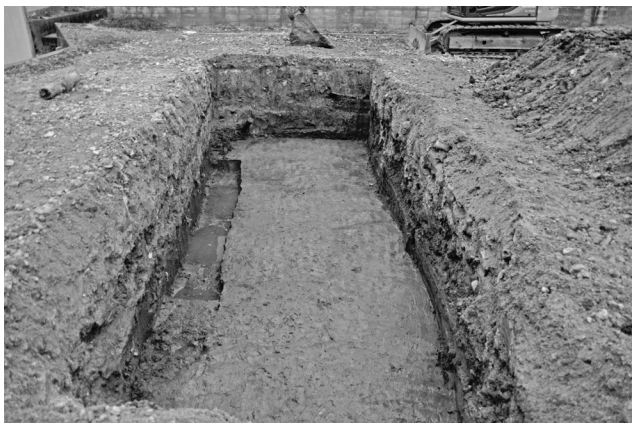
第 32 図　調査区平・断面図

①富沢遺跡
②泉崎浦遺跡
③山口遺跡
④下ノ内浦遺跡



第 33 図　富沢遺跡における条里制土地割復元図

１．調査区掘削状況（南から）



２．調査区掘削状況（西から）

３．調査区段下げ部分掘削状況（西から）

４．調査区北壁断面

５．調査区北壁断面

６．調査区北壁断面

写真図版 18　富沢遺跡第 152 次調査

第４章　富沢館跡の調査

第１節　遺跡の概要

富沢館跡は仙台市太白区富沢字館、熊野前に所在する。仙台市の南部、地下鉄南北線富沢駅から西へ約 700m に位置し、名取川の支流の笊川によって形成された自然堤防上に立地する。現況での標高は約 14 ～ 18m である。

富沢館跡はこれまでに 19 次にわたる調査が行われており、縄文時代、古代、中近世の時期の遺構、遺物が発見されている。

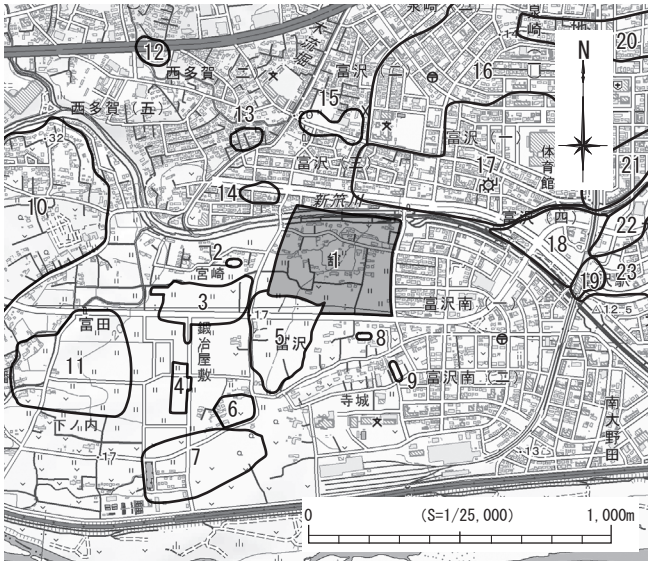
縄文時代では後期中葉の宝ヶ峰式の時期を主体として竪穴住居跡などの遺構が確認されており、縄文土器のほかに土偶やスタンプ形土製品なども出土している。

古代では炉跡を伴う竪穴遺構が複数確認されている。これらの時期は９世紀から 10 世紀と推定され、鉄滓が多数出土した竪穴遺構もあることから鍛冶関連の遺構であると考えられている。また同様の遺構は隣接する鍛冶屋敷 A 遺跡、鍛冶屋敷前遺跡などでも確認されており、鍛冶屋敷 A 遺跡からは「謹解　申請稲事　合□□」「大田部」などと刻印された砥石が出土している（仙台市教育委員会 2018）。

中世になるとこの地域は国人領主粟野氏の支配下となり、城館が造営される。この館の詳細な造営時期や造営者は不明だが、入生田家に残る『入生田家之故実』と『館記』においては北目城主であった粟野大膳の造営によるものとされ、地域の伝承では粟野氏家臣の富沢伊賀守が居城したと伝わる。

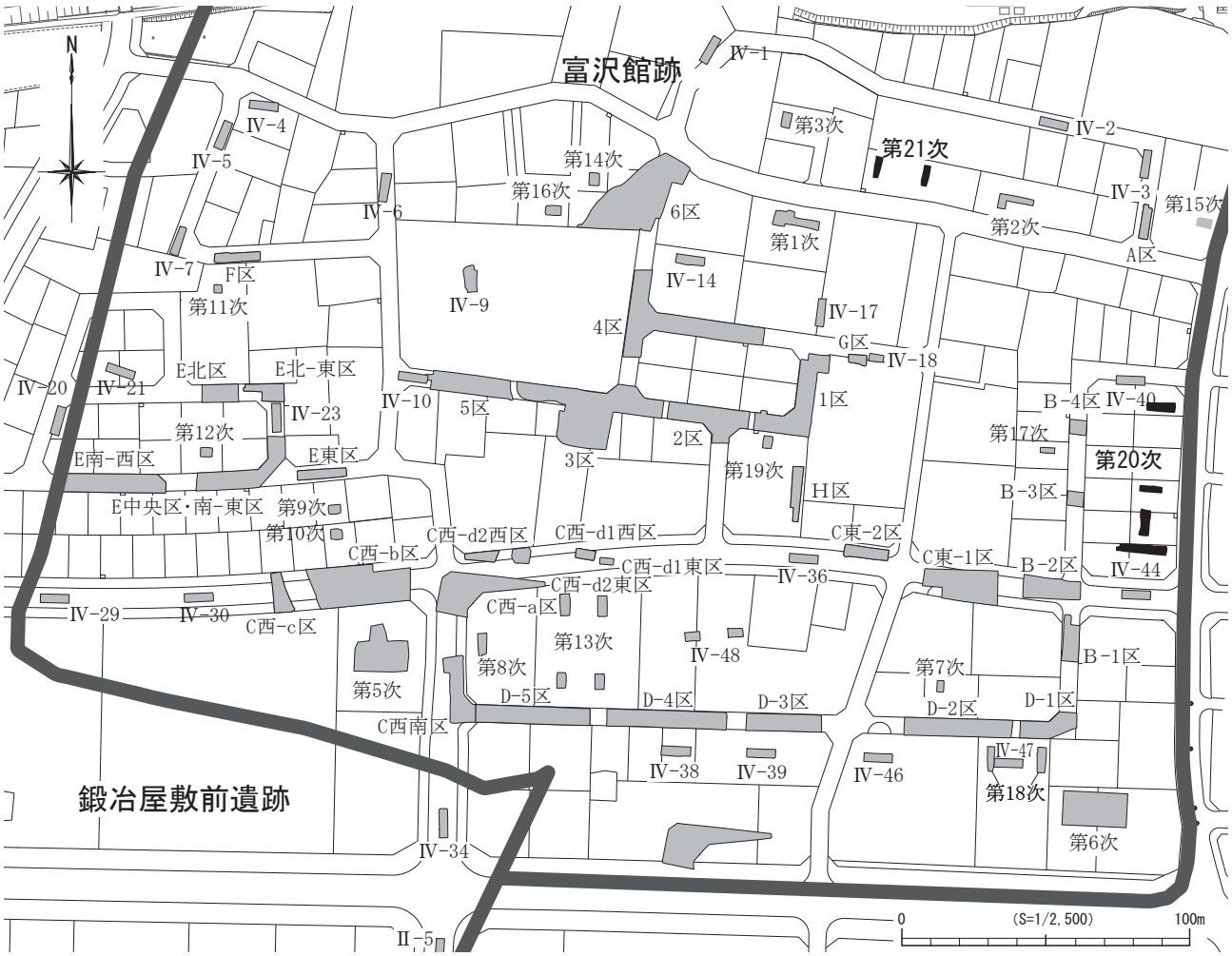
平成 25 年度から始まった土地区画整理事業に伴い、城館の様相の大部分は変化したが、中心部分の土塁は現在も保存され、その姿を残している。発掘調査により館跡の周囲には１～４条に渡る堀跡が巡らされていたことが判明した。また主郭部の東側には出入り口に位置したと考えられる門跡が検出され、また南西側では土塁が筋違いに配置されていることが確認され、虎口を形成していたものと考えられている。また２基の火葬遺構が検出され、骨片のほか古銭などが出土した（仙台市教育委員会 2018）。

近世になると入生田家の在郷屋敷となり、『館記』には仙台藩二代藩主伊達忠宗の時、堀や土塁があって城や要害のようで誤解を招くとのことから、土塁を崩し、堀を埋めたとの記述がある。その後は一部の土塁を残して、この地を畑や水田として利用していたと考えられる。



番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	富沢館跡	城館跡、集落跡	自然堤防	縄文、平安～近世
2	宮崎遺跡	集落跡	自然堤防	平安
3	鍛冶屋敷 A 遺跡	集落跡	自然堤防	縄文、古代～平安
4	京ノ中遺跡	集落跡	自然堤防	平安
5	鍛冶屋敷前遺跡	集落跡	自然堤防	縄文、古代～中世
6	鍛冶屋敷 B 遺跡	包含地	自然堤防、後背湿地	縄文、古代～近世
7	六本松遺跡	集落跡	自然堤防	古代～平安
8	川前浦遺跡	散布地	自然堤防	縄文、古代
9	川前遺跡	集落跡	自然堤防	縄文
10	上野遺跡	集落跡	段丘	縄文、古代～平安
11	南ノ東遺跡	散布地	自然堤防	弥生、平安
12	西台窯跡	窯跡	段丘	奈良、平安
13	富沢上ノ台遺跡	散布地	自然堤防	縄文
14	堀ノ内遺跡	散布地	自然堤防	古墳～平安
15	富沢清水遺跡	散布地	宅地、畑	奈良、平安
16	富沢遺跡	水田跡、包含地	後背湿地	旧石器～近世
17	山口遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防、後背湿地	縄文～近世
18	下ノ内遺跡	集落跡、墓畑跡	自然堤防	縄文、弥生、奈良～近世
19	伊古田遺跡	包含地	自然堤防	縄文、古墳、奈良、平安
20	泉崎浦遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防、　後背湿地	縄文～古代、近世
21	下ノ内浦遺跡	包含地	自然堤防	縄文、弥生、奈良、平安
22	六反田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文、弥生～平安
23	大野田古墳群	古墳群地	自然堤防	古墳～平安

第 34 図　富沢館跡と周辺の遺跡

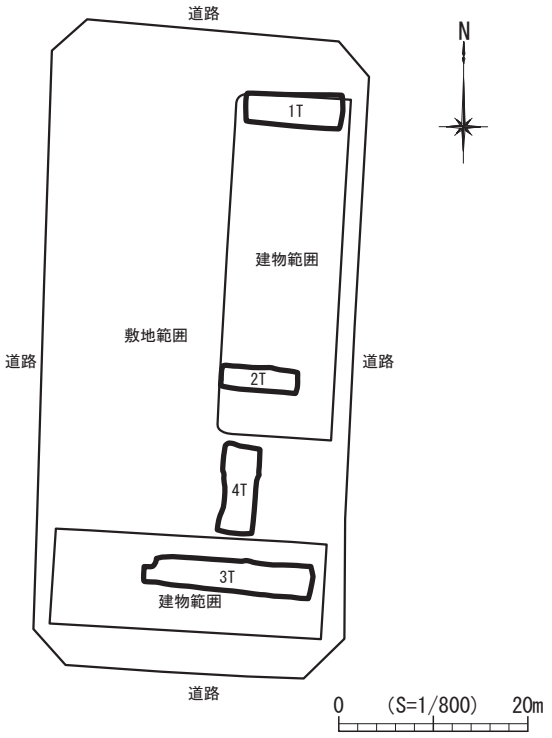


第 35 図　第 20・21 次調査区位置図

第２節　第 20 次調査

1. 調査要項

遺　跡　名	富沢館跡（宮城県遺跡登録番号 01246）
調 査 地 点	仙台市富沢駅西土地区画整理事業 地内 35 街区
調 査 期 間	令和２年 11 月 30 日～ 12 月 11 日
調査対象面積	A 棟：359.04 ㎡　B 棟：287.82 ㎡
調 査 面 積	127 ㎡
調 査 原 因	共同住宅建築工事
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育局生涯学習部 文化財課調査調整係
担 当 職 員	主任　近藤勇亮 主事　木村 恒



第 36 図　第 20 次調査区配置図

２．調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、令和２年３月 24 日付で申請者から提出された「埋蔵文化財の取扱いについて（協議）」（令和２年３月 25 日付 H31 教生文第 102-116 号で回答）に基づき実施した。

調査ではＡ棟の建築範囲内に２箇所の調査区（1 トレンチ（12m × 3m）、2 トレンチ（8m × 2m））を設定し、B 棟の建物範囲内に１箇所の調査区（3 トレンチ（16m × 3m））を設定した。重機により砕石および盛土、基本層Ⅰ～Ⅲ層を除去した後、Ⅳ層上面で遺構確認作業を行った。その結果、3 トレンチのⅣ層上面で南北方向の溝跡１条（SD1）が確認された。1 トレンチではⅢａ層上面で溝跡１条（SD2）が認められ、2 トレンチでは遺構は確認されなかった。3 トレンチより北で SD1 溝跡が検出されなかったことから、3 トレンチと 2 トレンチの間での SD1 溝跡のプランを確認するため、申請者側の了承の上で建物範囲外に調査区（4 トレンチ（９ｍ×３ｍ））を追加で設けて調査を行った。4 トレンチにおいても SD1 溝跡が検出され、概ね南北方向に延びるが北東方向にやや傾いている様子が確認された。令和２年 12 月 11 日まで調査区内の遺構の完掘および計測等を行い、野外調査を終了した。

遺構の記録は、トータルステーションを用いて調査区平面図を、また必要に応じて各断面図（S=1/20）を作製し、デジタルカメラを用いて記録写真を撮影した。

３．基本層序

今回の調査区では、厚さ約 0.9 ～ 1.0m の盛土の下に大別５層、細別 11 層の基本層を確認した。Ⅲａ層、Ⅳ層上面が遺構検出面であり、盛土以前の現代の耕作土と考えられる層をⅠ層として一括した。

Ⅰａ層：10YR4/1褐灰色粘土質シルト。粘性あり、しまりあり。酸化鉄を少量斑状に含む。盛土以前の耕作土である。1、3トレンチで確認された。

Ⅰｂ層：10YR5/3 にぶい黄褐色粘土質シルト。粘性やや弱、しまりあり。Ⅰａ層由来の粘土質シルトブロックを含む。盛土以前の耕作土である。1 トレンチで確認された。

Ⅰｃ層：10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト。粘性やや弱（Ⅰｂより弱）、しまりあり。灰黄褐色粘土質シルトを多量に含む。盛土以前の耕作土である。1 トレンチで確認された。

Ⅰｄ層：10YR4/1 褐灰色粘土質シルト。粘性あり、しまりあり。酸化鉄を斑状に含む。粘土ブロックを含む。盛土以前の耕作土である。2、4 トレンチで確認された。

Ⅰｅ層：10YR5/2 灰黄褐色粘土質シルト。粘性弱、しまりあり。酸化鉄を斑状に含む。土坑状になっており、深い箇所では下部がⅣ層まで至る。1、3、4 トレンチで確認された。

Ⅱａ層：10YR5/4 にぶい黄褐色粘土。粘性あり（Ⅰａより強）、しまりあり。酸化鉄を斑状に含む。灰黄褐色粘土を部分的に帯状に含む。下面が乱れる。

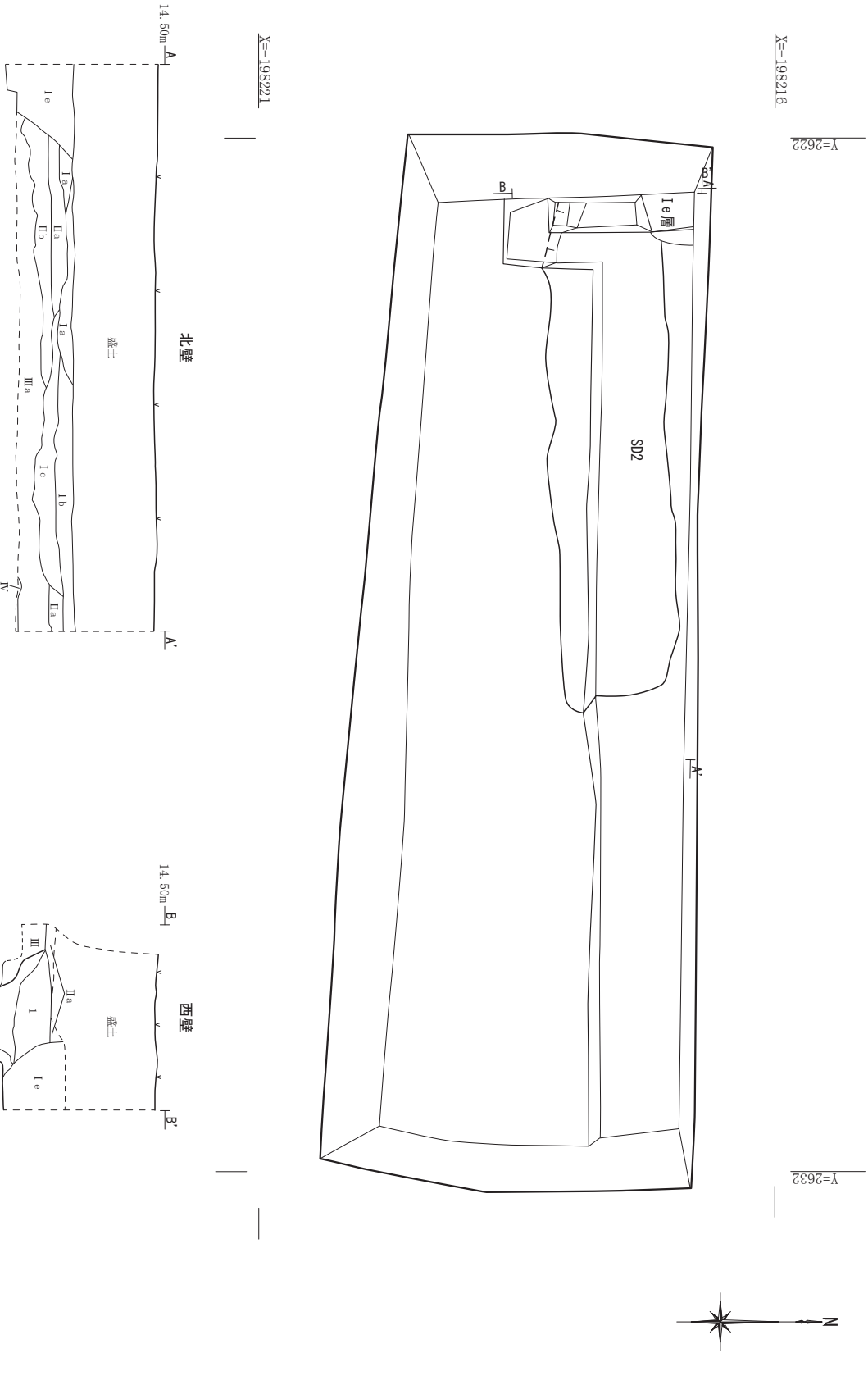
Ⅱｂ層：10YR5/4にぶい黄褐色粘土。粘性あり（Ⅱaよりやや強）、しまりあり。灰黄褐色粘土を含まず、比較的均質。1トレンチで確認された。

Ⅲａ層：10YR5/3 にぶい黄褐色粘土質シルト。粘性やや弱、しまりあり。酸化鉄を斑状に含む。φ２～３㎜程度の白色粒を斑状に含む。下部の方で砂質が強くなる。下面がやや乱れている。1 トレンチでは全体的に砂質が強くなっている。

Ⅲｂ層：10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト。粘性やや弱、しまりやや弱。酸化鉄を斑状に含む。φ２～３㎜程度の白色粒を斑状に含む。Ⅲａ層に比べて砂質が強い。部分的に検出される。2、3、4 トレンチで確認された。

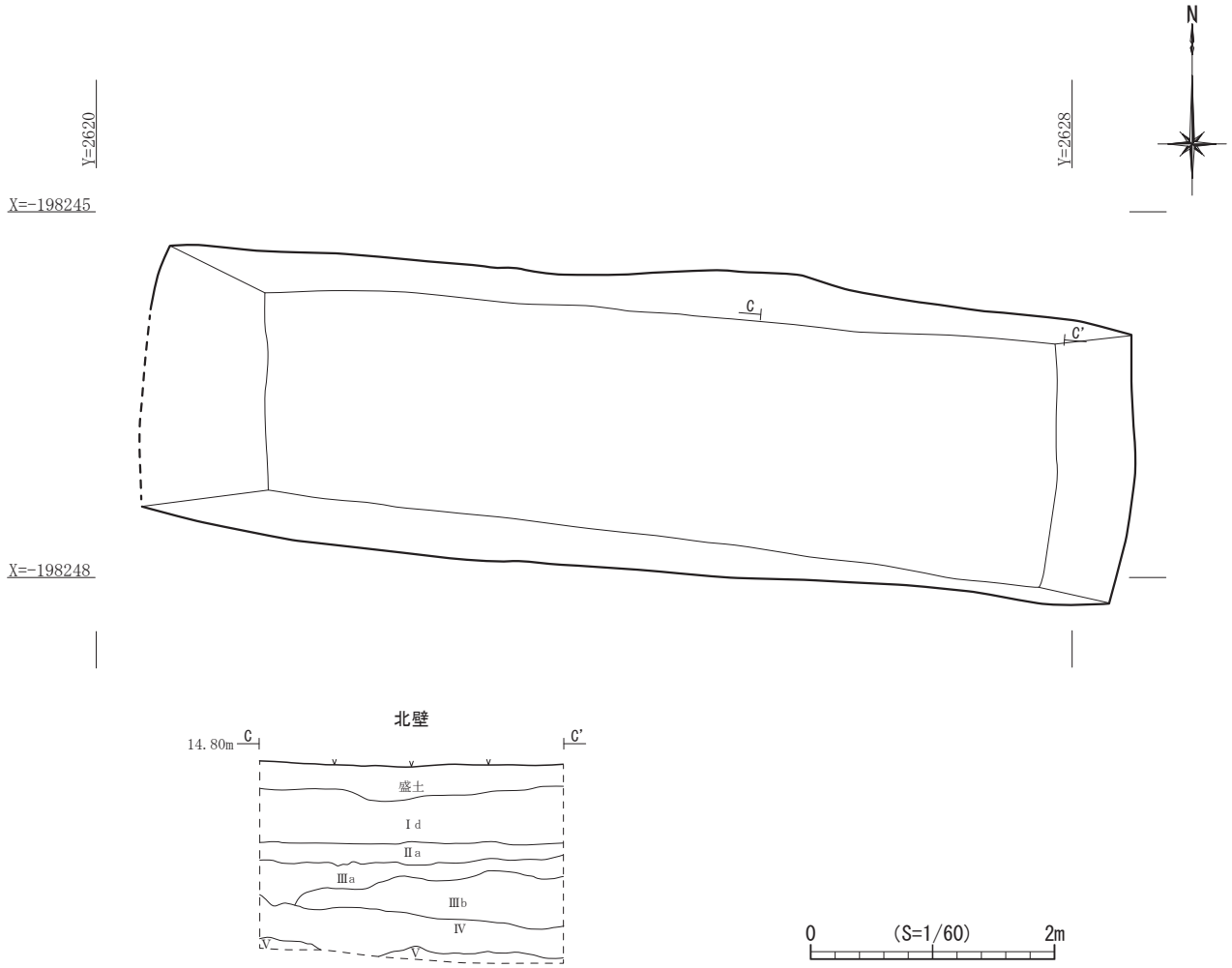
Ⅳ　層：10YR4/2 灰黄褐色粘土。粘性あり、しまりあり。φ～数㎜の礫を少量含む。酸化鉄を斑状に含む。

Ⅴ　層：10YR4/3 にぶい黄褐色粘土。粘性あり、しまりあり。酸化鉄を斑状に含む。Ⅳ層よりも砂質が弱い。



遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物
SD2	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色粘土質シルトブロックを斑状に含む。
	2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を斑状に含む
	3	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色粘土ブロックを多量に含む。

第 37 図　１トレンチ平・断面図



第 38 図　2 トレンチ　平・断面図

４．発見遺構と出土遺物

今回の調査では、溝跡が 2 条検出された。遺物は土師器片が溝跡から僅少量出土した。

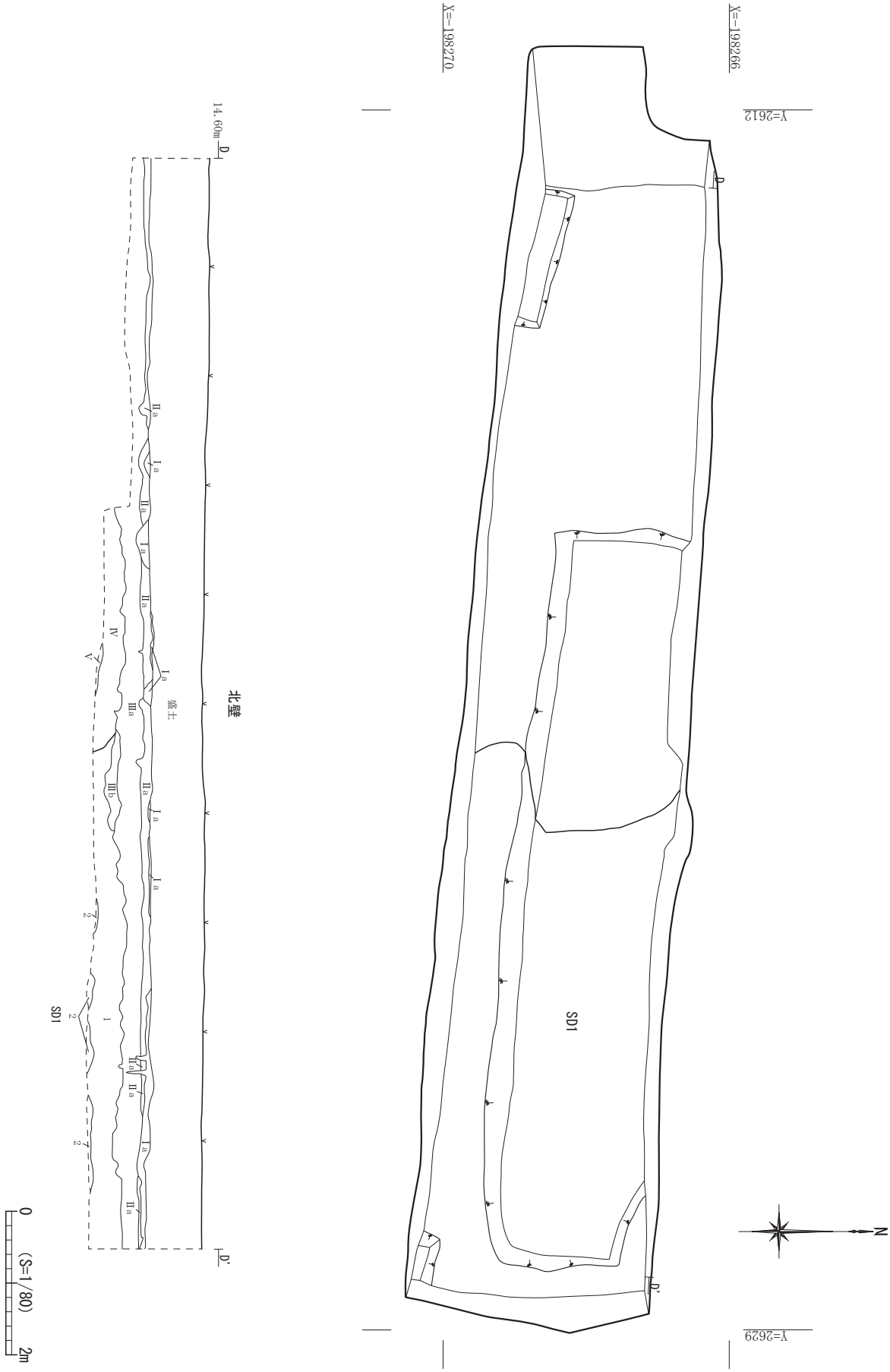
SD1 溝跡

3、4 トレンチのⅣ層上面で検出された溝跡である。3 トレンチでは南北方向に延びており、4 トレンチでは北東方向にやや傾いて延びていることが確認された。両調査区ともに東肩は認められていないため、幅は 7.7m 以上にの規模になると推測される。安全性を考量し、それ以上の掘削を行わなかったため、底面は未検出であるが、深さは 0.7 m以上である。堆積土の 1 層から土師器の小片が僅かに出土した。

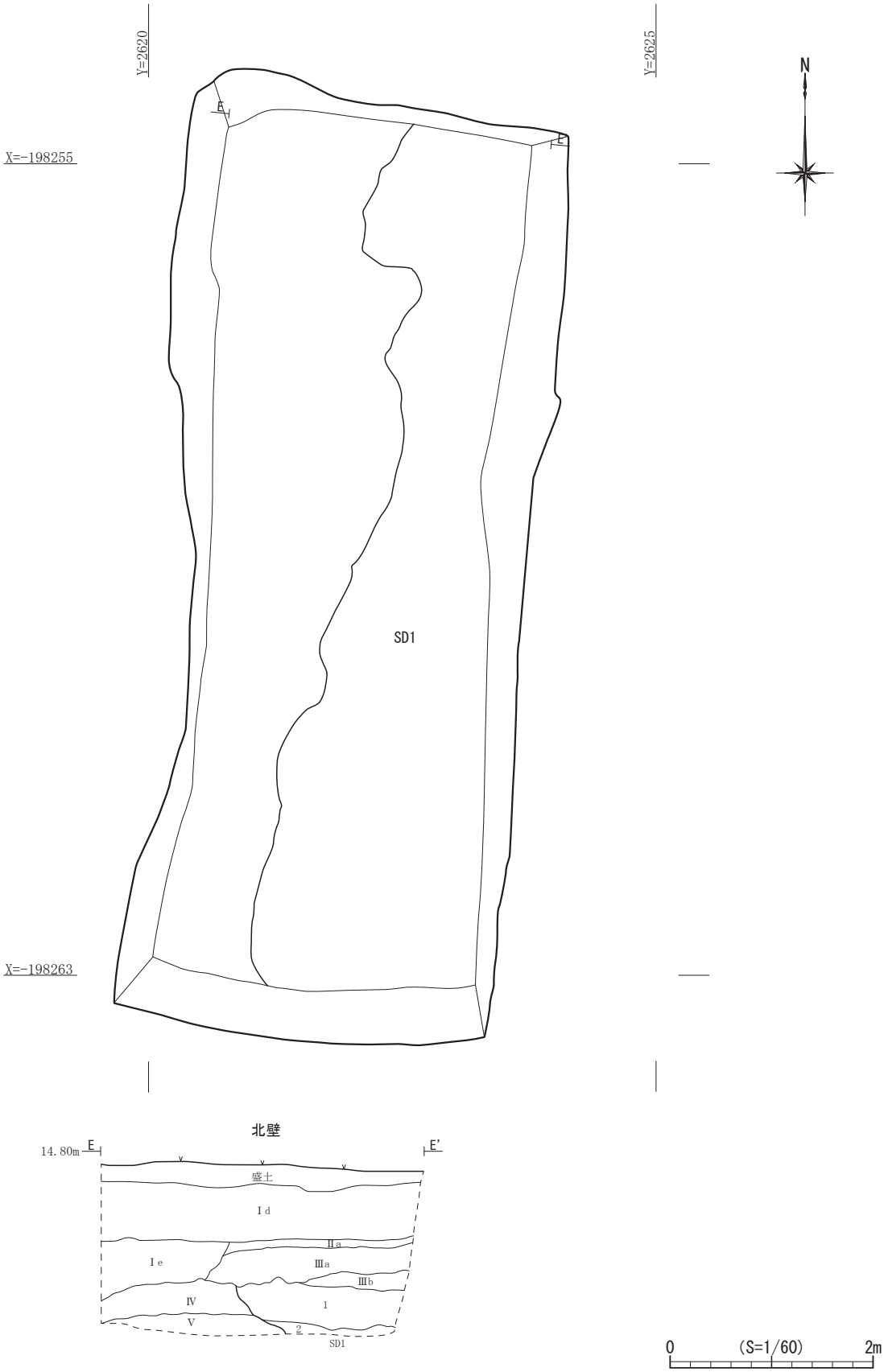
3T での検出長は約 2.7 m、検出幅は 7.7 mである。堆積土は 2 層に細分され、いずれも自然堆積土と考えられる。4T での検出長は約 8.4 m、検出幅は最大で約 2.7 mである。堆積土は 3T と対応する。

SD2 溝跡

1 トレンチのⅢ a 層上面で検出された、東西方向の溝跡である。検出長は約 4.8 mである。西端は調査区外の西側に延びているが、東端は調査区のほぼ中央で途切れている。幅は約 1.1m、深さは約 0.8m である。堆積土は 3 層に分けられた。



第 39 図　3 トレンチ平・断面図



遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物
SD1	1	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	φ数cm程度の酸化鉄を斑状に含む。
	2	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土	酸化鉄を斑状に含む。含まれる酸化鉄粒が１層よりも小さい。

第 40 図　4 トレンチ平・断面図

５．まとめ

今回の調査地点は、富沢館跡の東端に位置している。今回の調査では３・４トレンチのⅣ層上面で SD1 溝跡が、１トレンチのⅢａ層上面で SD2 溝跡が検出された。

3、4 トレンチで検出された SD1 溝跡は未調査区間を含めると検出長は約 15m になる。また今回の調査区の南側に接する道路部分は平成 25・26 年に実施された確認調査のⅣ-44 調査区が存在するが、堀跡と推定される溝跡が検出されているが、今回検出された SD1 溝跡はその延長線上に位置し、規模からも同一の遺構であると考えられる。2 トレンチでは SD1 溝跡が検出されなかったことから、SD1 溝跡は 4 トレンチと 2 トレンチの間で東に屈曲するか、途切れていると推測される。

引用・参考文献

仙台市教育委員会　2018 『鍛冶屋敷 A 遺跡・富沢館跡・川前遺跡ほか』仙台市文化財調査報告書第 466 集

１．１トレンチ 遺構検出状況（東から）

２．１トレンチ 北壁土層断面（南東から）

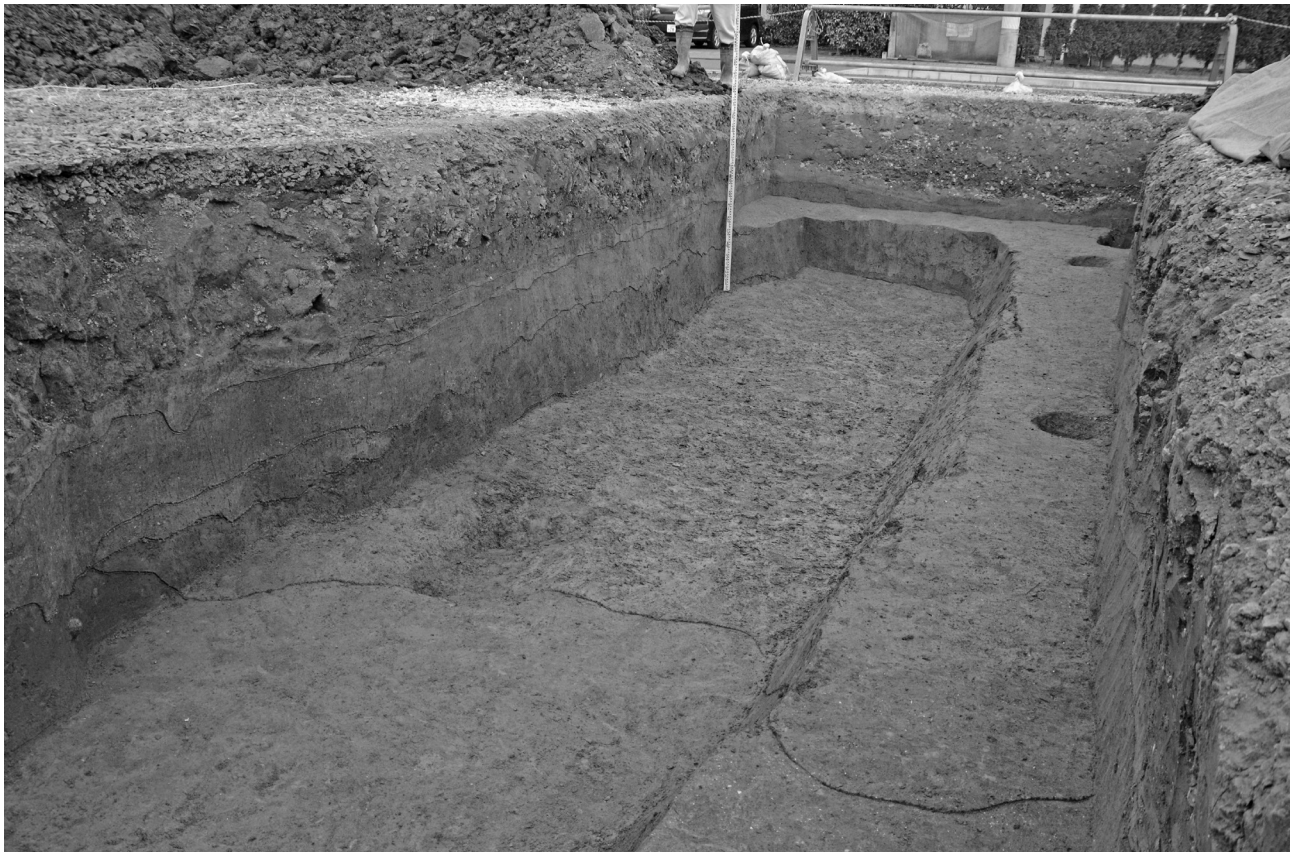
３．１トレンチ SD2 溝跡断面（東から）

４．２トレンチ完掘状況（東から）

写真図版 19　富沢館跡第 20 次調査（１）

１．２トレンチ北壁土層断面（南東から）

２．３トレンチ完掘状況（南東から）



３．３トレンチ SD1 溝跡検出状況（南西から）

４．４トレンチ SD1 溝跡検出状況（南から）

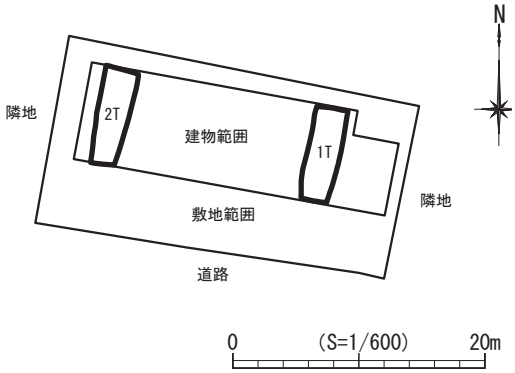
５．４トレンチ北壁土層断面（南から）

写真図版 20　富沢館跡第 20 次調査（２）

第３節　第 21 次調査

1. 調査要項

遺　跡　名	富沢館跡（宮城県遺跡登録番号 01246）
調 査 地 点	仙台市太白区富沢字舘東 81-1
調 査 期 間	令和３年１月７日～令和３年１月８日
調査対象面積	369.29 ㎡
調 査 面 積	37.5 ㎡（2.5m × 7.5m）×２
調 査 原 因	長屋住宅建築工事
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育局生涯学習部 文化財課調査調整係
担 当 職 員	主任　小浦真彦　　主事　木村 恒



第 41 図　21 次調査区配置図

２．調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、申請者より令和２年 11 月９日付で提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」（令和２年 11 月 12 日付 R2 教生文第 101-283 号で通知）に基づき実施した。

調査では建築範囲内に 2.5m × 7.5m の調査区を２箇所設定した。重機により砕石および盛土、基本層Ⅰ～Ⅱ層を除去した後、Ⅲ層上面で遺構確認作業を行った。

その結果、1 トレンチ（東側）では調査区の GL-1.5m 以下に及ぶ攪乱が調査区の半分以上に及んでいることが確認され、想定されていた溝跡のプランは確認できなかった。2 トレンチ（西側）においても、調査区の約半分は攪乱を受けており GL-1.5m 以下まで攪乱が及んでいることが確認された。また、攪乱が及ばない箇所でも、GL-1.5m 程度までⅡ層が堆積していることが確認された。そのため、西壁付近に側溝を設定して土層を確認したが、断面においても堀跡の肩の落ち込みは確認できなかった。令和３年１月８日まで調査区内の遺構完掘および計測等を行い、野外調査を終了した。

遺構の記録は、調査区平面図(S=1/40)および断面図(S=1/20)を作製し、デジタルカメラを用いて写真撮影を行った。

３．基本層序

今回の調査区では、厚さ約 0.5 ｍの砕石・盛土の下に大別２層、細別８層の基本層を確認した。遺構確認作業はⅢ層上面で行った。盛土以前の現代の耕作土をⅠ層、それ以前の耕作やその他の攪乱が及ぶ層をⅡ層として一括した。

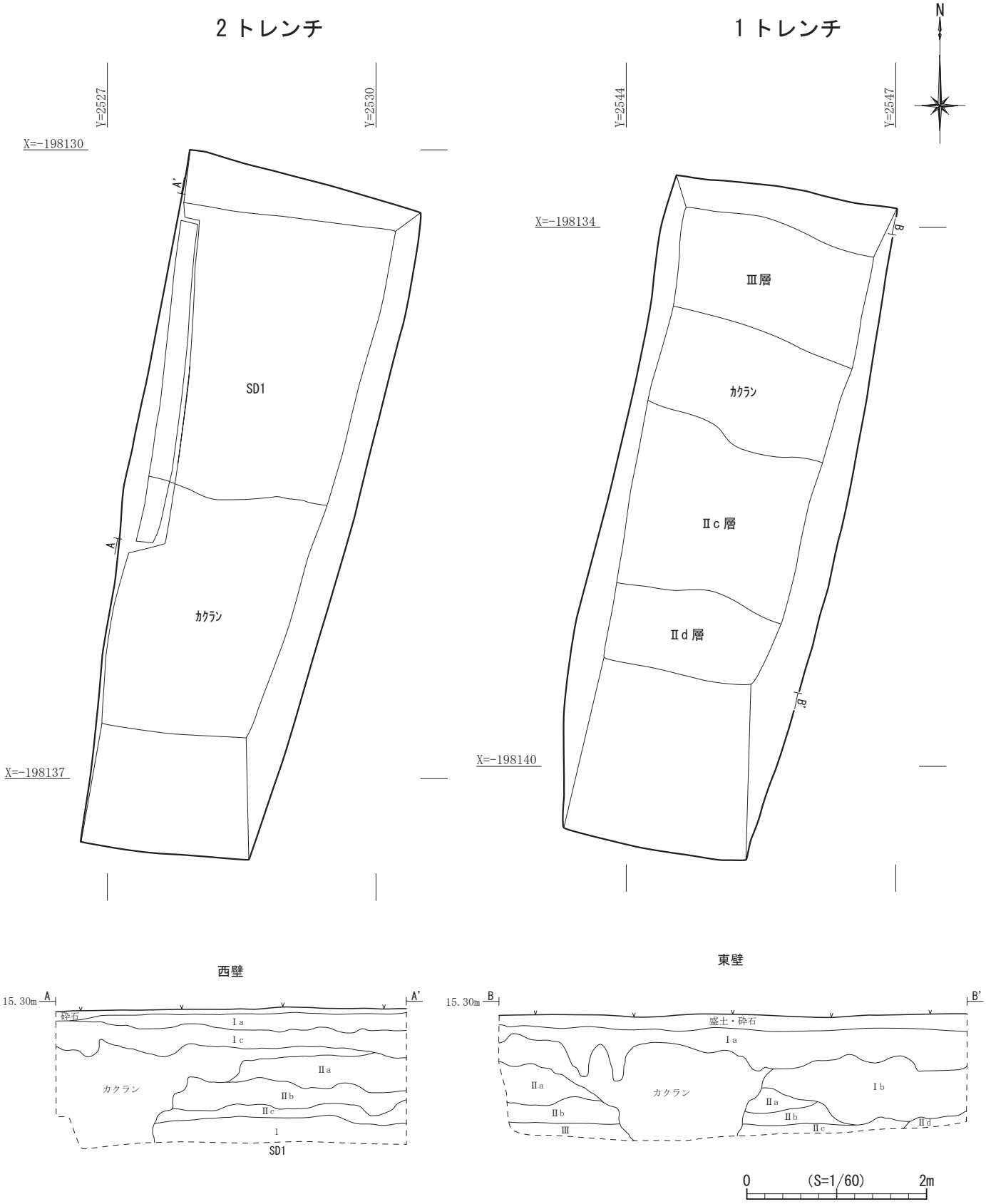
Ⅰａ層：10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト。粘性やや弱、しまりあり。近現代の耕作土である。

Ⅰｂ層：10YR4/1 褐灰色粘土質シルト。粘性あり、しまりあり。近現代の耕作土である。

Ⅱａ層：10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト。粘性あり、しまりやや弱。灰黄褐色粘土質シルトブロックを含む。現代のビニール等が混入する。

Ⅱｂ層：10YR4/4 褐色粘土質シルト。粘性あり、しまりやや弱。灰黄褐色粘土質シルトブロックを多量に含む。現代のビニール等が混入する。

Ⅱｃ層：10YR4/4 褐色粘土質シルト。粘性あり（Ⅱａ層、Ⅱｂ層より強）、しまりあり。にぶい黄褐色粘土質シルトブロック、10YR4/2 粘土ブロックを含む。



遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物
SD1	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	小礫を少量含む（部分的にまとまる箇所あり）。酸化鉄を斑状に含む。炭化物を少量含む。

第 42 図　富沢館跡 21 次調査区平面・断面図

Ⅱｄ層：10YR4/6 褐色粘土質シルト。粘性あり（Ⅱｃ層と同程度)、しまりあり。灰黄褐色粘土ブロックを多量に含む。

Ⅱｅ層：10YR4/1 褐灰色粘土質シルト。粘性やや弱、しまりあり。酸化鉄を斑状に含む。下部ににぶい黄褐色粘土質シルトブロックを少量含む。

Ⅲ　層：10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト。粘性あり、しまりあり。小礫を少量含む。1トレンチでのみ確認された。

４．発見遺構と出土遺物

今回の調査では、溝跡が１条検出された。遺物は出土していない。

SD1 溝跡

2トレンチの北半で検出された。調査区内では肩の落ち込みが認められず、プランが不明瞭であるが、周辺調査との比較から溝跡であると推測された。安全性を考慮し遺構の掘削を行わなかったため底面は未検出である。

近隣で行われた第２次、第３次調査では、北西―南東方向の溝跡がそれぞれで検出されており、今回の調査範囲はそれら調査の中間に位置する。1トレンチの基本層Ⅲ層は、土層の特徴と検出標高から第２次調査の基本層Ⅴ層と類似し、対応するものと考えられる。また、2トレンチで確認されたSD1溝跡の１層は第３次調査のSD1溝跡の１層と類似しており、対応する可能性が考えられる。そのため、明確なプランは不明であるが、今回検出されたSD1溝跡はそれら調査で認められた堀跡の延長にあたる可能性が推測される。

1トレンチでは、攪乱の北で基本層Ⅲ層が確認される一方、攪乱の南側では基本層Ⅲ層は認められず、基本層Ⅱａ～Ⅱｄ層が落ちこんでいた。2トレンチの南半は攪乱を受けているものの、北側ではⅡ層の下にSD1の堆積土が確認され、基本層Ⅲ層は認められなかった。よって、1トレンチでは北側以外ではⅢ層が確認されず、溝跡の肩のプランも確認できないことから、北側の肩は攪乱の以南にあるものと考えられる。また、2トレンチにおいては、両肩のプランが確認できないことから、北側の肩が調査区外の北側にあり、南側の肩が攪乱の内部、または調査区外の南側にあるものと推測される。

５．まとめ

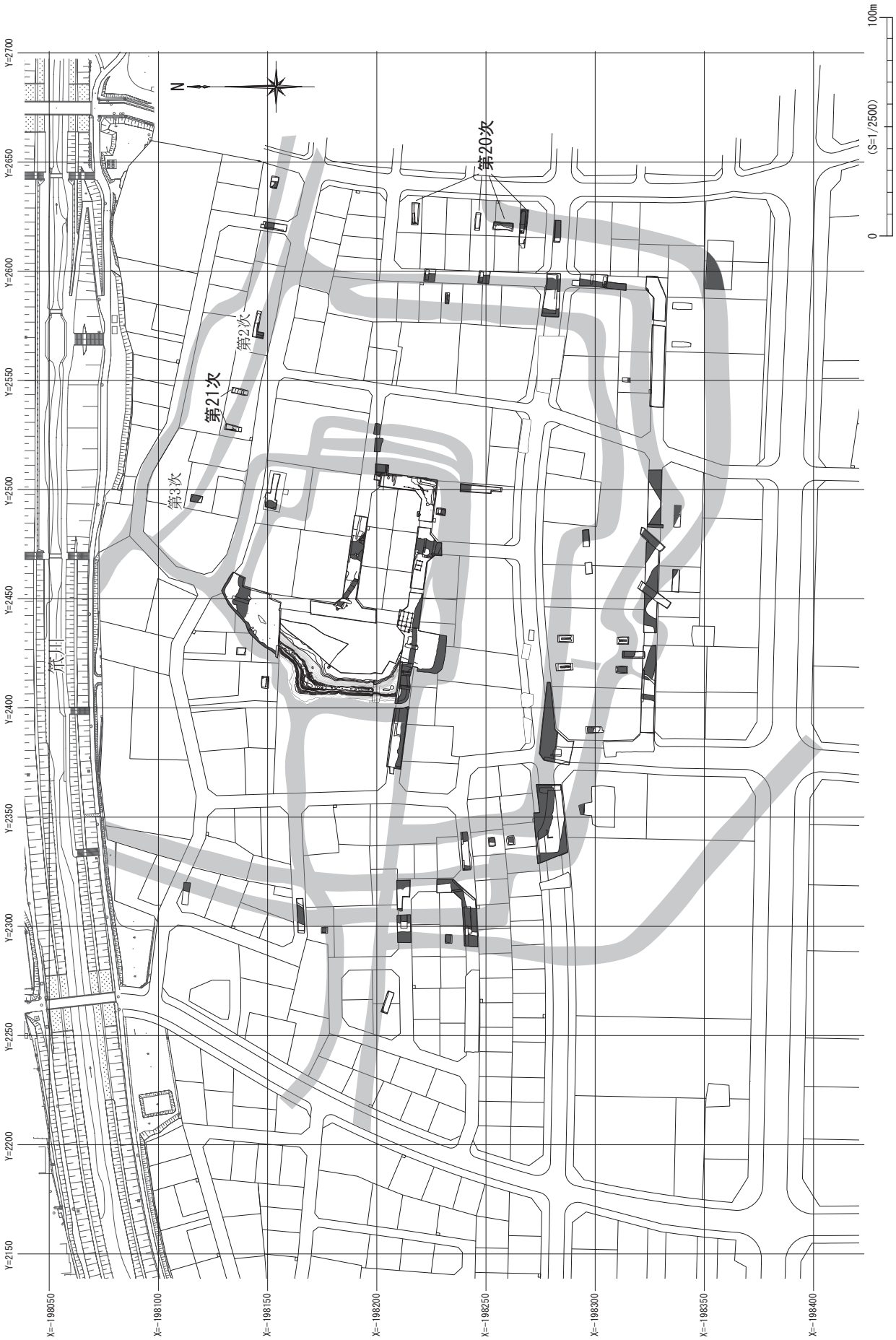
今回の調査地点は、富沢館跡の北東部に位置している。今回の調査では、1トレンチ、2トレンチともにGL-1.5m以上の攪乱を受けていることが確認され、攪乱が及ばない範囲でもGL-1.5m程度まで、現代の耕作などの影響を受けているⅡ層が確認された。

当初、今回の調査範囲内では、第２次、第３次調査で検出された北西―南東の溝跡の延長が検出されると想定されていたが、今回の調査では、溝跡は両肩ともにプランでは確認できなかった。周辺の調査結果から、1トレンチの基本層Ⅲ層が、第２次調査の基本層Ⅴ層と対応し、2トレンチで確認されたSD1溝跡の１層が第３次調査で確認されたSD1溝跡の１層と対応する可能性が推測される。そのため、明確なプランは不明であるが、溝跡の推定ラインとも大きなずれがないことからも、SD1溝跡は1トレンチの攪乱より南側に北の肩があり、2トレンチの少なくとも北側はSD1溝跡の内部に入っている可能性が考えられる。

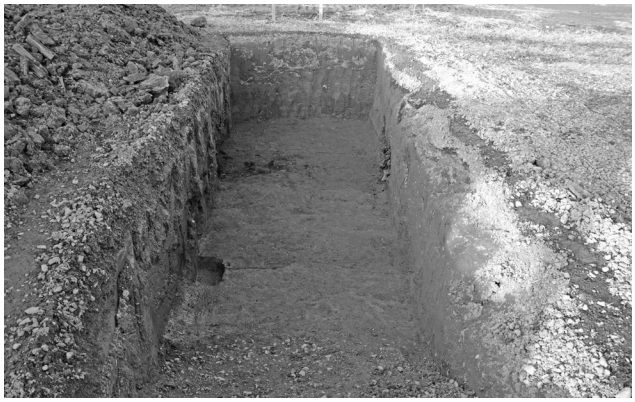
引用・参考文献

仙台市教育委員会　2004『保春院前遺跡他　発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第274集

仙台市教育委員会　2013『仙台市震災復興関係遺跡発掘調査報告Ⅰ―平成23年度・平成24年度震災復興民間文化財発掘調査助成事業に伴う発掘調査報告書―』仙台市文化財調査報告書第416集



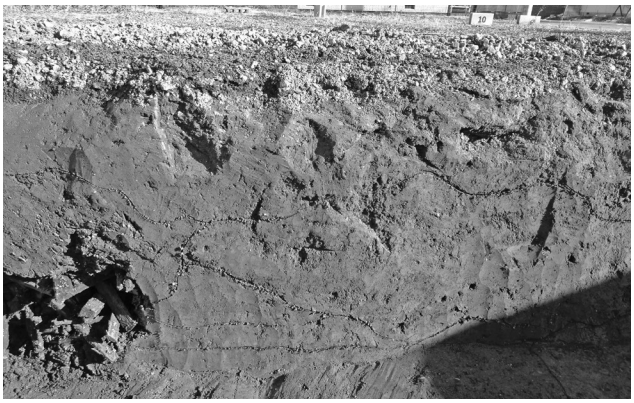
第 43 図　富沢館跡　検出溝跡位置図



１．１トレンチ完掘状況①（南から）

２．１トレンチ完掘状況②（南西から）

３．１トレンチ東壁断面 北半（西から）



４．１トレンチ東壁土層断面 南半（西から）

６．２トレンチ遺構検出状況（北から）

６．２トレンチ遺構検出状況（南から）

７．２トレンチ SD1 土層断面（東から）

８．２トレンチ遺構検出状況（北東から）

写真図版 21　富沢館跡第 21 次調査

第５章　京ノ中遺跡の調査

第１節　遺跡の概要

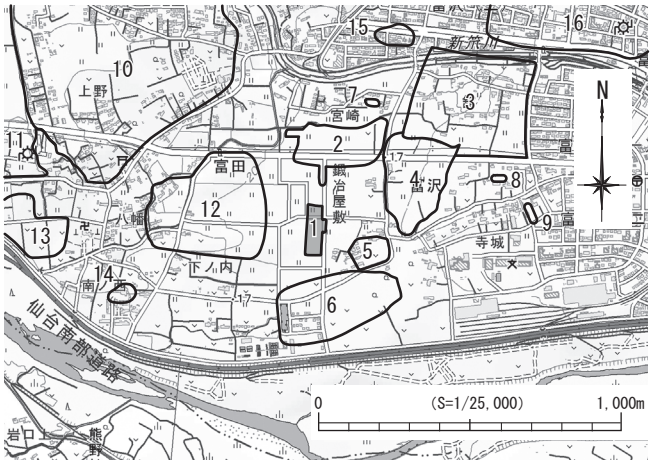
京ノ中遺跡は仙台市太白区富田字京ノ北に所在する。JR 東北本線長町駅から南西へ約 3.2 km、仙台市地下鉄南北線富沢駅から西へ約 1.4 kmの地点で、名取川下流域の左岸、郡山低地と呼称される沖積地帯の自然堤防上に立地している。現況は仙台市富沢駅西土地区画整理事業に伴い盛土造成され、旧来の地形は失われており、周辺は住宅地や商業施設となっている。

本遺跡は、土地区画整理事業に伴い平成 26 年度に行なわれた試掘調査で発見され、新規登録された。平成 27 年に行われた第１次調査では、竪穴住居跡２軒、溝跡、柱穴群が確認されており、住居が散見する集落であることが想定された。また平成 30 年度に医療施設建設工事に伴う第２次調査では、竪穴住居跡 15 軒、竪穴遺構、掘立柱建物跡、柵列跡、溝跡などが確認され、８世紀後半～ 10 世紀前半頃の古代には集落が断続的に営まれ、中世には柵列と溝跡に囲まれた屋敷地であることが確認されている。

第２節　第３次調査

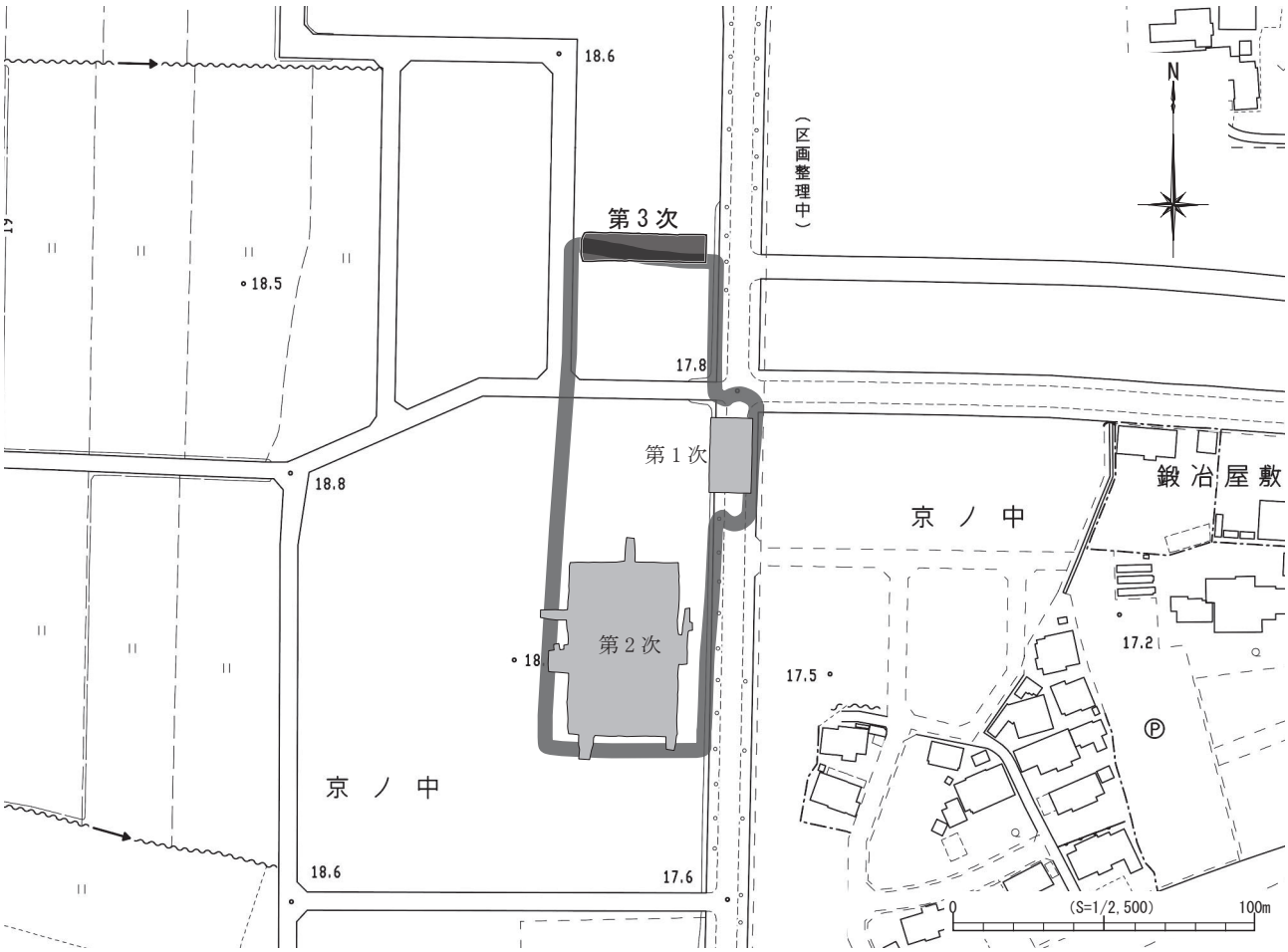
1. 調査要項

遺　跡　名	京ノ中遺跡（宮城県遺跡登録番号 01573）
調 査 地 点	仙台市太白区富田字京ノ北 110、111、112 の各一部
調 査 期 間	令和３年２月８日～ 10 日（試掘調査）
	令和３年３月８日～ 25 日（本発掘調査）
調査対象面積	640.96 ㎡
調 査 面 積	約 266.5 ㎡
調 査 原 因	共同住宅建築工事（北棟）
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育委員会文化財課調査調整係
担 当 職 員	主任　及川謙作　　小浦真彦　　主事　木村恒（試掘調査）
	主任　小浦真彦　　主事　澤目雄大（本発掘調査）



番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	京ノ中遺跡	集落跡	自然堤防	平安
2	鍛冶屋敷 A 遺跡	集落跡	自然堤防	縄文・古代～平安
3	富沢館跡	城館跡・集落跡	自然堤防	縄文・平安～近世
4	鍛冶屋敷前遺跡	集落跡	自然堤防	縄文・古代～中世
5	鍛冶屋敷 B 遺跡	包含地	自然堤防・後背湿地	縄文・古代～近世
6	六本松遺跡	集落跡	自然堤防	古代～平安
7	宮崎遺跡	集落跡	自然堤防	平安
8	川前浦遺跡	散布地	自然堤防	縄文・古代
9	川前遺跡	集落跡	自然堤防	縄文
10	上野遺跡	集落跡	段丘	縄文・古代～平安
11	山田条里遺跡	水田跡・屋敷跡	段丘・自然堤防	縄文・古代～平安・近世
12	南ノ東遺跡	散布地	自然堤防	弥生・平安
13	船渡前遺跡	集落跡	自然堤防	縄文～弥生・古代～平安
14	富田南西遺跡	散布地	自然堤防	古代～平安
15	堀ノ内遺跡	散布地	自然堤防	古墳～平安
16	山口遺跡	集落跡・水田跡	自然堤防・後背湿地	縄文～近世

第 44 図　京ノ中遺跡と周辺の遺跡

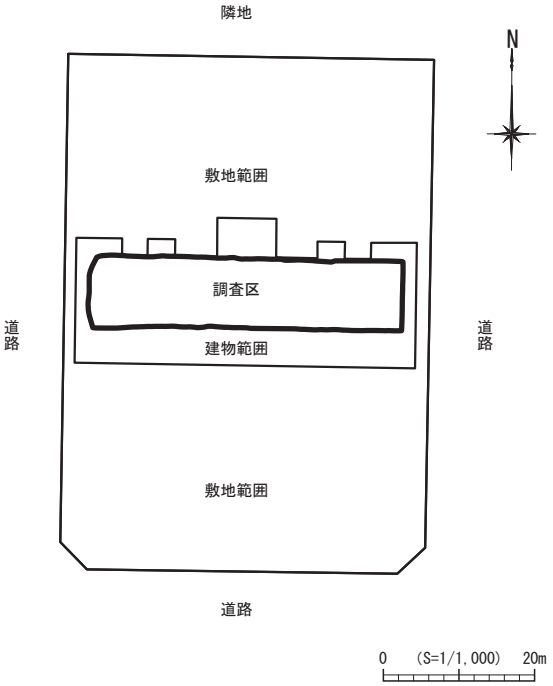


第 45 図　第３次調査区位置図

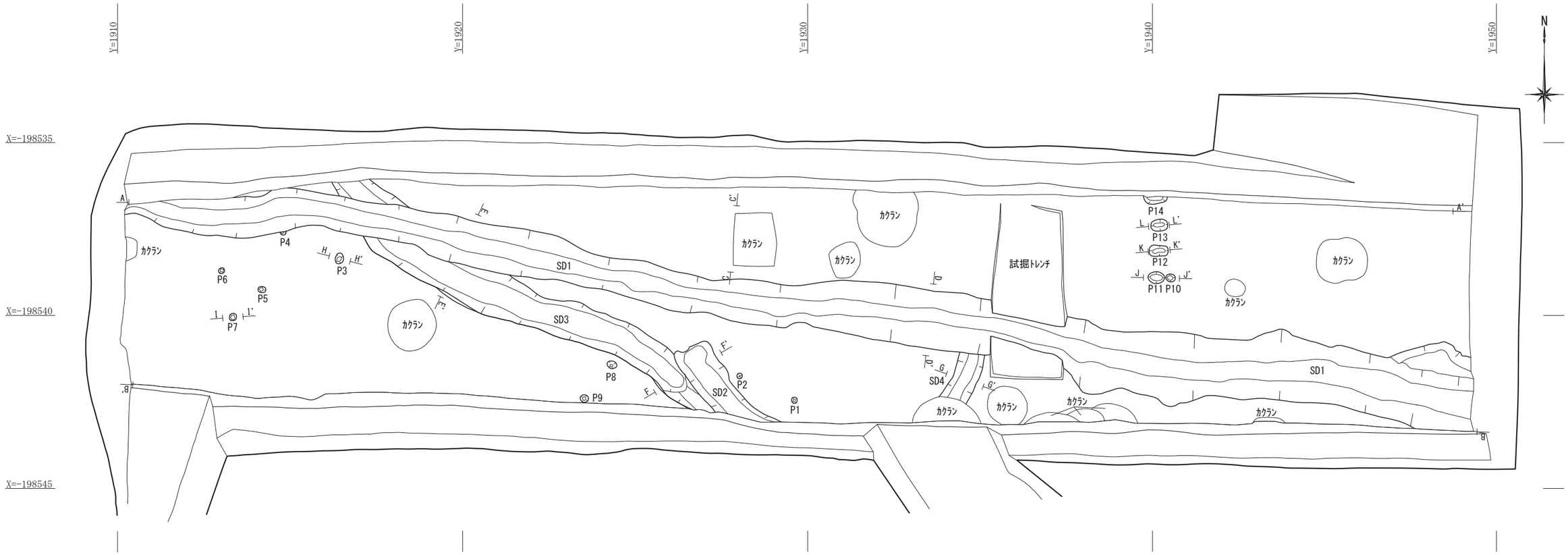
２．調査に至る経過と調査方法

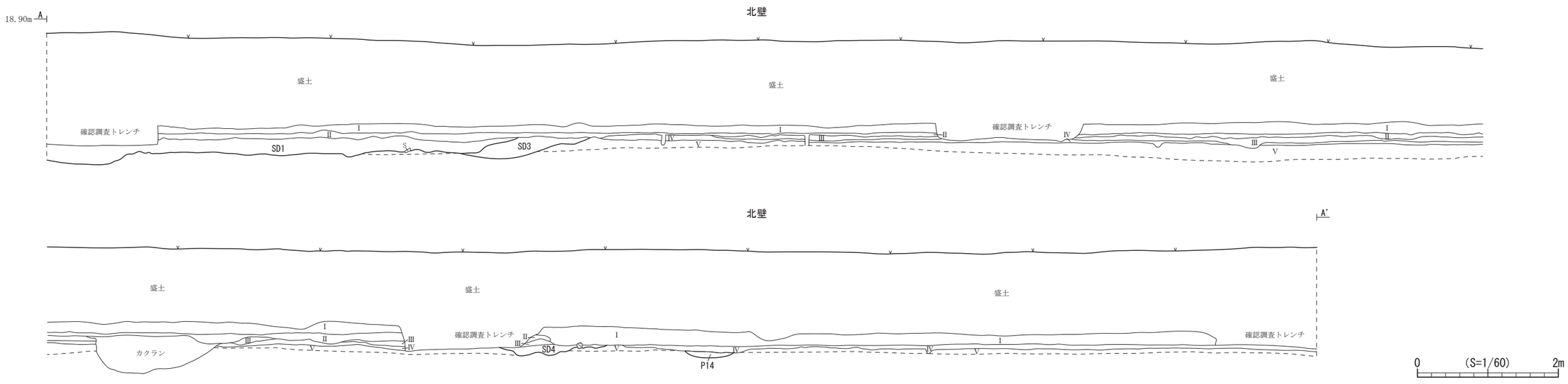
今回の調査は令和３年１月 14 日付で申請者から提出された「埋蔵文化財の取扱いについて（協議）」（令和３年１月 18 日付 R2 教生文第 102-86 号で回答）に基づき実施した。令和３年２月８日～ 10 日に共同住宅２棟のうち北棟のみを対象として確認調査を実施、調査を行ったところ、溝跡が検出され、遺物も土師器、陶器などが出土したことから、当該範囲まで遺跡範囲を拡大することを宮城県に通知し（R2 教生文第 3135 号）、３月８日から本発掘調査を実施した。今回の発掘調査では、43.0 × 8.5m の調査区を設定した。埋土および基本層Ⅰ～Ⅳ層を重機で除去した後、遺構確認作業と遺構の精査を行った。出土遺物は層位ごと、検出した遺構ごとに取り上げた。３月 25 日まで調査区内の遺構完掘および計測を行い調査の一切を終了した。

遺構の記録は、トータルステーションを用いて遺構平面図（S=1/20）を、また必要に応じて各土層断面図（S=1/20）を作製し、デジタルカメラを用いて記録写真を撮影した。

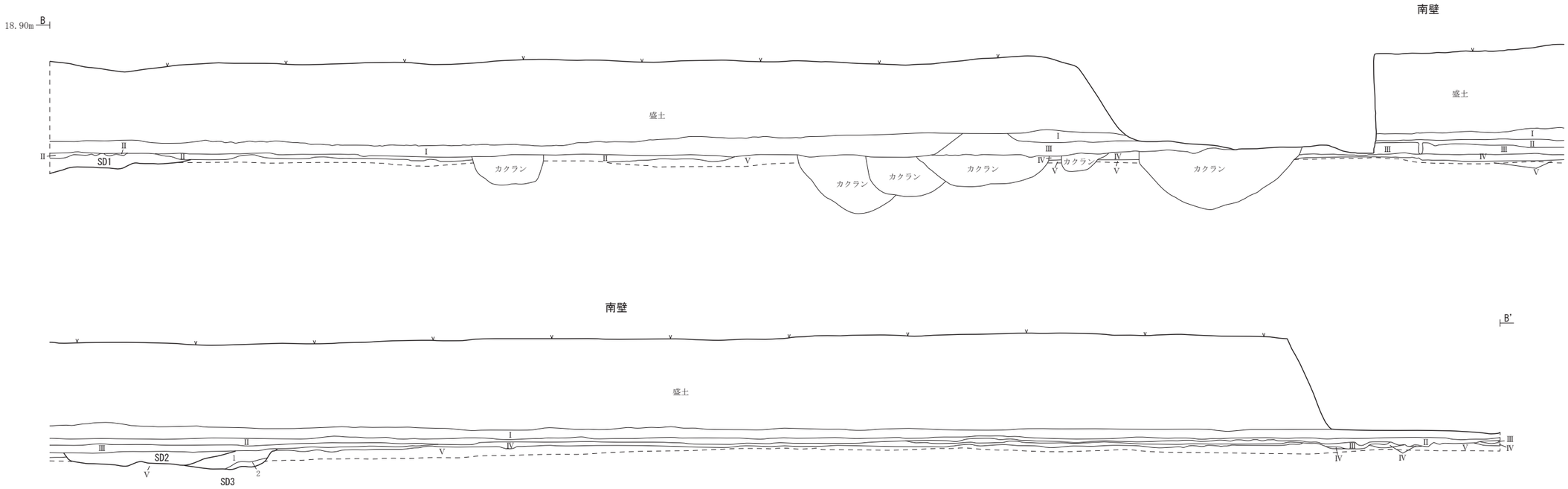


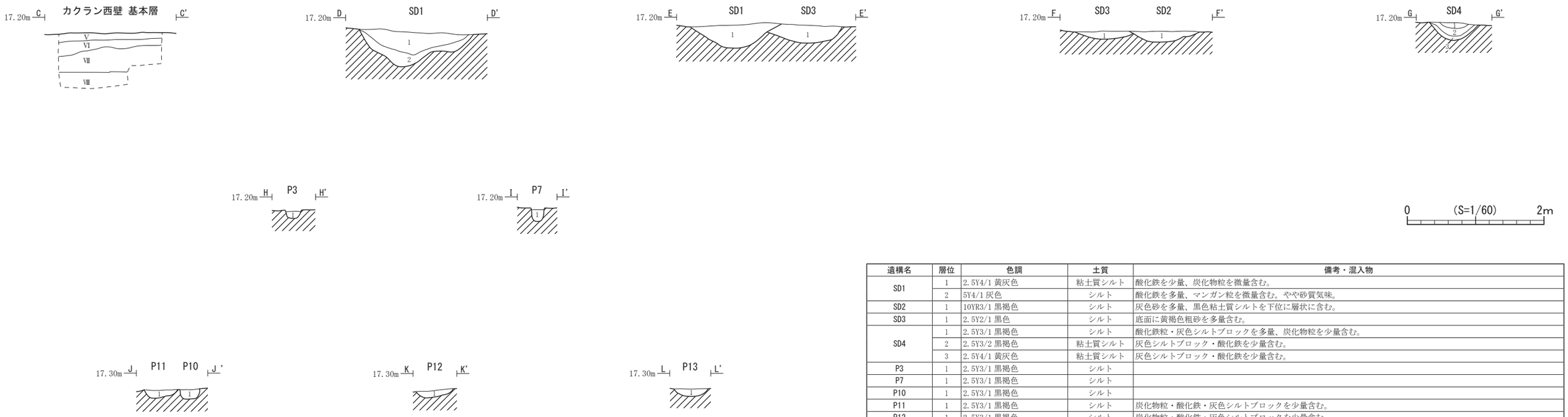
第 46 図　第３次調査区配置図





第 47 図　調査区平・断面図 (1)





遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物
SD1	1	2.5Y4/1 黄灰色	粘土質シルト	酸化鉄を少量、炭化物粒を微量含む。
	2	5Y4/1 灰色	シルト	酸化鉄を多量、マンガン粒を微量含む。やや砂質気味。
SD2	1	10YR3/1 黒褐色	シルト	灰色砂を多量、黒色粘土質シルトを下位に層状に含む。
SD3	1	2.5Y2/1 黒色	シルト	底面に黄褐色粗砂を多量含む。
SD4	1	2.5Y3/1 黒褐色	シルト	酸化鉄粒・灰色シルトブロックを多量、炭化物粒を少量含む。
	2	2.5Y3/2 黒褐色	粘土質シルト	灰色シルトブロック・酸化鉄を少量含む。
	3	2.5Y4/1 黄灰色	粘土質シルト	灰色シルトブロック・酸化鉄を少量含む。
P3	1	2.5Y3/1 黒褐色	シルト	
P7	1	2.5Y3/1 黒褐色	シルト	
P10	1	2.5Y3/1 黒褐色	シルト	
P11	1	2.5Y3/1 黒褐色	シルト	炭化物粒・酸化鉄・灰色シルトブロックを少量含む。
P12	1	2.5Y3/1 黒褐色	シルト	炭化物粒・酸化鉄・灰色シルトブロックを少量含む。
P13	1	2.5Y3/1 黒褐色	シルト	炭化物粒・酸化鉄・灰色シルトブロックを少量含む。

第 48 図　調査区 断面図 (2)

３．基本層序

基本層は盛土以下にⅠ～Ⅷ層まで確認している。Ⅰ～Ⅱ層は現代の水田耕作土で、遺構検出作業は主にⅤ層上面で行った。遺構検出面であるⅤ層までの深さはGL-1.2ｍである。

Ⅰ　層：2.5GY4/1暗オリーブ褐色粘土。植物遺体を少量含む。層厚は約18～31cmである。

Ⅱ　層：5GY5/1オリーブ灰色粘土質シルト。酸化鉄を多量に含む。層厚は約5～14cmである。

Ⅲ　層：5Y3/1オリーブ黒色シルト。酸化鉄を多量、マンガン粒を少量含む。層厚は約4～10cmである。

Ⅳ　層：2.5Y3/1黒褐色シルト。酸化鉄を多量、マンガン粒を多量に含む。層厚は約4～11cmである。

Ⅴ　層:2.5Y4/1黄灰色シルト。酸化鉄を多量、マンガン粒を多量に含む。遺構検出面。層厚は約30～34cmである。

Ⅵ　層：2.5Y4/3オリーブ褐色シルト。層厚は約10～20㎝である。

Ⅶ　層：2.5Y4/4オリーブ褐色砂質シルト。層厚は約24～37cmである。

Ⅷ　層：10YR4/4褐色粘土質シルト。層厚は約23cm以上である。

４．発見遺構と出土遺物

(1) 調査の概要

今回の調査で確認された遺構は、溝跡４条、ピット14基である。調査区中央には、SD1溝跡が東西方向に延びており、これに切られてSD2～4溝跡が確認されている。また、SD1溝跡の周辺には径約0.6～1.1mおよび径約1.5～2.1mの円形を呈する撹乱が11基確認されている。掘り込み面や堆積土から比較的新しい土坑ないし井戸跡とみられ、取水・貯水に用いられたと考えられる。遺物は主に遺構検出面およびSD1・3溝跡から出土しており、縄文土器、土師器、須恵器、赤焼け土器、陶器、磁器、瓦、石器、金属製品などである。

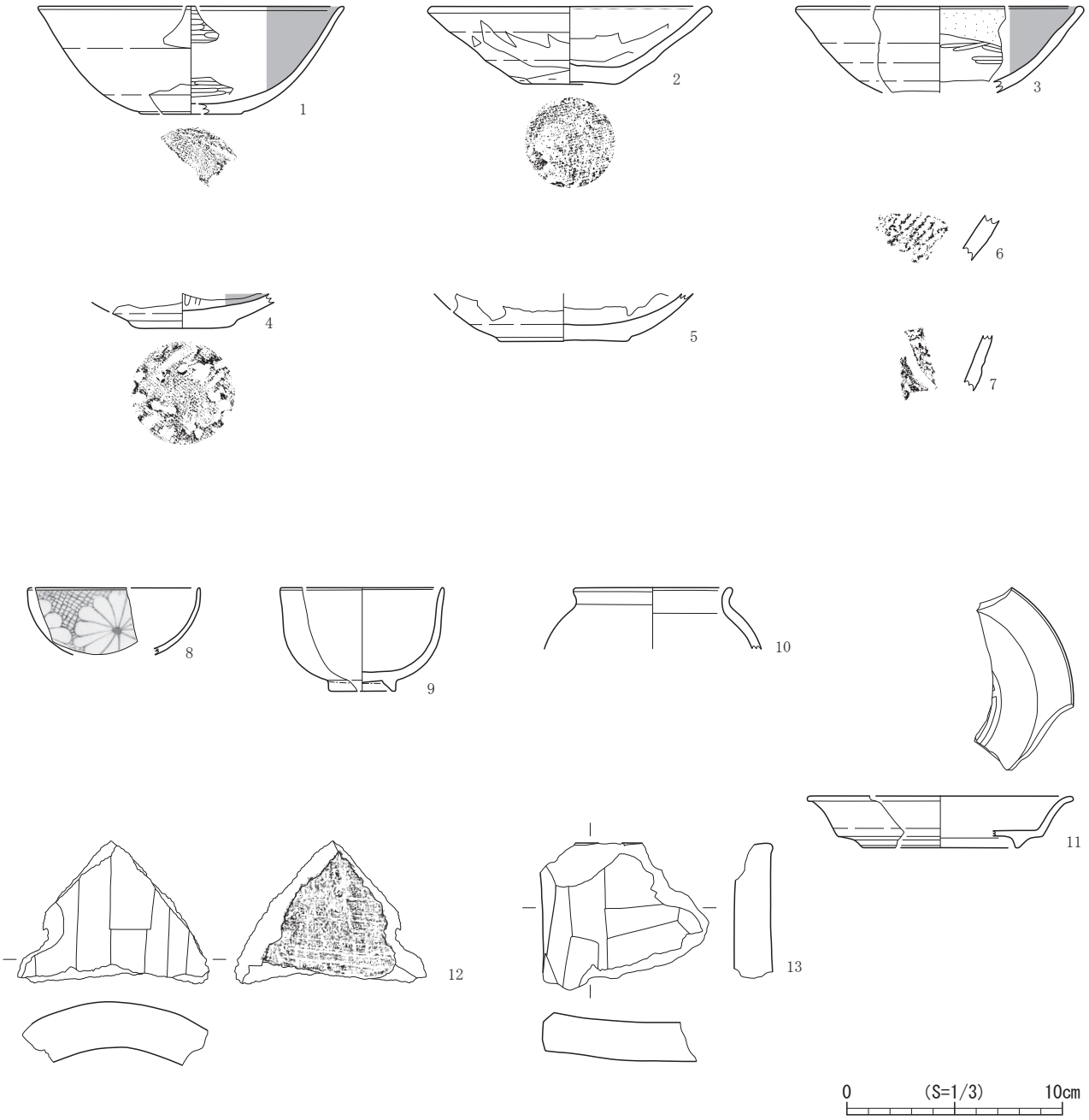
(2) 溝跡

SD1溝跡

調査区の北西～南東にかけて検出された東西方向に延びる溝跡で、SD3・4溝跡より新しい。調査区壁断面の観察から、掘り込み面は明確ではないがⅡ層に覆われており、Ⅳ層を掘り込み面とするSD3溝跡を切る。検出長は約41.5mで、調査区外の東西方向へさらに延びる。規模は上端幅1.5～2.5m、下端幅0.5～0.8m、深さは検出面から約0.5m前後である。断面形状は半円形ないし逆台形を呈し、立ち上がりはやや急角度である。堆積土は２層確認され、１層にはビニールゴミ等が混入する。出土遺物は、堆積土から縄文土器、非ロクロ土師器、ロクロ土師器、須恵器、陶器、磁器、瓦、石器、金属製品等が出土しており、その中から縄文土器１点（第49図7）、ロクロ土師器坏１点（第49図2）、平瓦２点（第49図13・第50図1）、陶器碗と小壺がそれぞれ１点（第49図９・10）、磁器碗と小皿がそれぞれ１点（第49図8・11）、磨製石斧１点（第50図４）、不定形石器１点（第50図３）を図化している。

SD2溝跡

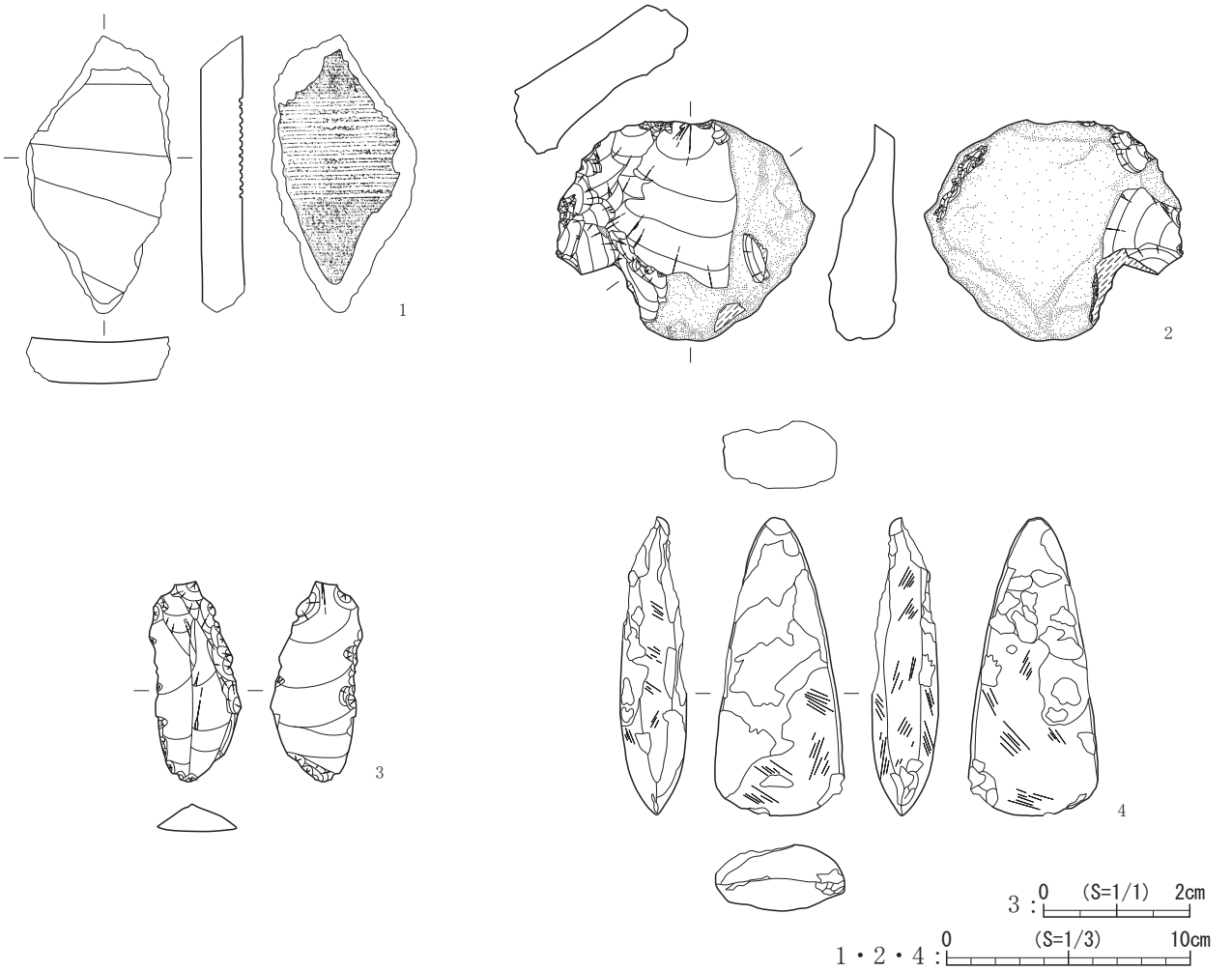
調査区中央南寄りで検出された南北方向に延びる溝跡で、SD3溝跡より新しい。検出長は約3.2mで、北側は溝跡の端部となって途切れており、南側は調査区外へ更に延びる。規模は上端幅約1.1m、下端幅0.5～0.6m、深さは検出面から約0.2mである。断面形状は皿形ないし逆台形を呈し、立ち上がりはやや緩やかである。堆積土は１層確認された。遺物は出土していない。本遺構はSD3溝跡の延長線上に位置し、やや入れ違うようにして重複している。堆積土も類似することから、本遺構の方がやや新しい時期の拡張ないし延長された溝跡と考えられる。



図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量（cm）			外面	内面	備考	写真図版
						口径	底径	器高				
1	D-3	SD3	堆積土	ﾛｸﾛ土師器	坏	(14.0)	(4.6)	5.0	ロクロナデ 底：回転糸切	ヘラミガキ 黒色処理	胎土緻密 海面骨針含む	25-1
2	D-1	SD1	堆積土	ﾛｸﾛ土師器	坏	(12.8)	4.2	3.6	ロクロナデ 体下端：手持ちヘラケズリ 底：回転糸切	ロクロナデ→コテあて調整		25-2
3	D-4	SD3	堆積土	ﾛｸﾛ土師器	坏	(13.0)			ロクロナデ	ヘラミガキ 黒色処理 一部剥離	胎土緻密	25-3
4	D-5	SD3	堆積土	ﾛｸﾛ土師器	坏		4.8		ロクロナデ 底：植物種子痕	ヘラミガキ 黒色処理	胎土緻密	25-4
5	D-2		Ⅰ～Ⅳ	赤焼土器	坏		(6.0)		ロクロナデ 底：切離し不明 磨滅	コテあて調整	胎土緻密	25-5
6	A-2	SD3	堆積土	縄文土器	深鉢				R 撚糸文			25-6
7	A-1	SD1	堆積土	縄文土器	深鉢				沈線文区画 RL 縄文？			25-7
8	J-2	SD1	堆積土	磁器	碗	(7.8)			染付 菊花文散し 透明釉		肥前 18c 後半～19c 前半 胎土白色	25-8
9	I-1	SD1	堆積土	陶器	碗	(7.4)	3.1	4.8	ロクロナデ 削り高台 灰釉	灰釉	大堀相馬 18c 中頃～後半	25-9
10	I-2	SD1	堆積土	陶器	小壺	(7.2)			灰釉	灰釉		25-10
11	J-1	SD1	堆積土	磁器	小皿	(12.2)	(7.2)	2.4	白磁 透明釉	見込「寿」字文 型押陰刻	瀬戸美濃 19c 中頃～後半	25-11

図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量（cm）			備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ		
12	F-1		検出面	瓦	丸瓦			2.1	凸面：ナデ 凹面：コビキ痕 布目	25-12
13	G-1	SD1	堆積土	瓦	平瓦			1.8	凸面：ナデ 凹面：ナデ	25-13

第 49 図　第３次調査区出土遺物



図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量（cm）			備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ		
1	G-2	SD1	堆積土	瓦	平瓦			1.7	凸面：ナデ 櫛目状痕１列 凹面：ナデ	25-14
2	K-3	SD3	堆積土	石器	不定形石器	9.1	10.6	2.8	石核 重さ 300g	25-16
3	K-1	SD1	堆積土	打製石器	不定形石器	2.7	1.1	0.35	縦長剝片素材 重さ 1.3g	25-15
4	K-2	SD1	1	石器	磨製石斧	12.2	5.2	2.7	胴部欠損　安山岩 重さ 220g	25-17

第 50 図　第３次調査区出土遺物

SD3 溝跡

調査区中央南寄り～北西にかけて検出された北西－南東方向に延びる溝跡で、SD1・2 溝跡より古い。検出長は約 11.4m で、調査区外の南北方向へさらに延びる。規模は上端幅約 1.0 ～ 1.4m、下端幅約 0.5 ～ 0.7m、深さは約 0.3m である。断面形状は皿形ないし半円形を呈し、立ち上がりはやや急角度である。堆積土は２層確認された。出土遺物は、堆積土から縄文土器、非ロクロ土師器、ロクロ土師器、石器等が出土しており、その中から縄文土器１点（第 49 図 6）、ロクロ土師器坏 3 点（第 49 図 1）、不定形石器１点（第 50 図 2）を図化した。

SD4 溝跡

調査区中央東寄りで検出された南北方向に延びる溝跡で、SD1 溝跡より古い。検出長は約 1.8m で、調査区外の南北方向へさらに延びる。規模は上端幅約 0.8m、下端幅約 0.3m、深さは検出面から約 0.3m である。断面形状は半円形を呈し、立ち上がりはやや急角度である。堆積土は３層確認された。遺物は出土していない。

（３）ピット

P1 ～ 14

調査区全域に散在しているが、主に中央部から西側で検出された。平面形状は円形ないしやや歪な楕円形を呈し、径約15～30㎝のものと径約50～70㎝のものがある。検出面からの深さは10～18㎝である。堆積土は１層のみで、柱痕跡は確認されなかった。また P11 ～ 14 の４基は規模・堆積土等が類似しており、約 0.8m の等間隔に並んでいることから、柱列の可能性が考えられる。遺物は出土していない。

（４）遺構外出土遺物

検出面や撹乱等から縄文土器、非ロクロ土師器、ロクロ土師器、赤焼土器、須恵器、陶器、磁器、瓦、金属製品等が出土しており、その中から１点（第 49 図５）、丸瓦１点（第 49 図 12）を図化した。

５．まとめ

今回の調査は、京ノ中遺跡の北端部に位置し、今回の建築計画に伴い実施した試掘調査により遺跡範囲を拡大した箇所である。

今回の調査で発見された遺構は、溝跡、柱列、ピットなどである。溝跡のうち調査区の大半を占める SD1 溝跡は、1975 年の航空写真（写真図版 23-5）でも確認できる用水路とほぼ位置が合致している。出土遺物は、縄文土器や土師器、近世から近現代の陶磁器に加え、ビニールゴミも混入しており、水路機能時に京ノ中遺跡を含む周辺の遺跡から混入した可能性も考えられる。SD2 ～ 4 溝跡は古代の溝跡で、第１・２次調査で確認された集落との関連がうかがわれる。今回の調査区からは竪穴住居跡は確認されなかったことから集落の範囲は本調査区まで広がっておらず、その外縁部に位置するものと考えられる。

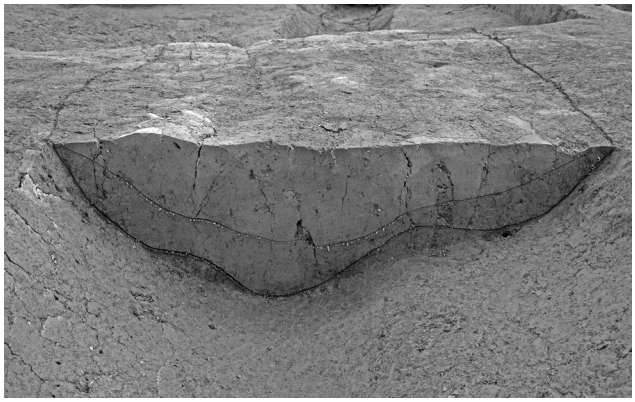
引用・参考文献

仙台市教育委員会　2010　『沼向遺跡第 4 ～ 34 次調査』仙台市文化財調査報告書第 360 集
仙台市教育委員会　2018　『鍛冶屋敷 A 遺跡・富沢館跡・川前遺跡ほか』仙台市文化財調査報告書第 466 集
仙台市教育委員会　2020　『京ノ中遺跡第 2 次調査』仙台市文化財調査報告書第 481 集

１．調査区完掘状況全景（１）（東から）

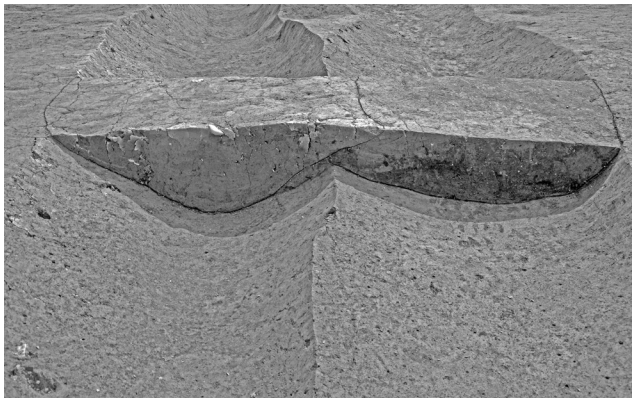
２．調査区完掘状況全景（２）（西から）

写真図版 22　京ノ中遺跡第３次調査（１）



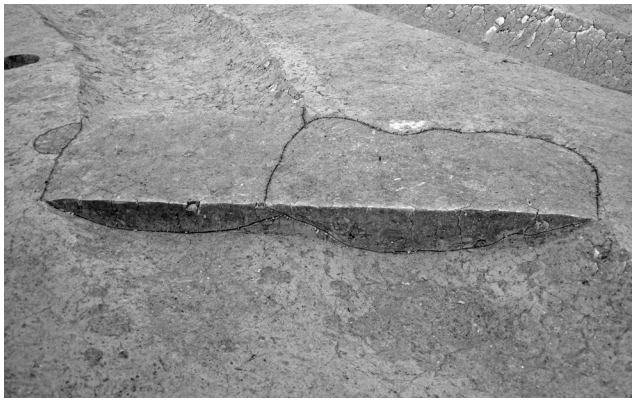
１.SD1 溝跡土層断面 D-D´（西から）

２.SD1 溝跡完掘状況（西から）

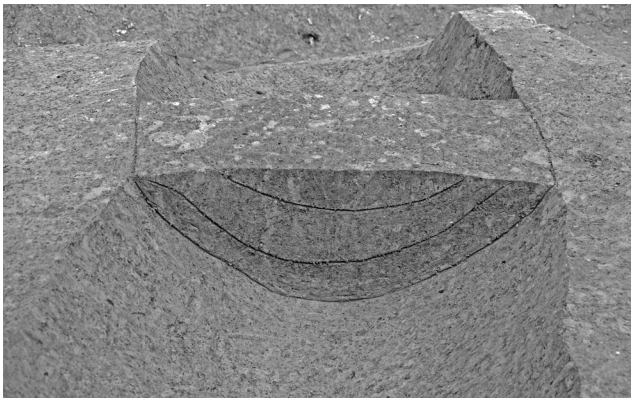


３.SD1・3 溝跡土層断面 E-E´（西から）

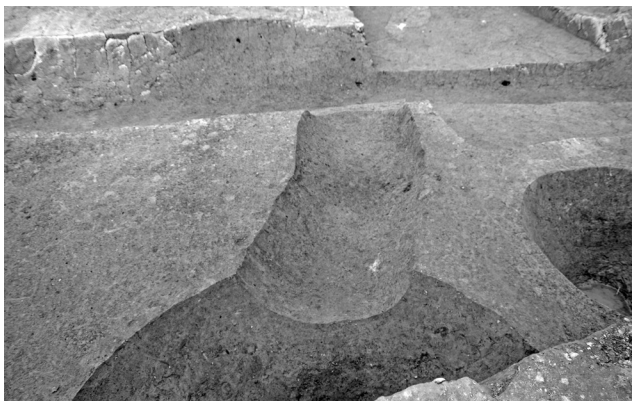
４.SD2・3 溝跡完掘状況（北西から）



５.SD2・3 土層断面 F-F´（南から）



６.SD4 溝跡土層断面（南から）

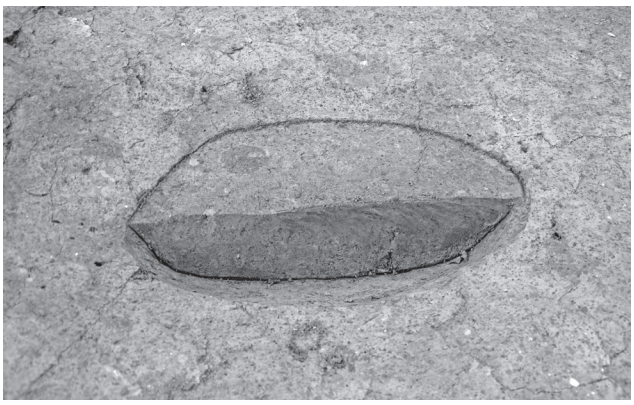


７.SD4 溝跡完掘状況（南から）

８.P3 土層断面（南から）

写真図版 23　京ノ中遺跡第３次調査（２）

１. P10 ～ 14 完掘状況（北から）



２. P13 土層断面（南から）

３. 調査区北壁中央付近基本層断面（南から）

４. 検出面Ⅴ層以下基本層断面（東から）

５. 国土地理院撮影航空写真（1975 年撮影）

写真図版 24　京ノ中遺跡第３次調査（３）

写真図版 25　京ノ中遺跡第３次調査出土遺物

第６章　総括

１．穴田東窯跡第１次調査

今回の調査地点は遺跡の北側に位置する。穴田東窯跡はこれまで遺構は見つかっていなかったが、今回の調査で初めて窯跡２基、溝跡２条、灰原２基が検出され、289 kg以上の遺物が出土した。そのほとんどが瓦であったことから窯跡は瓦を主体に生産した瓦窯であったことが判明した。検出された遺構はSO2 窯跡が最も古く、SO1 窯跡とSD1・2 溝跡は同時期に機能した一連の遺構で、2 号灰原は最も新しい遺構である可能性が高く、斜面の下側から順に遺構が構築されたものと考えられる。SO1 窯跡の南側には１号灰原が、両脇にはSD1・2 溝跡が配されておりSD1・2 溝跡はSO1 窯跡の周囲をめぐる排水溝、もしくは作業用の通路であったと推測される。

出土した軒瓦が宝相華文軒丸瓦と連珠文軒平瓦のみであることから、遺構の時期は多賀城Ⅳ期の９世紀後半以降に比定されるが、この時期は貞観 11（869）年に起きた大地震により多賀城や陸奥国分寺などにも大きな被害が出たことが知られており、実際に陸奥国分寺跡では今回出土した宝相華文軒丸瓦と連珠文軒平瓦は創建期の瓦に次ぐ量が出土している。穴田東窯跡の近隣の堤町Ｂ窯跡や堤町瓦窯跡、五本松窯跡などでも同様の軒先瓦や須恵器が出土していることから、これらの窯跡は一連の窯跡群を形成し、貞観地震からの復興のために瓦を生産していたと考えられる。また平瓦は凹型台を利用して凹面を調整したＢ類が一定数出土した。この形式は多賀城跡の調査では平瓦ⅡＢ類に、陸奥国分寺の 1989 年の調査ではⅤ類に分類され、時期は多賀城Ⅲ期（9 世紀後半以前）までと想定されていた。しかし前述した五本松窯跡の第１・２次調査や利府町の硯沢・大沢窯跡の調査でも多賀城Ⅳ期以降の軒瓦がこのⅡＢ類の平瓦とともに出土しており、多賀城Ⅳ期以降も製作されていたことが指摘されていた。今回の穴田東窯跡で出土した資料についてもそれを裏付けるものであると言える。

２．富沢遺跡第 151 次調査

調査地点は、遺跡の中央よりやや東に位置する。調査の結果、水田跡５面が検出され、南北方向の畦畔状の段差１条と非耕作域１箇所がわずかに確認された。畦畔状の段差は火山灰を含む土層を母材としており、今回の調査地点の北西隣接地で実施された第 13 次調査で検出された畦畔とほぼ同一方向かつ同一の層位であることから、関連する同時期の遺構であると考えられる。

３．富沢遺跡第 152 次調査

調査地点は遺跡北端に位置し、対象地内に 24 ㎡の東西に長いトレンチを設定して行った。調査地点では過去の調査歴より、古代の条里型土地割に関わる大畦畔の検出が想定されていた。しかし、土地造成前の耕作による上層からの攪乱を受け、水田跡や畦畔、火山灰層などは確認されなかった。

４．富沢館跡第 20 次調査

調査地点は、遺跡東端に位置する。調査は計４か所のトレンチで行い、溝跡２条が検出された。特に南北方向のSD1 は、幅 7.7m 以上、深さ 0.7m 遺構という規模からも堀跡であると考えられる。今回の調査地点の南側で実施された確認調査（Ⅳ-44 区）で検出された堀跡と同一の遺構であると考えられ、北へ伸びていくものと想定されたが、今回の調査範囲の北半では堀跡が検出されなかったことから、東に屈曲するか途切れる可能性が考えられる。

５．富沢館跡第 21 次調査

調査地点は、遺跡北東部に位置し、2 か所のトレンチで調査を行った。調査地点は後世の土地利用によって大きく撹拌されていたが、溝跡 1 条と推測される遺構が 1 条検出された。今回の調査範囲は、第 2 次、第 3 次調査で検出された北西―南東の溝跡の中間部に位置しており、土層の特徴と検出標高の比較から、第 21 次調査の SD1 はプランが不明瞭ではあるものの、それら調査で確認された溝跡の延長部であると推測される。

６．京ノ中遺跡第３次調査

調査地点は、遺跡の北部に位置する。発見された遺構は溝跡、ピットである。第１・２次調査で確認されている竪穴住居跡は、本調査区では確認されなかったことから、居住域の北側は本調査区まで至っていないことが確認された。検出された溝跡や基本層中からは、古代の土師器や須恵器を中心に縄文土器や石器、中近世以降の陶磁器、瓦等が出土した。

報告書抄録

ふりがな	あなだひがしかまあとほか
書名	穴田東窯跡ほか
副書名	発掘調査報告書
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 498 集
編著者名	及川謙作　早川太陽　木村　恒　澤目雄大　斎野裕彦
編集機関	仙台市教育委員会
所在地	〒 980-0011　仙台市青葉区上杉一丁目 5-12　仙台市役所　上杉分庁舎 10 階　TEL：022-214-8894
発行年月日	令和 4 年 4 月 11 日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
	要約							
あなだひがしかまあと 穴田東窯跡 （第 1 次）	宮城県仙台市青葉区堤町２丁目	04101	01444	38°　17’19”	140°　52’01”	2021.7.8 ～ 2021.7.30	約 70.0 ㎡	記録保存調査 （共同住宅建築）
	窯跡	平安		窯跡、溝跡、灰原		瓦、須恵器		
	窯跡 2 基と付随する形で溝跡と灰原が検出された。各遺構および基本層からは大量の瓦が出土した。							
とみざわ 富沢遺跡 （第 151 次）	みやぎけんせんだいしたいはくく 宮城県仙台市太白区 長町南３丁目	04104	01369	38°　13’28’’	140°　52’41”	2021.8.23 ～ 2021.10.18	約 93.6 ㎡	記録保存調査 （共同住宅建築）
	水田跡、包含地	旧石器 ～近世		水田跡		土師器、須恵器、陶器、磁器、瓦、自然遺物		
	水田跡 5 面、畦畔状の段差 1 条と非耕作域が検出された。遺物は主に土師器が出土した。							
とみざわ 富沢遺跡 （第 152 次）	みやぎけんせんだいしたいはくく 宮城県仙台市太白区 鹿野３丁目	04104	01369	38°　13’35’’	140°　52’22”	2021.12.6 ～ 2021.12.10	約 24.0 ㎡	記録保存調査 （共同住宅建築）
	水田跡、包含地	旧石器 ～近世		水田跡		土師器		
	水田跡や畦畔は検出されなかった。							
とみざわたて 富沢館跡 （第 20 次）	宮城県仙台市富沢駅西土地区画整理事業地内	04104	01246	38°　12’50”	140°　51’48”	2020.11.30 ～ 2020.12.11	約 138.0 ㎡	記録保存調査 （共同住宅建築）
	城館跡、集落跡	縄文・ 平安～近世		溝跡		土師器		
	中～近世の城館に伴うと考えられる、堀跡が検出された。							
とみざわたて 富沢館跡 （第 21 次）	みやぎけんせんだいしたいはくく 宮城県仙台市太白区 とみざわあざたて 富沢字館	04104	01246	38°　12’54”	140°　51’44”	2021.1.7 ～ 2021.1.8	約 37.5 ㎡	記録保存調査 （共同住宅建築）
	城館跡、集落跡	縄文・ 平安～近世		溝跡		遺物なし		
	中～近世の城館に伴うと考えられる、堀跡が検出された。							
きょうのなか 京ノ中遺跡 （第３次）	みやぎけんせんだいしたいはくく 宮城県仙台市太白区 とみざわあざきょうのきた 富沢字京ノ北	04104	01573	38°　12’41’’	140°　51’19”	2021.3.4 ～ 2021.3.25	約 646.0 ㎡	記録保存調査 （共同住宅建築）
	集落跡	奈良～中世						
	遺跡の北辺を区画すると推測される溝跡が検出され、古代から近世にかけての遺物が出土した。							

仙台市文化財調査報告書第 498 集

穴田東窯跡 ほか

発掘調査報告書

2022 年 4 月

発行　仙台市教育委員会
仙台市青葉区上杉 1 丁目 5-12
仙台市役所上杉分庁舎 10 階
文化財課 TEL 022（214）8894

印刷　株式会社 仙台紙工印刷
仙台市宮城野区苦竹三丁目 1-14
TEL 022（231）2245㈹